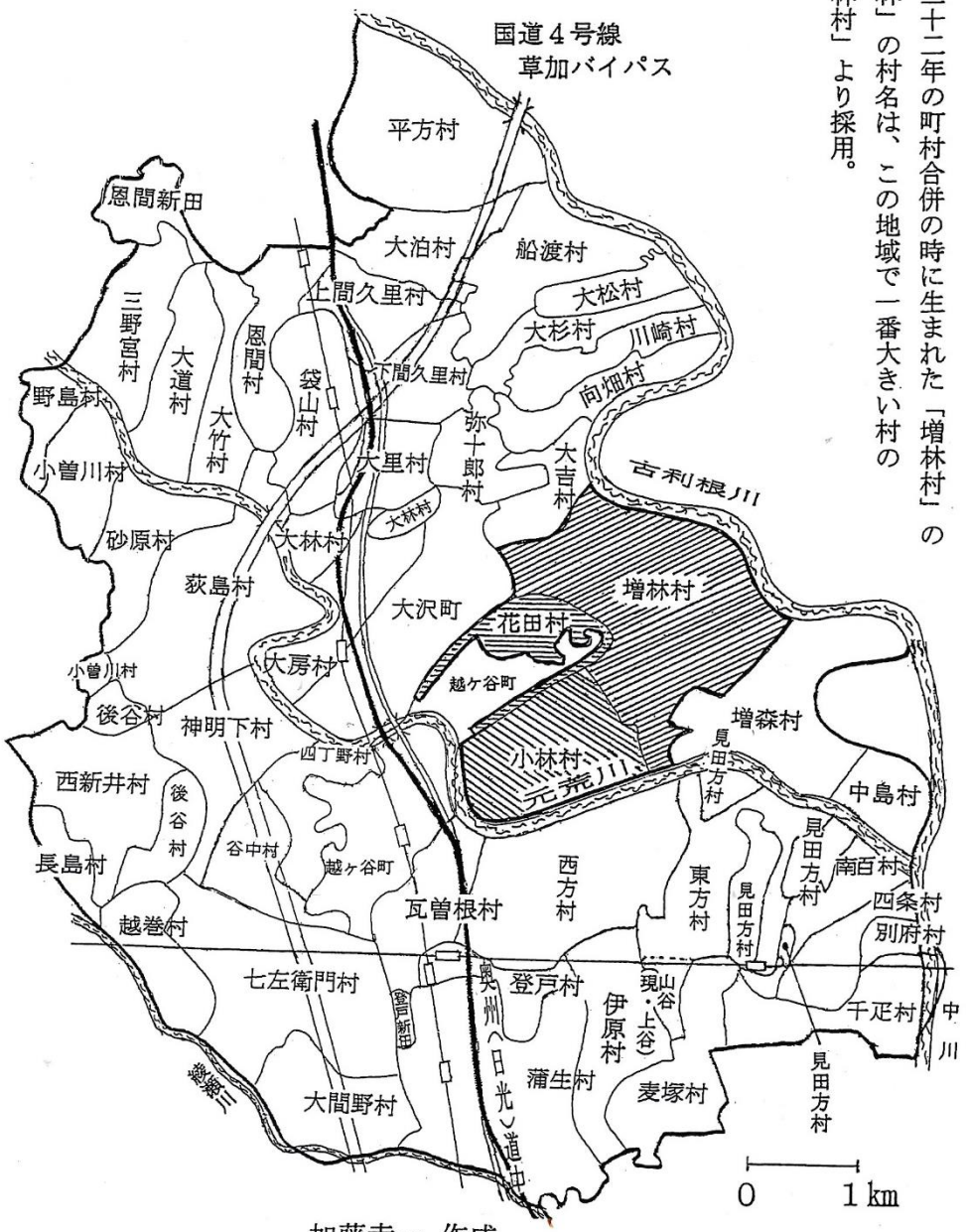
平成１１・１２年度調査
1999・2000

増林地区の石仏石塔

増林村（ましばやし）・増森村（ましもり）・中島村（なかじま）・花田村（はなた）・小林村（こばやし）

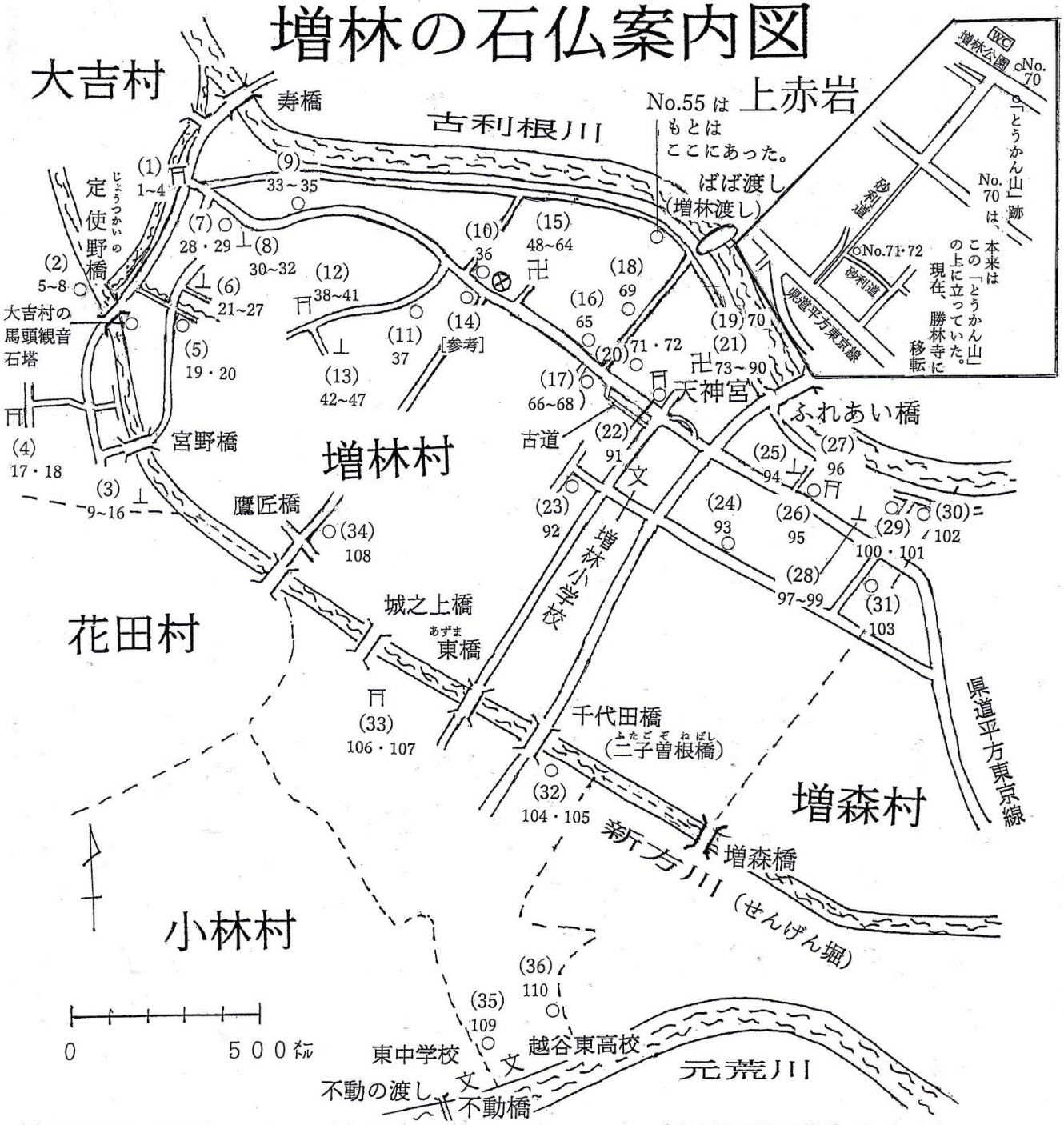
令和４年(2022)改訂

明治二十二年の町村合併の時に生まれた「増林村」の「増林」の村名は、この地域で一番大きい村の「増林村」より採用。



加藤幸一 作成

増林の石仏案内図



(1)増林前波の水神宮 No.1~4　(2)定使野橋そば水神宮 No.5~8　(3)定使野共同墓地 No.9~16
(4)島田家[花田 2-3-7] No.17・18　(5)「かけい堀」そば十字路 No.19・20　(6)清涼院墓地 No.21~27
(7)平野家[増林 3500]邸内 No.28・29　(8)平野家個人墓地 No.30~32　(9)笹原組の庚申塔 No.33~35
(10)鈴木家[増林 3763]路傍 No.36(11)今井家[増林 3711]路傍 No.37(12)護郷神社(浅間神社)No.38~41
(13)福寿院墓地 No.42~47　(14)須賀家[増林 3781]前[参考]　(15)林泉寺 No.48~64
(16)今井家[増林 3894]路傍 No.65　(17)須賀家[増林 2-431]邸内 No.66~68　(18)須賀家邸内の
稲荷社 No.69　(19)勝林寺北西の「とうかん山」No.70　(20)須賀家南西路傍 No.71・72
(21)勝林寺 No.73~90　(22)岡安家[増林 2707]　路傍 No.91　(23)岡安家[増林 2-369]そば路傍 No.92
(24)宮川家[3-174]路傍 No.93　(25)増林下組地蔵堂 No.94　(26)山崎家[増林 3-190]そば路傍 No.95
(27)増林下組香取神社 No.96　(28)下組集会所 No.97~99　(29)白山神社 No.100・101
(30)古利根川の土手道路傍 No.102　(31)名倉家[増林 3-269]邸内 No.103　(32)千代田橋 No.104・105
(33)城ノ上稲荷神社 No.106・107　(34)須賀家[増林 1-4]そば排水路 No.108
(35)百木家[増林 5643]No.109　(36)山崎家[増林 5606]No.110

増森・中島の石仏案内図

増森村

(1)観音堂墓地	No. 1
(2)河原崎の内田稲荷	No. 2
(3)宝 正 院	No. 3～5
(4)消防増林分団小屋	No. 6
(5)小島家[増森 1723-2][参考]	
(6)薬 師 堂	No. 7~14
(7)増森神社	No. 15
(8)中村家[増森2-47]	No. 16・17
(9)増森新田の稲荷社	No. 18~23
(10)増森新田センター	No. 24~28
(11)吉田家[増森2484]	No. 29
(12)森西川集会所	No. 30~34

中島村

(1)林家[中島1-79]	No. 1
(2)中島神社	No. 2
(3)正福寺管轄の共同墓地	No. 3・4
(4)小川家[中島2-89]	No. 5~7
(5)鈴木家[中島 2-119-1]	No. 8
(6)送水管近くの路傍	No. 9・10



平成１２年当時の地図

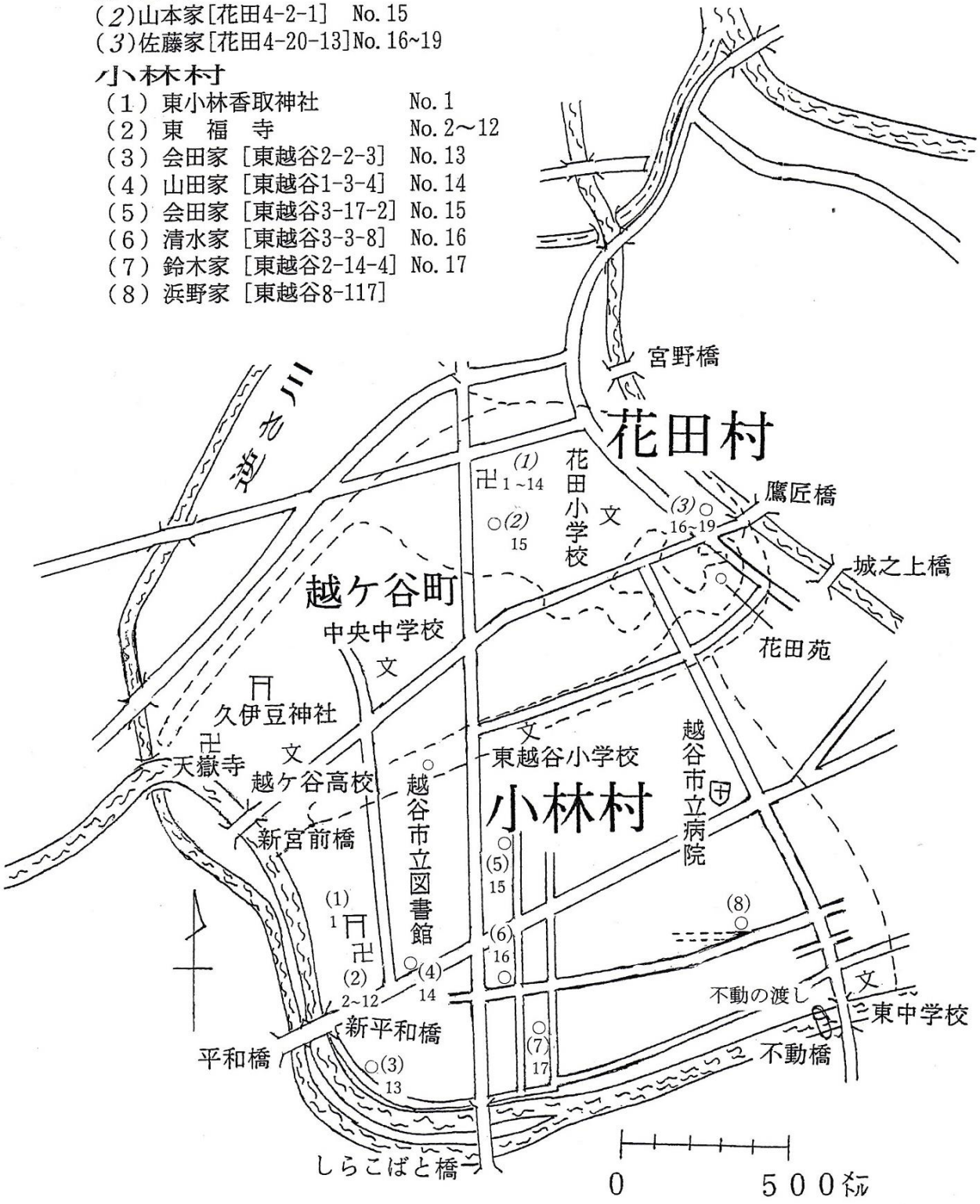
花田・小林の石仏案内図

花田村

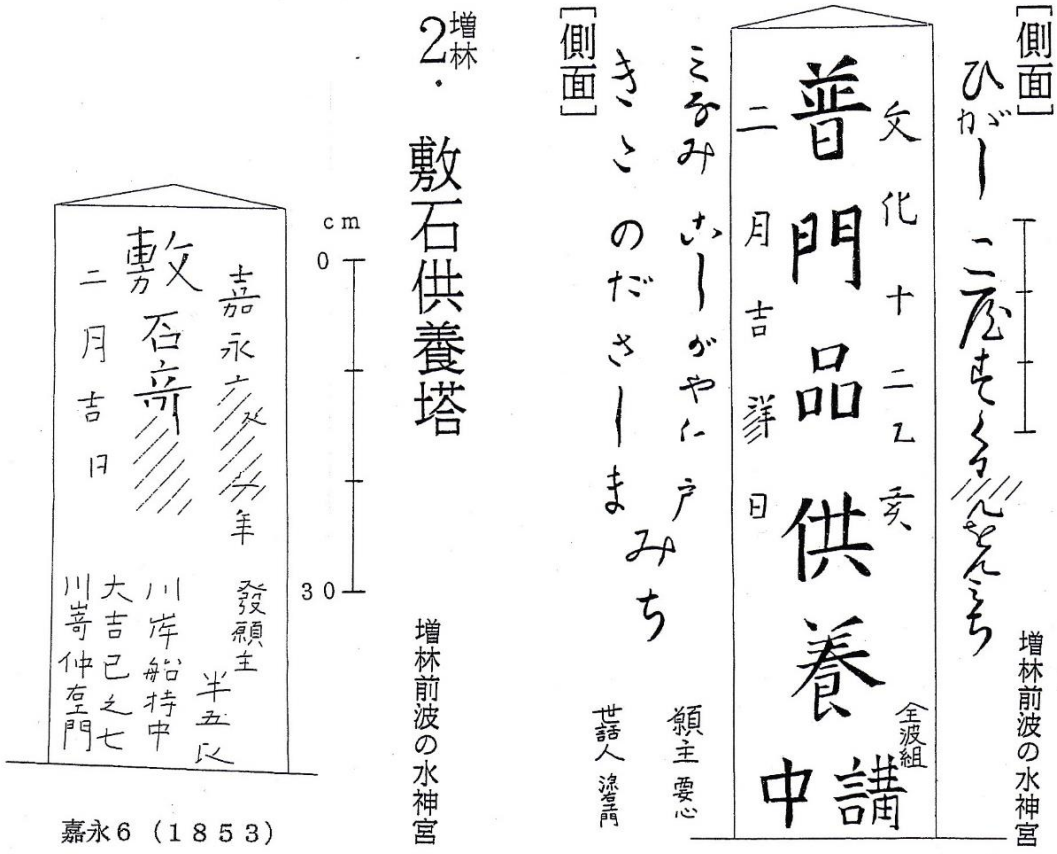
(1)西 円 寺　　No. 1～14
(2)山本家[花田4-2-1]　No. 15
(3)佐藤家[花田4-20-13]No. 16~19

小林村

（1）東小林香取神社　　No. 1
（2）東　福　寺　　No. 2～12
（3）会田家［東越谷2-2-3］　No. 13
（4）山田家［東越谷1-3-4］　No. 14
（5）会田家［東越谷3-17-2］ No. 15
（6）清水家［東越谷3-3-8］　No. 16
（7）鈴木家［東越谷2-14-4］ No. 17
（8）浜野家［東越谷8-117］



増林1・道標付き普門品供養塔

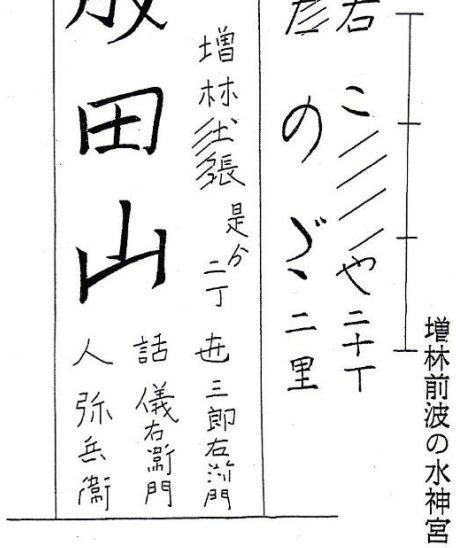


文化12（1815）

増林2・敷石供養塔

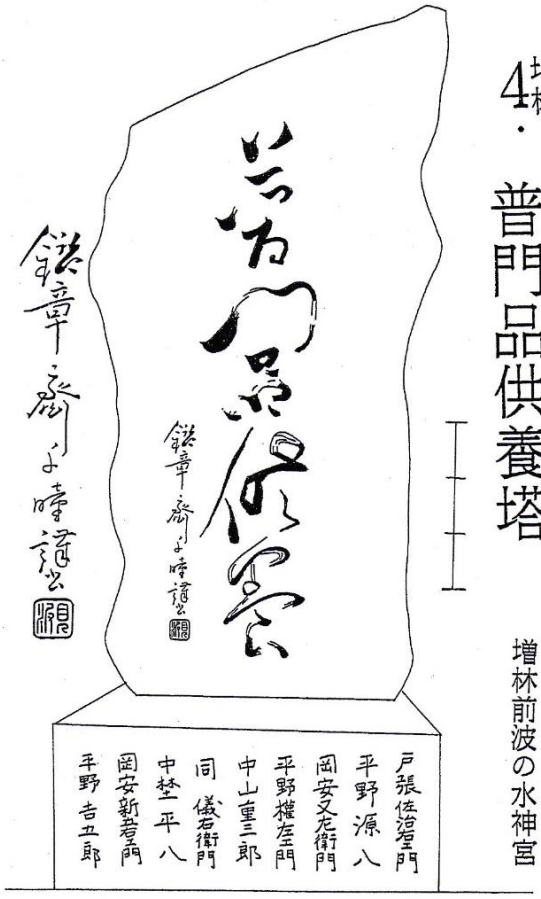
嘉永6（1853）

増林3・道標付き成田山供養塔



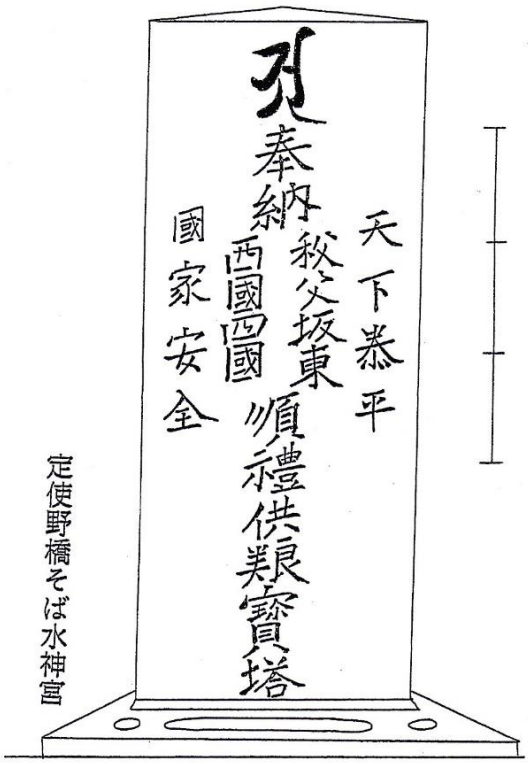
慶応3（1867）

増林4・普門品供養塔



嘉永元（1848）

増林5・百観音・八十八箇所巡礼塔



定使野橋そば水神宮

寛政5（1793）

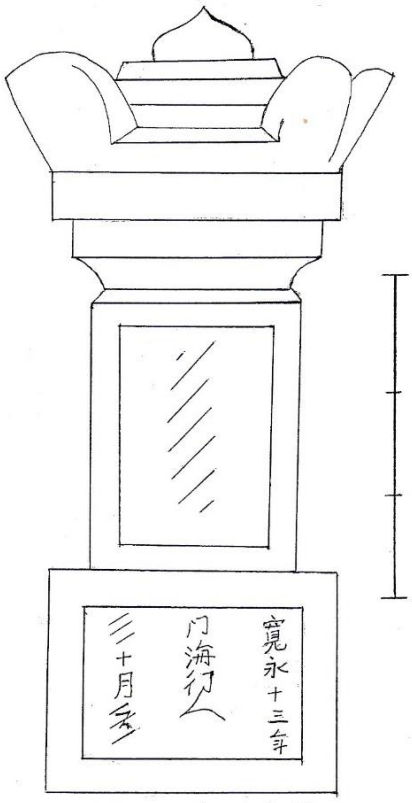
増林6・地蔵像付き念仏塔



定使野橋そば水神宮

宝永8（1711）

追加増林7・宝篋印塔



定使野橋そば水神宮

寛永13（1636）

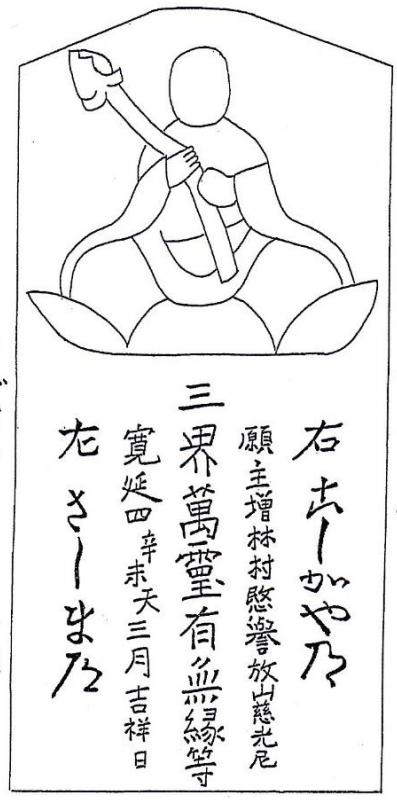
追加増林8・「水神宮」文字塔



定使野橋そば水神宮

嘉永2（1849）

9・増林 道標付き三界万霊塔

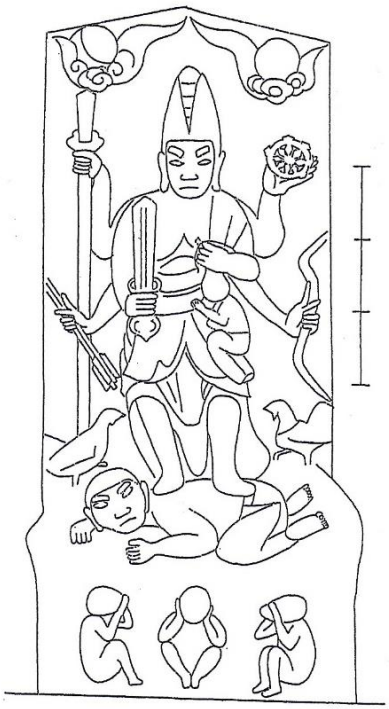


ふさう乃

定使野共同墓地

寛延4（1751））

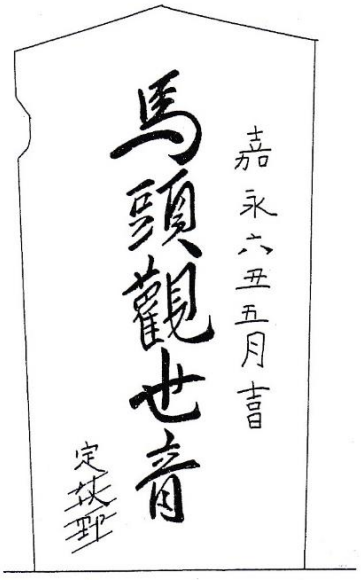
10・増林 青面金剛像庚申塔



定使野共同墓地

安永4（1775）

11・増林 「馬頭観音」文字塔



定使野共同墓地

嘉永6（1853）

12・増林 観音像付き普門品供養塔

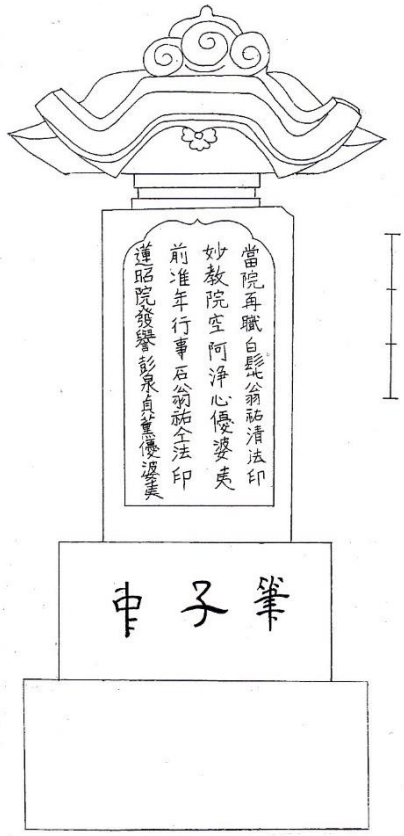


定使野共同墓地

天明9（1789）

追加増林13・

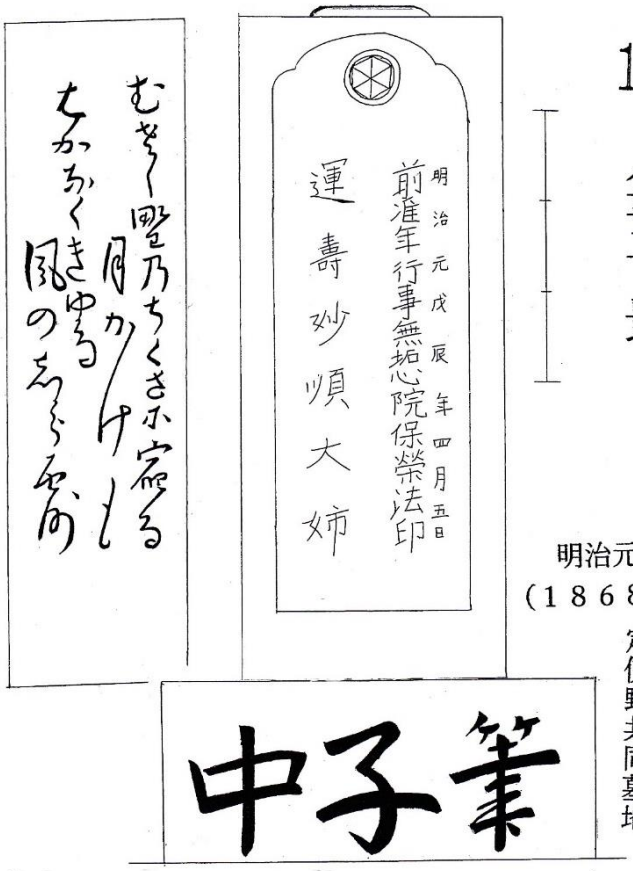
筆子塔



定使野共同墓地

追加増林14・

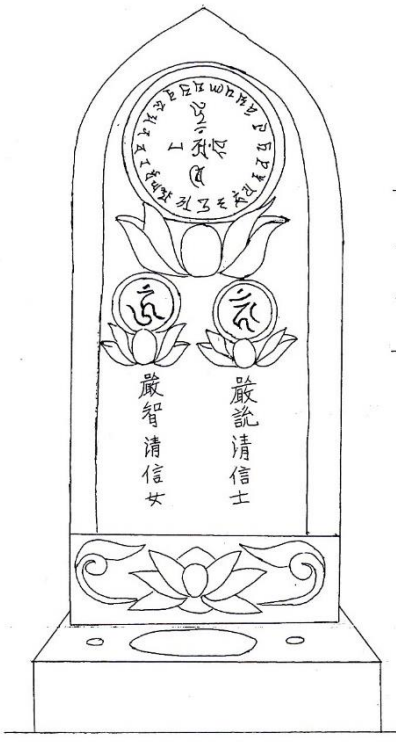
筆子塔



明治元
（１８６８）
定使野共同墓地

追加増林15・

光明真言曼陀羅塔



定使野共同墓地

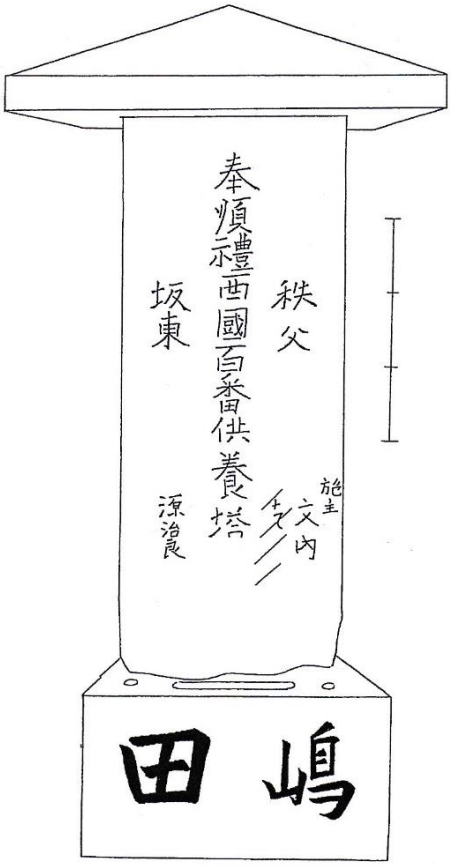
追加増林16・

六十六部供養塔



天保４（１８３３）
定使野共同墓地

17増林・百観音巡礼塔



島田家［花田二―三―七］稲荷社

弘化２（１８４５）

18増林・「荒神」文字塔



島田家［花田二―三―七］稲荷社

元禄７（１６９４）

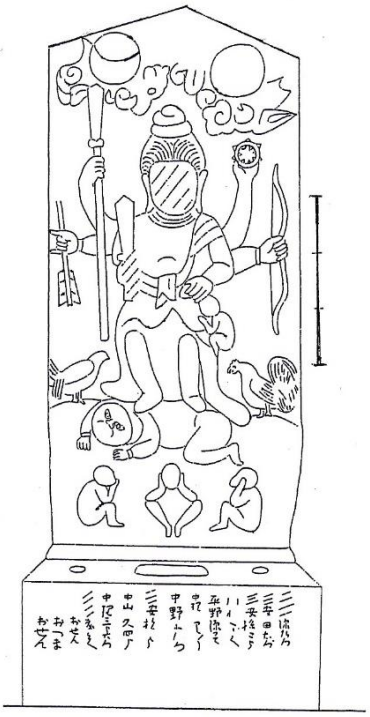
19増林・道標付き文字庚申塔



野田街道「かけい堀」そば十字路

嘉永７（１８５４）

20増林・青面金剛像庚申塔

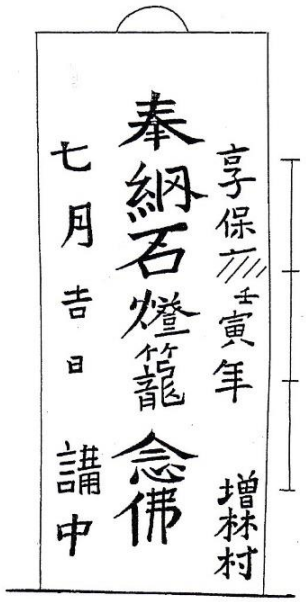


野田街道「かけい堀」そば十字路

元禄１７（１７０４）

21増林・石燈籠供養塔

清涼院墓地



享保7（1722）

22増林・十三仏像容塔

清涼院墓地



明和7（1770）・天明7（1787）

23増林・十九夜念仏を兼ねた三界万霊塔（さんがいばんれい）

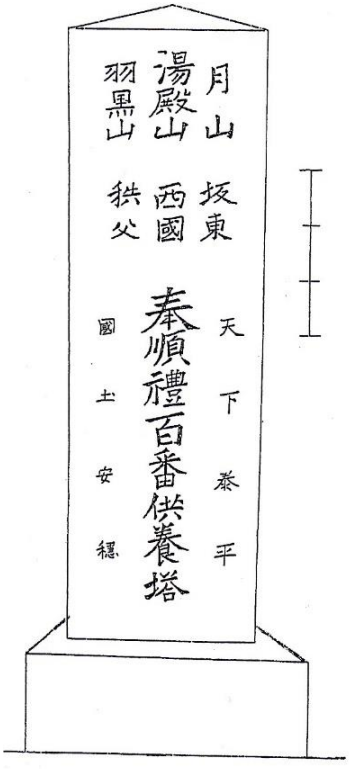
清涼院墓地



寛延4（1751）

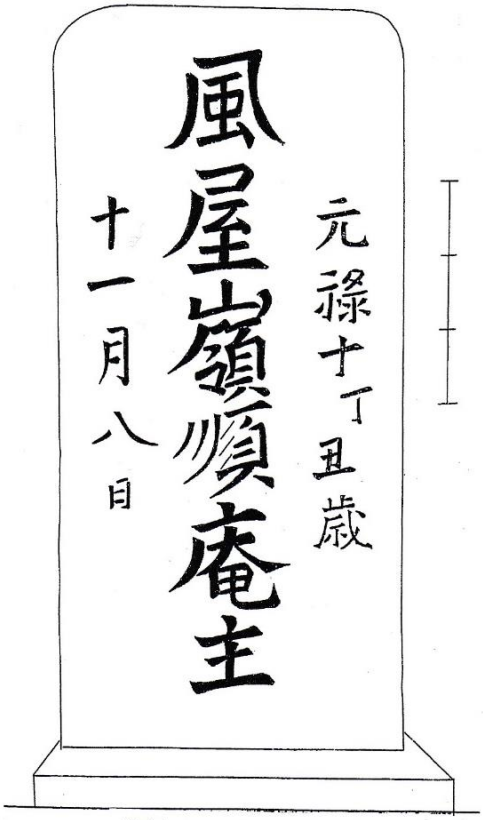
24増林・出羽三山及び百観音巡礼塔

清涼院墓地



文化7（1810）

25増林・清涼院庵主供養塔



清涼院墓地

元禄10（1697）

26追加増林・「暦住塔」文字塔



清涼院墓地

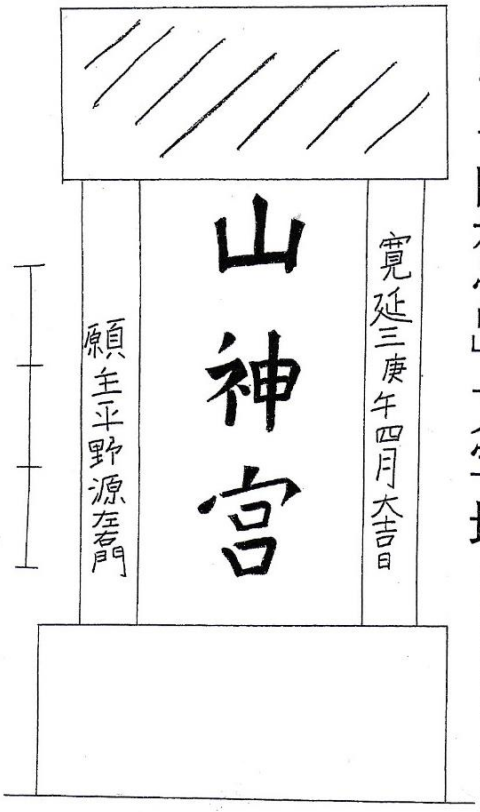
27追加増林・地蔵像付き念仏塔



清涼院墓地

寛文元年（1661）

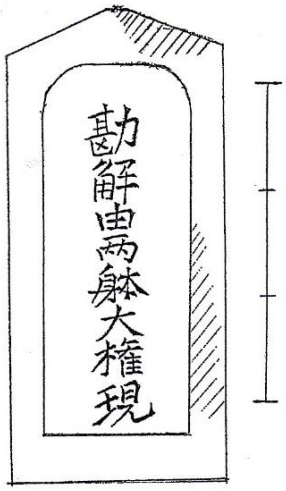
28増林・「山神宮」文字塔



平野家［増林 三五〇〇］

寛延3（1750）

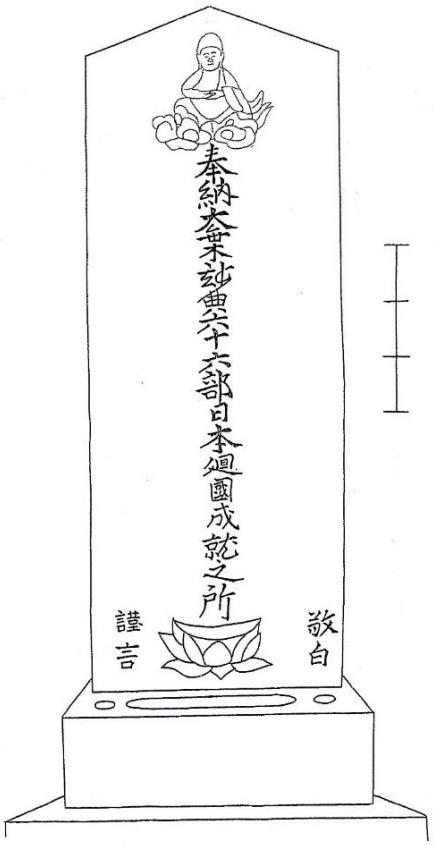
増林29・「勘解由両体大権現」文字塔



平野家[増林三五〇〇]

寛政2（1790）

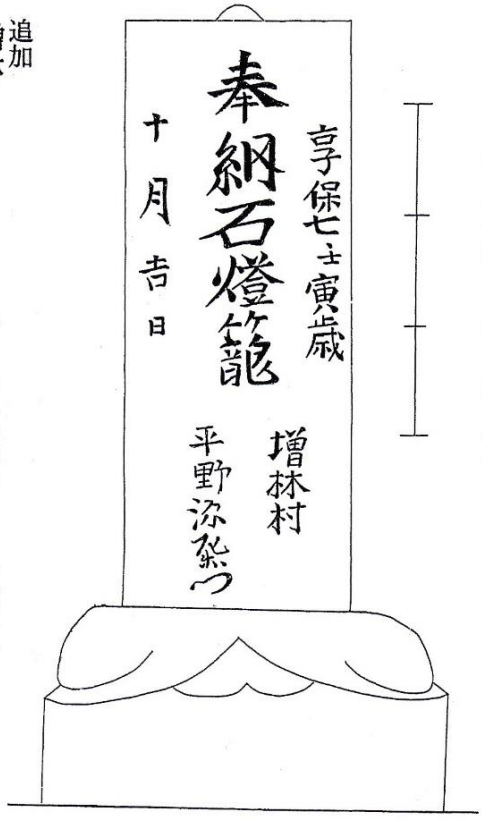
増林30・六十六部廻国塔



平野家個人墓地

享保5（1720）

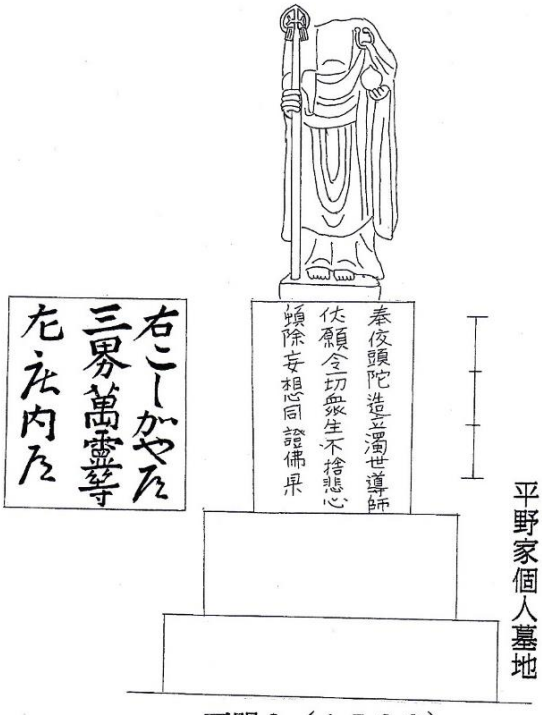
増林31・石燈籠供養塔



平野家個人墓地

享保7（1722）

追加増林32・地蔵像及び道標付き墓塔



平野家個人墓地

天明2（1782）

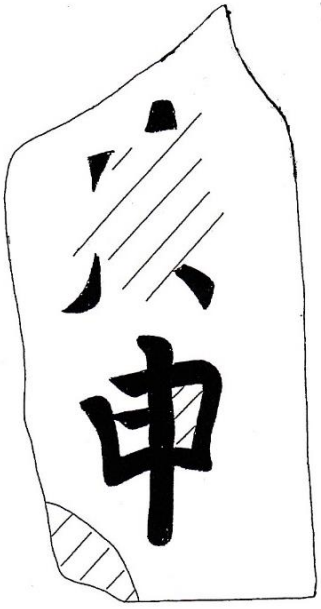
増林33・ 文字庚申塔



赤土製作所の三百㍍西の路傍

文政１３（１８３０）

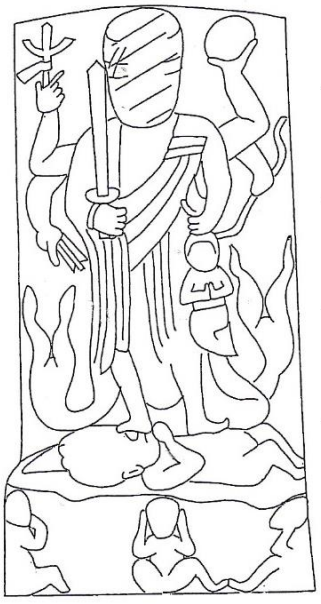
増林34・ 文字庚申塔



赤土製作所の三百㍍西の路傍

文化３（１８０６）

増林35・ 青面金剛像庚申塔



赤土製作所の三百㍍西の路傍

文化３（１８０６）

増林36・ 文字庚申塔



鈴木家［増林三七六三］路傍

横本久助

小菅半三郎

天保７（１８３６）

増林37・文字庚申塔

今井家［増林三七一一］路傍



天保７（１８３６）

増林38・文字庚申塔

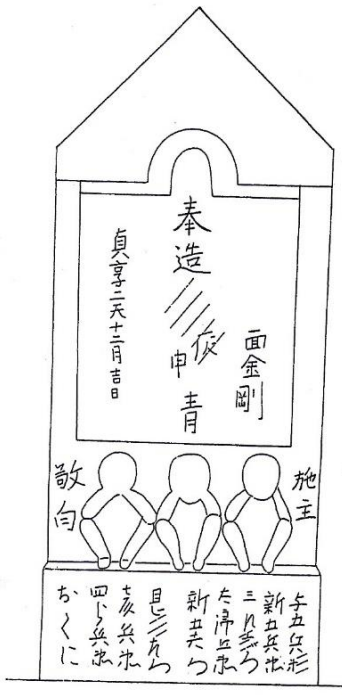
護郷神社（旧「浅間神社」）



文政７（１８２４）

増林39・板碑型三猿庚申塔

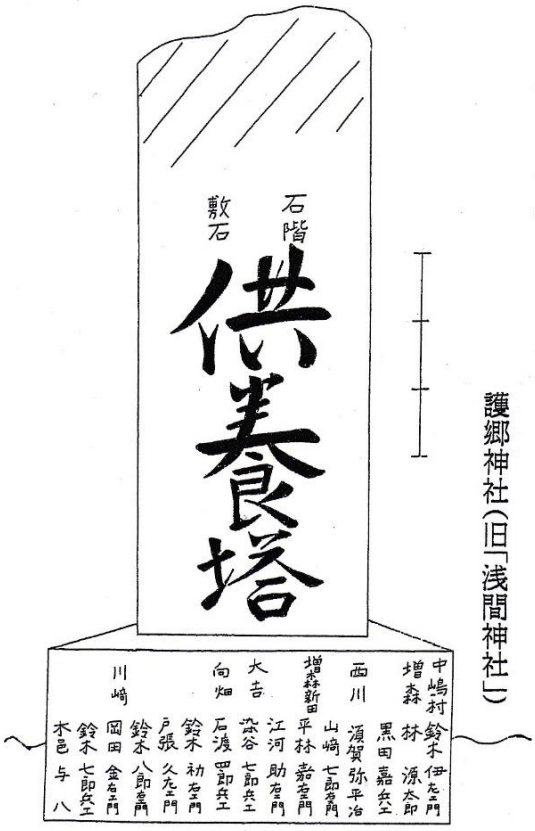
護郷神社（旧「浅間神社」）



貞享２（１６８５）

増林40・石階・敷石供養塔

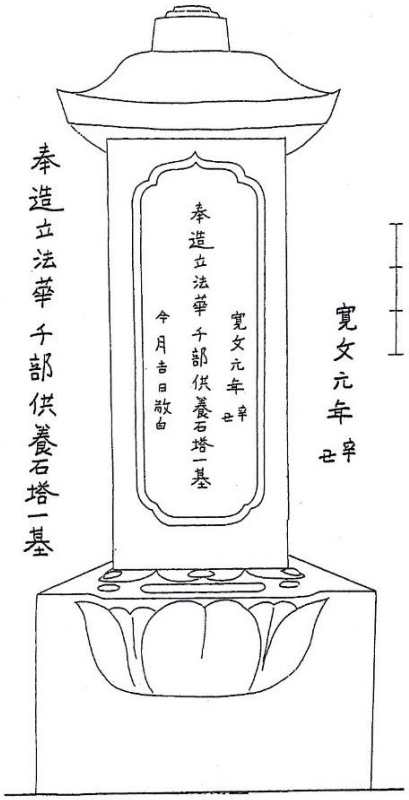
護郷神社（旧「浅間神社」）



天保１０（１８３９）

41・増林 法華経供養塔

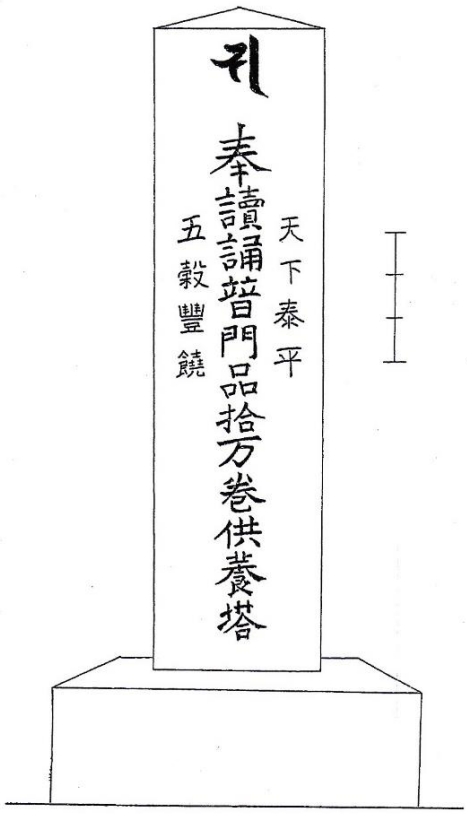
護郷神社（旧「浅間神社」）



寛文元（１６６１）

42・増林 普門品供養塔

福寿院跡墓地



享和２（１８０２）

43・増林 弘法大師像

福寿院跡墓地



安永８（１７７９）

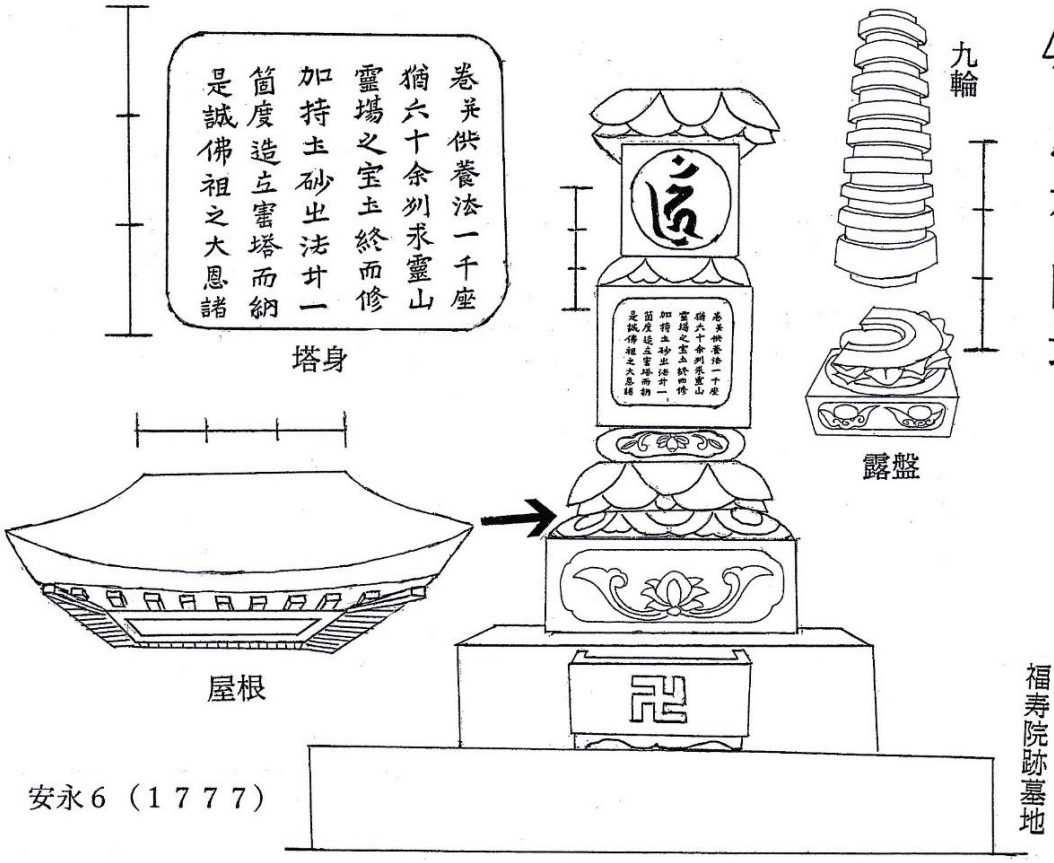
44・増林 不動明王像

福寿院跡墓地



安永７（１７７８）

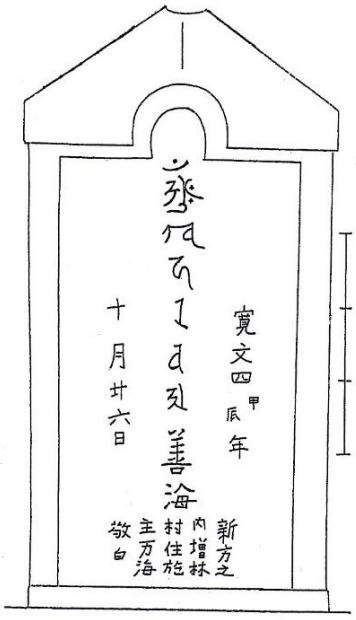
追加 増林 45・宝篋印塔（ほうきょういんとう）



安永６（１７７７）

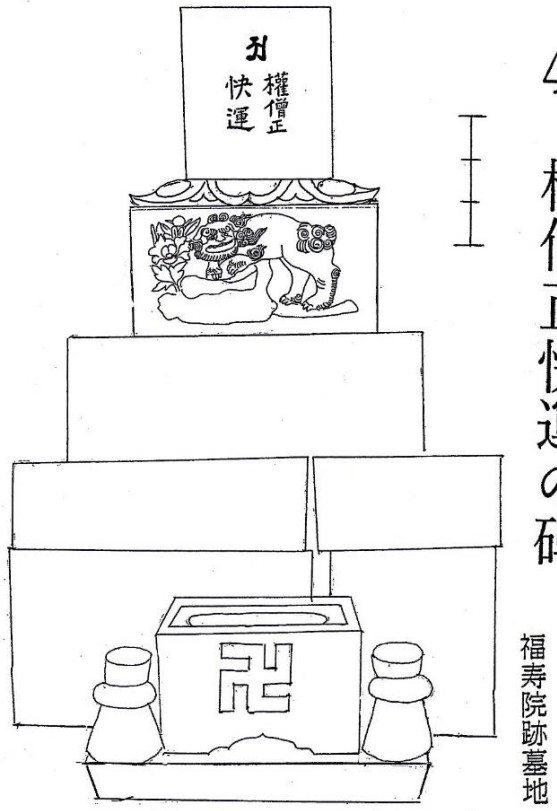
増林 47・五大の梵字塔

須賀家［増林三七八一］前



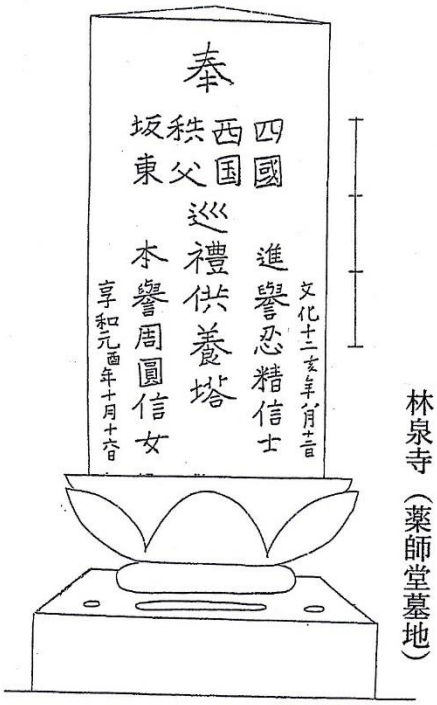
寛文４（１６６４）

追加 増林 46・権僧正快運の碑（ごんそうじょう）



天明元（１７８１）

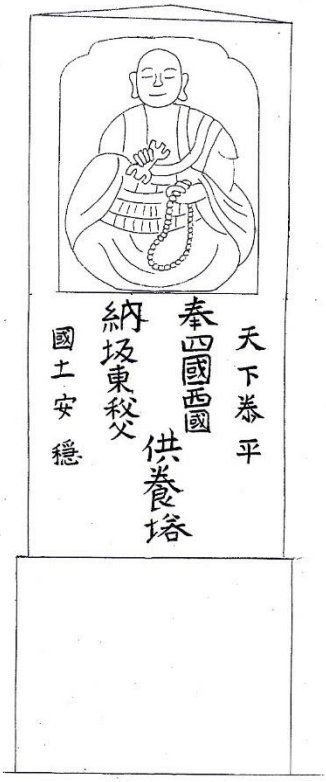
増林48・百観音・八十八箇所巡礼塔



林泉寺（薬師堂墓地）

文化１２（１８１５）

追加増林49・百観音・八十八箇所巡礼塔

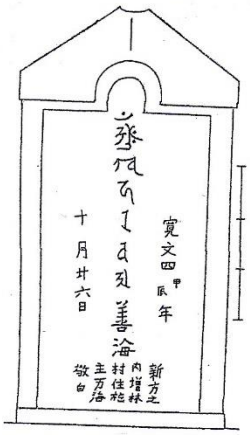


林泉寺（薬師堂墓地）

４９文政５（１８２２）

[参考](14)須賀家前

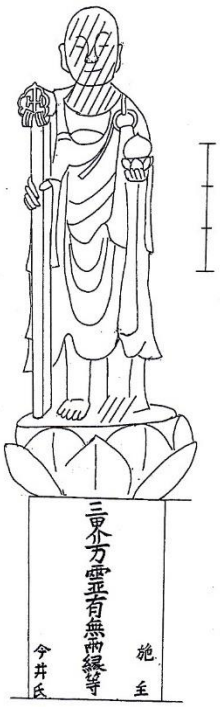
追加増林50・五大（ごだい）の梵字塔 地蔵像付き三界万霊塔（さんがいばんれいとう）



林泉寺（薬師堂墓地）

寛文４（１６６４）

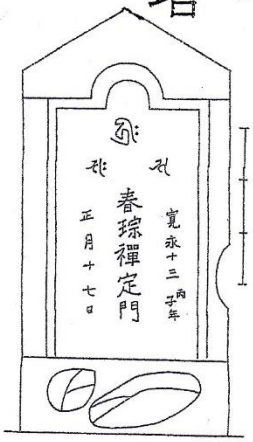
※「アーンク」は大日如来。
※「五大」とは、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の五つをさす。



三界万霊有無冥縁等

延享４（１７４５）

増林51・板碑型墓塔

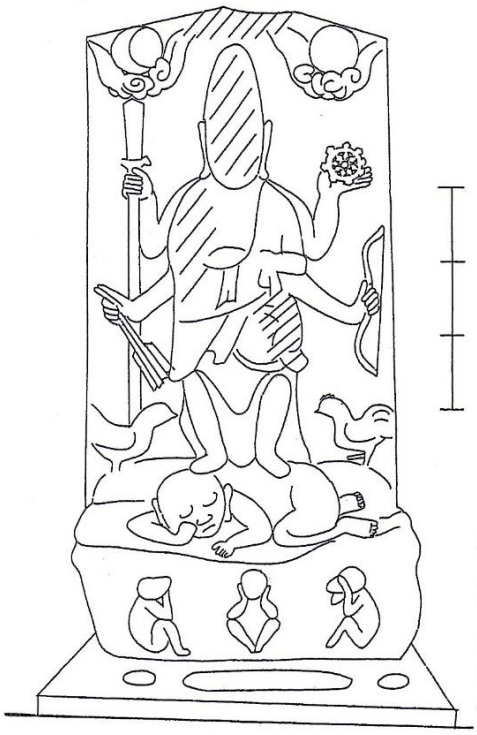


林泉寺（薬師堂墓地）

寛永１３（１６３６）

52 増林・青面金剛像庚申塔

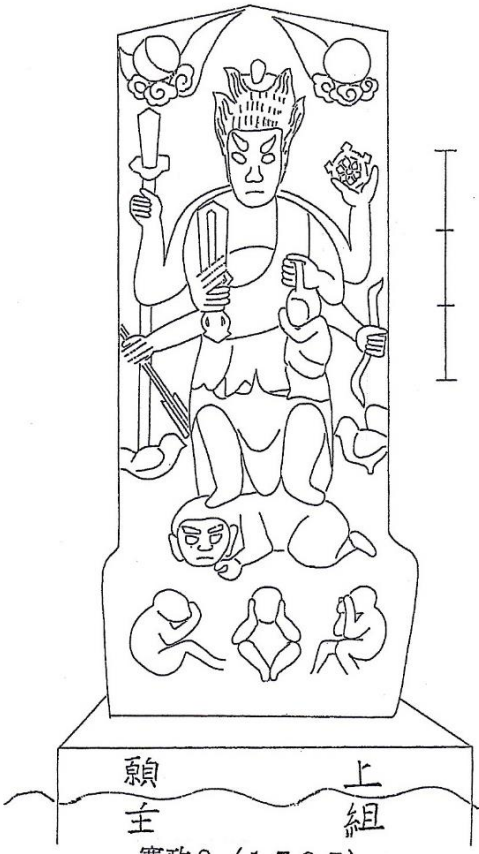
林泉寺（入口）



明和５（１７６８）

53 増林・青面金剛像庚申塔

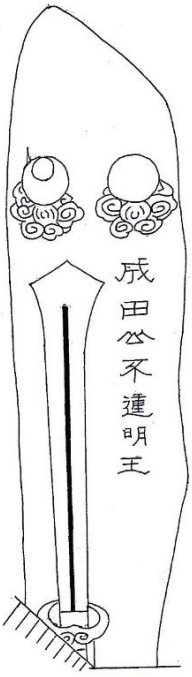
林泉寺（入口）



寛政９（１７９７）

追加 増林 54・「不動剣」石仏

林泉寺（不動堂裏）



明治１４（１８８１）

55 増林・地蔵像付き念仏塔

林泉寺（参道）



嘉永２（１８４９）

追加 増林 56・「三部経」供養塔



林泉寺（地蔵堂墓地）

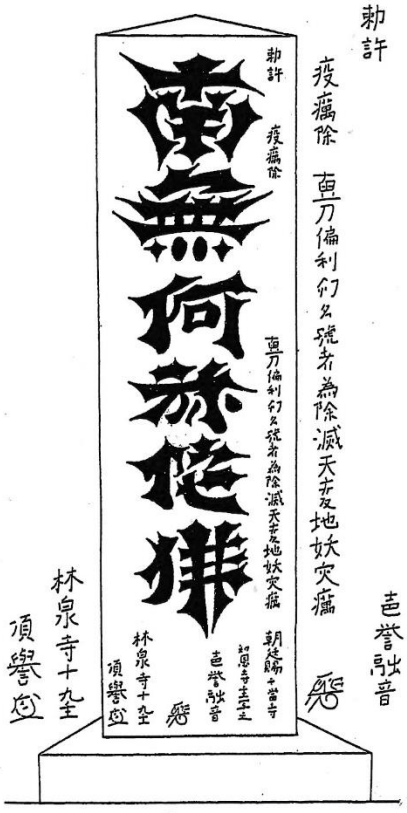
増林 57・地蔵像付き念仏塔



林泉寺（参道南東側墓地）

寛文7（1667）

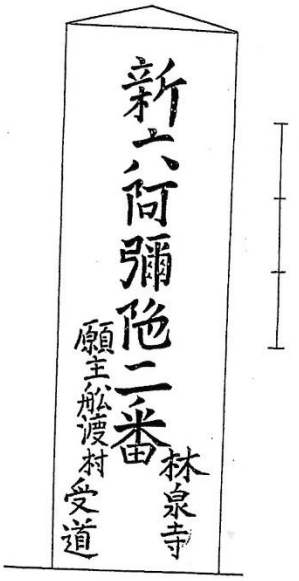
増林 58・利剣名号塔（浅間山噴火供養塔）



林泉寺（山門前）

天明4（1784）

増林 59・『新六阿弥陀二番』標識石塔



林泉寺（山門前）

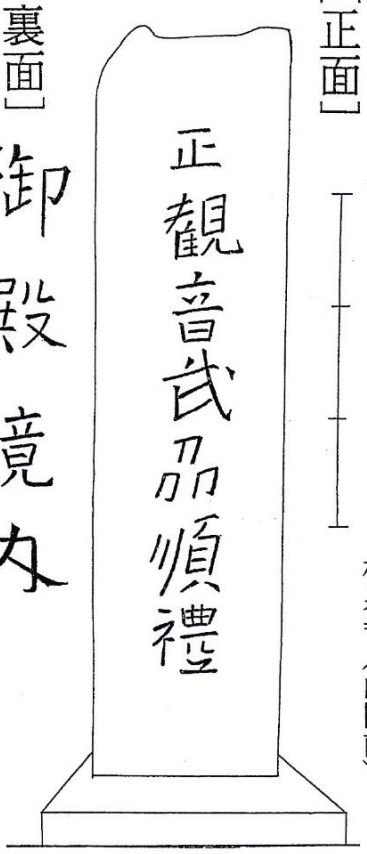
天明8（1788）

増林60・『御殿境内』文字付き巡礼標識石塔

［正面］正観音弐拾弐順禮

［裏面］御殿境内

林泉寺（山門前）



増林61・阿弥陀如来像付き開山塔



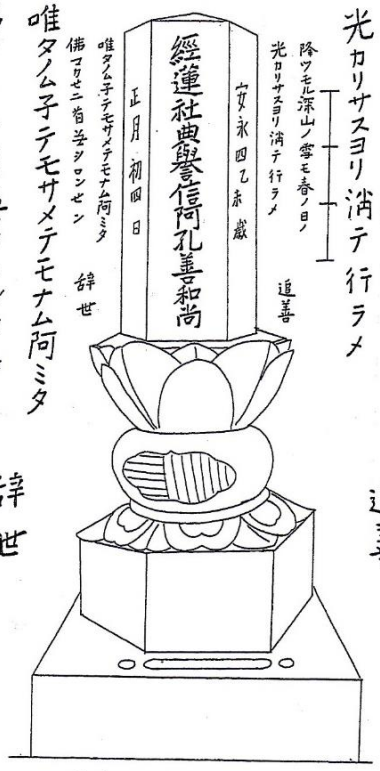
林泉寺（僧侶の墓地）

寛文5（1665）

増林62・辞世の句付き僧侶の墓塔

降ツモル深山ノ雪モ春ノ日ノ
光カリサスヨリ消テ行ラメ　追善

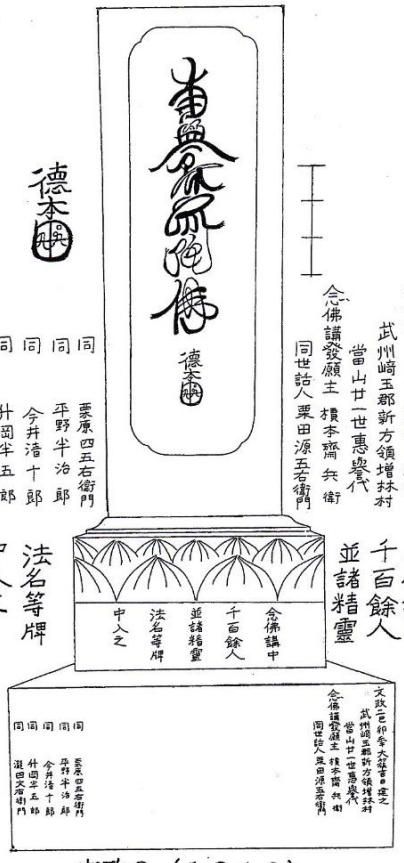
唯タノム子テモサメテモナム阿ミタ
佛コカセニ皆ヲシロンセン　辞世



林泉寺（僧侶の墓地）

安永4（1775）

増林63・徳本行者の名号塔



とくほんぎょうじゃ

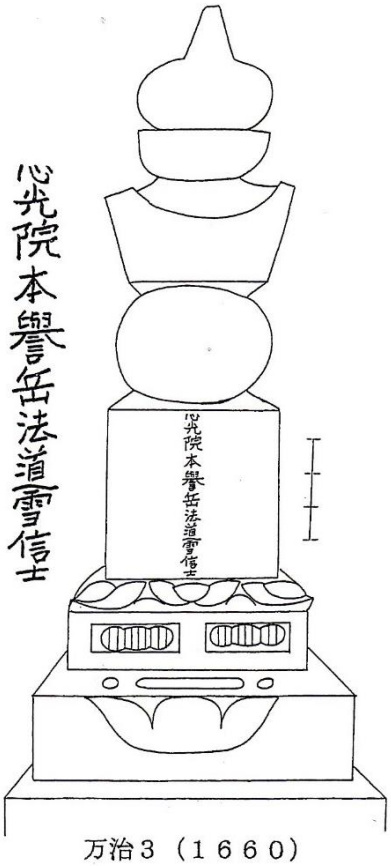
徳本行者の名号塔

林泉寺

文政2（1819）

64増林・増林関根氏始祖の五輪塔

林泉寺（関根家墓地）



万治3（1660）

65増林・文字庚申塔

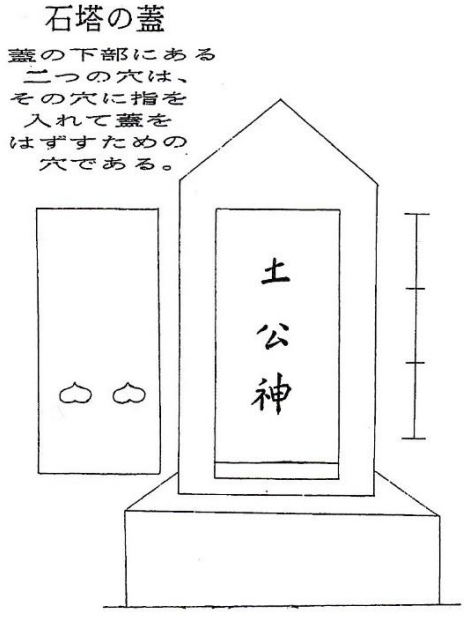
今井家［増林三八九四］



天保3（1832）

66増林・「土公神（どこうじん）」文字塔

須賀家［増林二―四三一］



67増林・文字庚申塔

須賀家［増林二―四三一］



文化2（1805）

68・「水神宮」文字塔

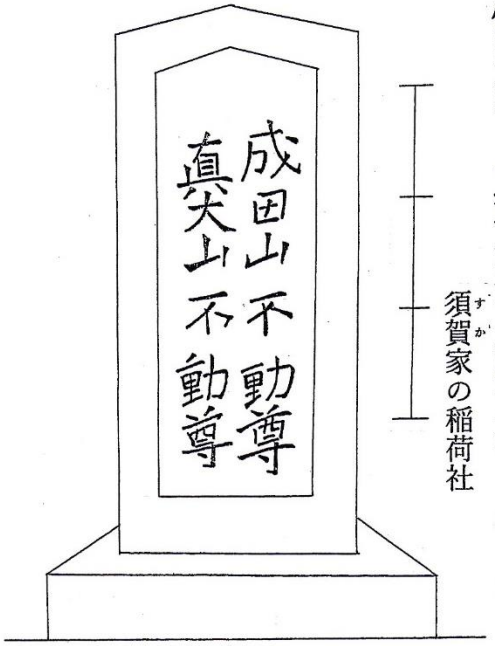
須賀家［増林二－四三一］



嘉永７（１８５４）

69・「成田山・真大山不動尊」文字塔

須賀家の稲荷社

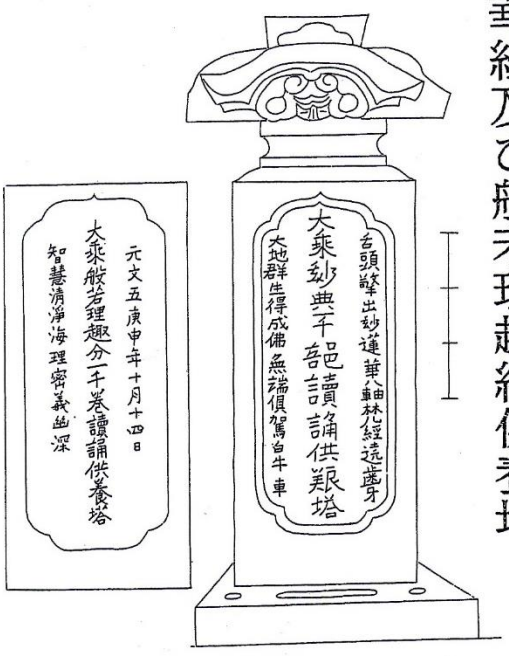


嘉永６（１８５３）

70・法華経及び般若理趣経供養塔

［正面］

［裏面］



勝林寺北西の「とうかん山」
現在、勝林寺に移転

享保１４（１７２９）

71・不動三尊梵字付き成田山供養塔

須賀家 路傍



※勝林寺「越谷観音」より真西に二五〇㍍の地点

天保１３（１８４２）

72増林・釈迦三尊十六善神塔（ぜんじん）

須賀（すか）家路傍



※勝林寺「越谷観音」より真西に二五〇㍍の地点

延享２（１７４５）

［参考］
勝林寺近くの天神宮にある記念碑
和歌と人物像が刻まれている



73増林・普門品供養塔



勝林寺

享和３（１８０３）

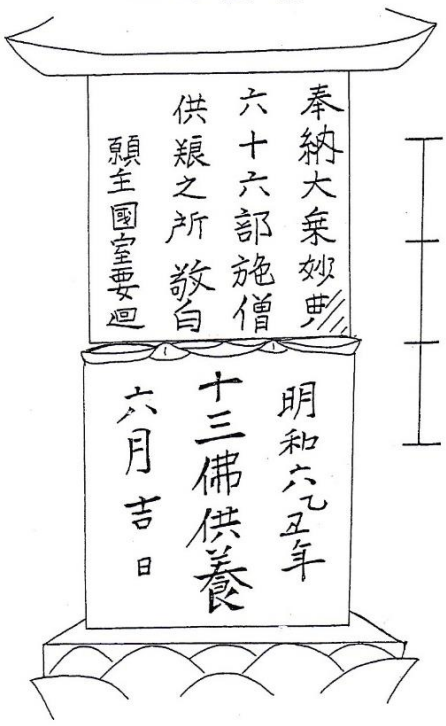
74増林・大乗妙典供養塔



勝林寺

享保１６（１７３１）

増林75・六十六部及び十三仏供養塔

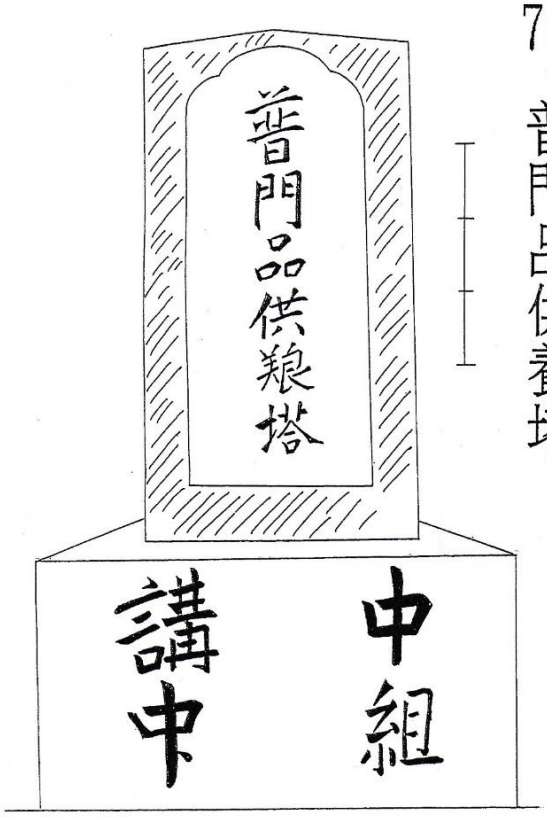


勝林寺

下部省略

上段：正徳元（１７１１）下段：明和６（１７６９）

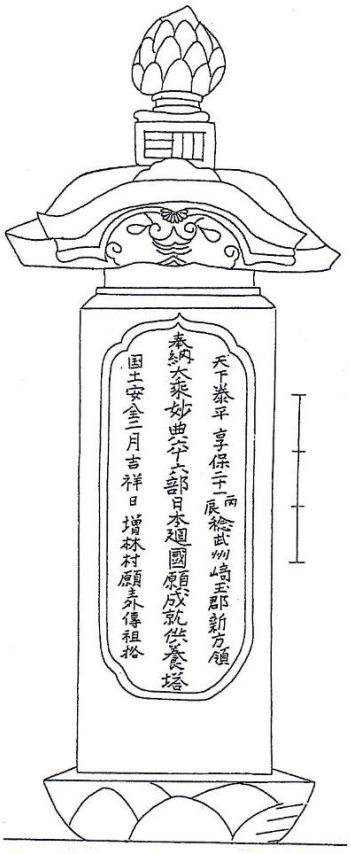
増林76・普門品供養塔



勝林寺

文政８（１８２５）

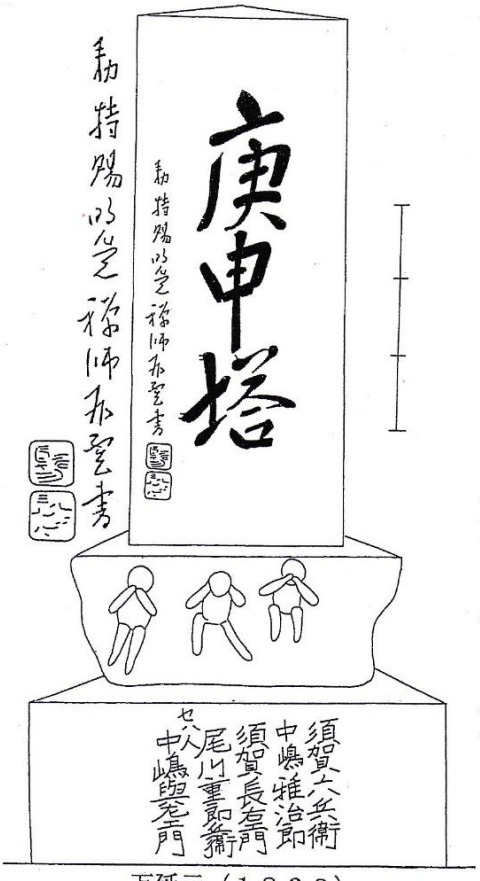
増林77・六十六部廻国塔



勝林寺

享保２１（１７３６）

増林78・明覚禅師（みょうかくぜんじ）の文字庚申塔



勝林寺

万延元（１８６０）

79 増林・地蔵像付き百観音等巡礼塔



勝林寺

享保16（1731）

80 増林・文字庚申塔



勝林寺

文政7（1824）

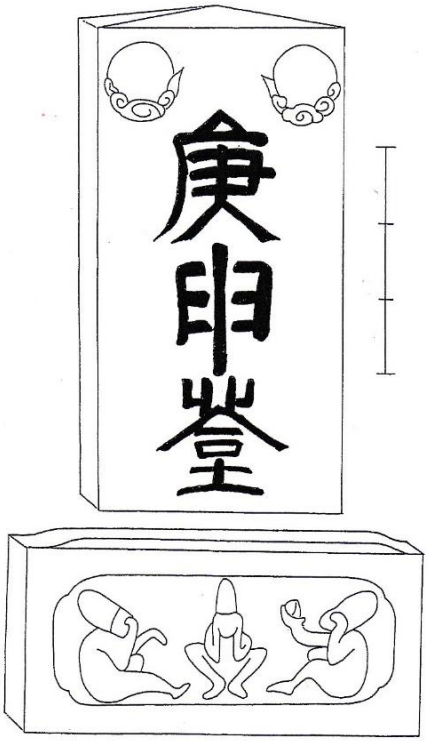
81 増林・文字庚申塔



勝林寺

天保7（1836）

82 増林・文字庚申塔



勝林寺

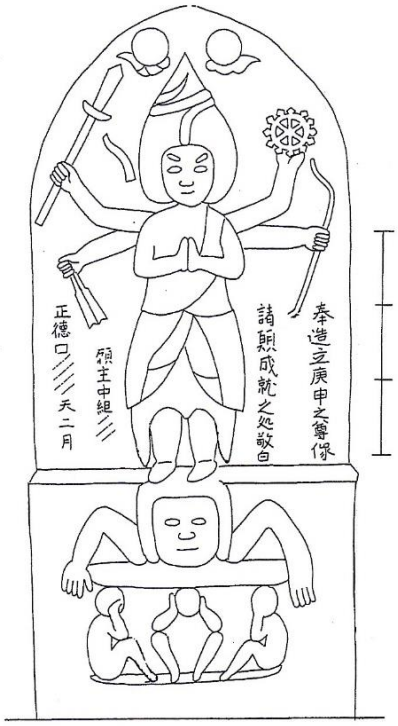
文化4（1807）

増林83・道標付き文字庚申塔　勝林寺



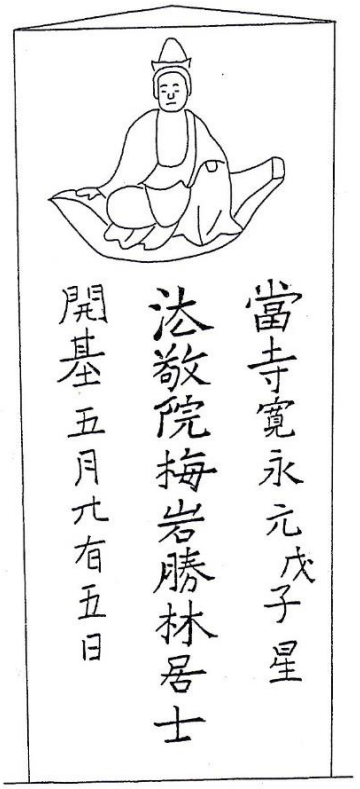
寛政１０（１７９８）

増林84・青面金剛像庚申塔　勝林寺



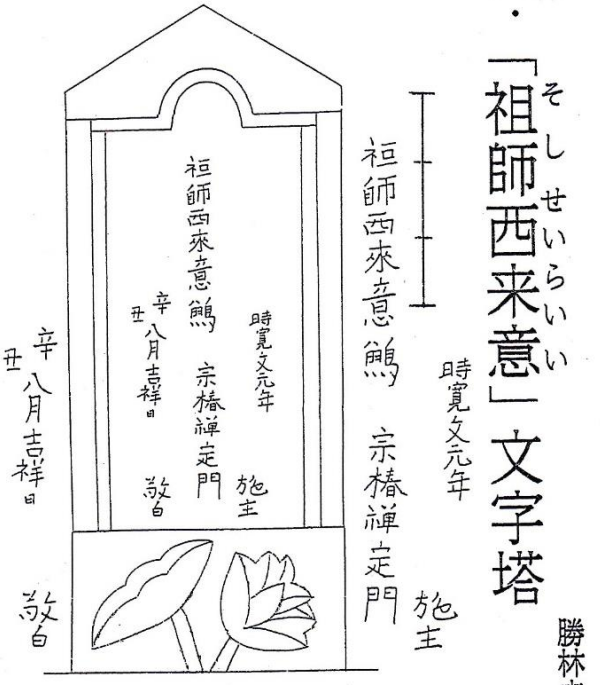
正徳４（１７１４）

増林85・一葉（いちよう）観音像付き開基塔　勝林寺



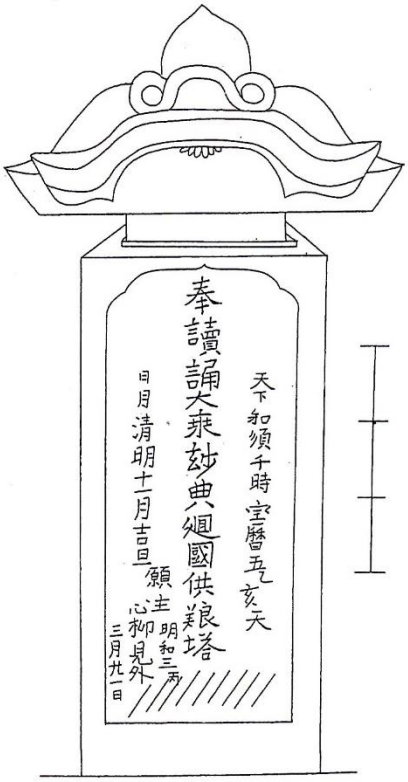
寛永元（１６２４）
造立年代：寛政９（１７７９）

増林86・「祖師西来意（そしせいらいい）」文字塔　勝林寺



寛文元（１６６１）

増林87・六十六部廻国塔



勝林寺

宝暦5（1755）

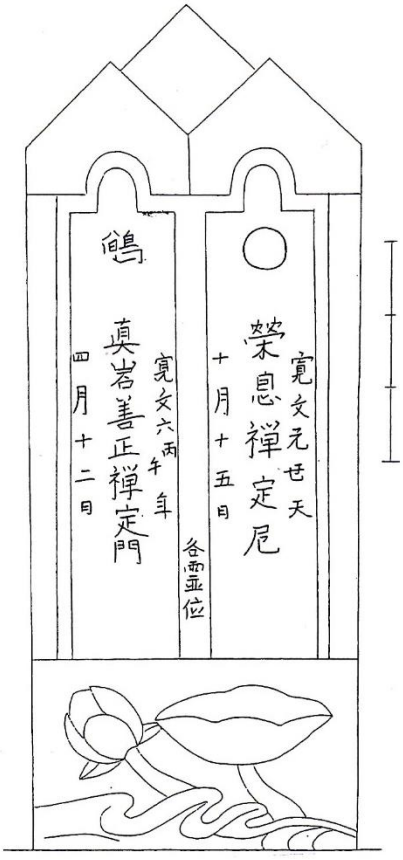
増林88・烏八臼（うはっきゅう）の墓塔



勝林寺

寛文7（1667）

増林89・烏八臼（うはっきゅう）の墓塔

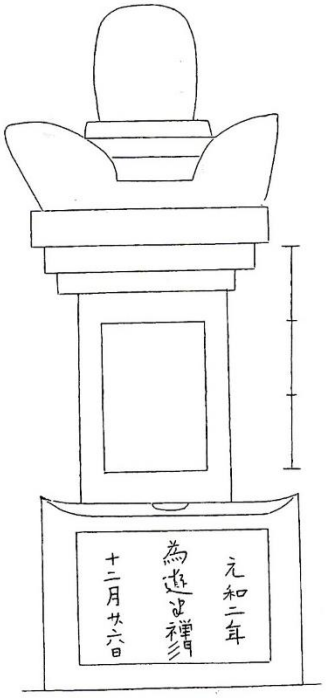


勝林寺

寛文6（1666）

増林90・元和（げんな）二年の宝篋印塔（ほうきょういんとう）墓塔

越谷市内最古の墓塔

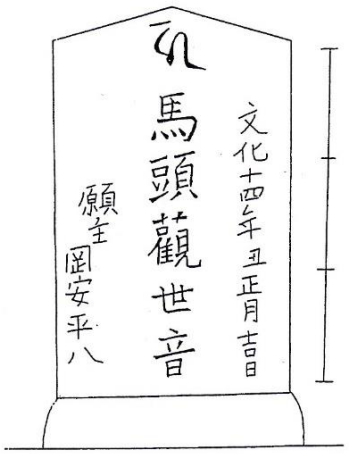


勝林寺

元和2（1616）

91 増林・「馬頭観音」文字塔

岡安家［増林二七〇七］路傍

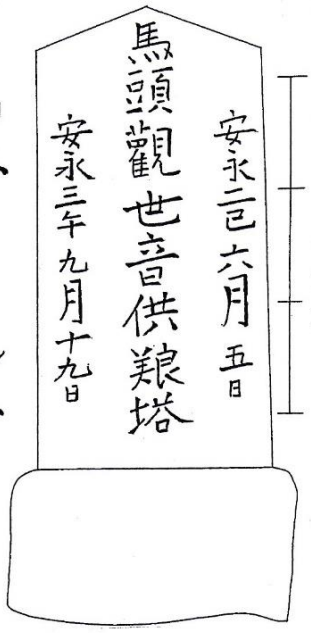


文化14（1817）

92 増林・道標付き「馬頭観音」文字塔

岡安家［増林二―三六九］路傍

［側面］

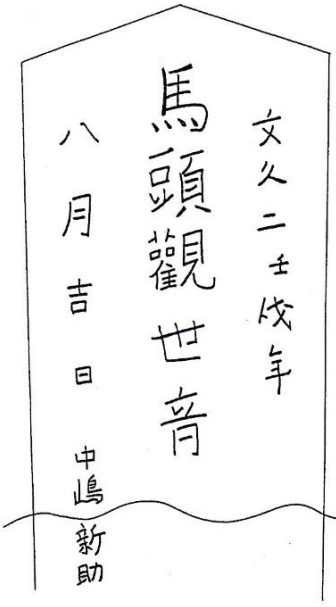


［側面］

安永3（1774）

93 増林・「馬頭観音」文字塔

宮川家［増林三―一七四］路傍



文久2（1862）

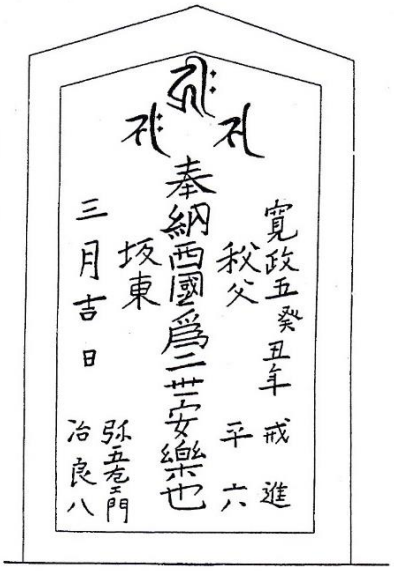
94 増林・「馬頭観音」文字塔

増林下組地蔵堂



文化4（1807）

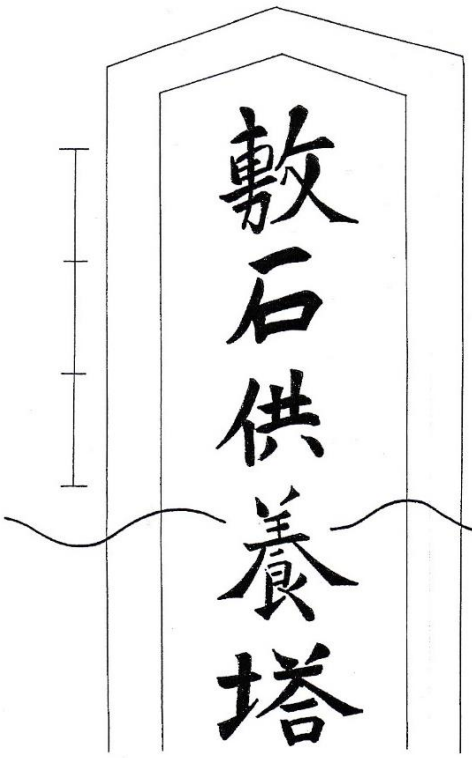
増林95・百観音巡礼塔



山崎家［増林三－一九〇］
道路反対側路傍

寛政5（1793）

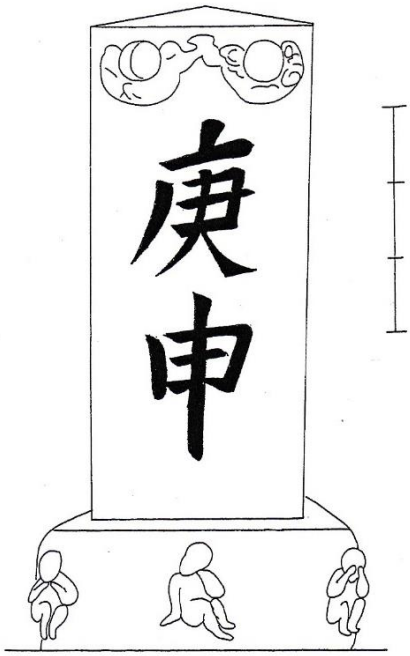
増林96・敷石供養塔



増林下組香取神社

嘉永5（1852）

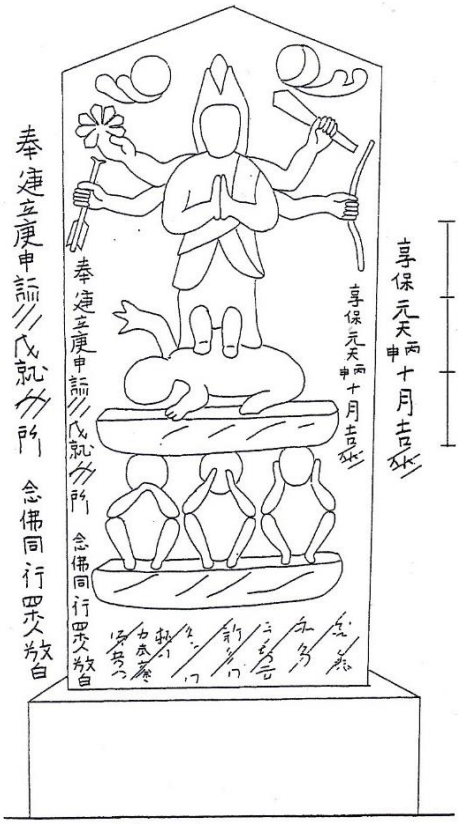
増林97・文字庚申塔



下組集会所

文化8（1811）

増林98・青面金剛像庚申塔

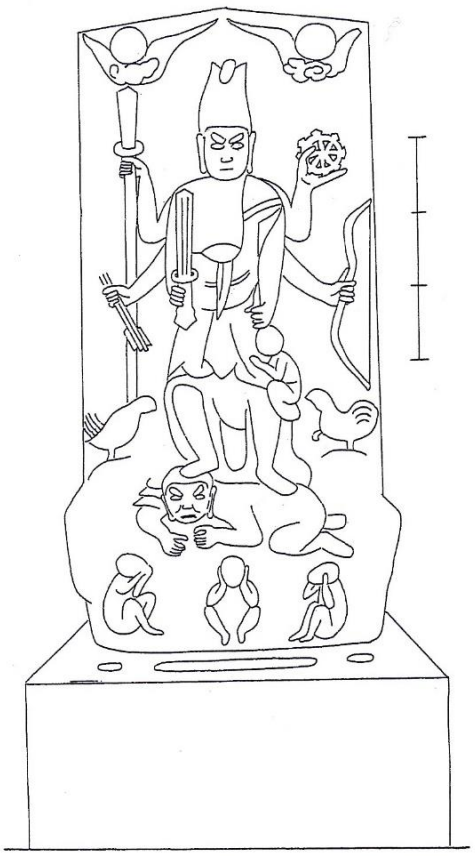


下組集会所

享保元（1716）

99 増林・青面金剛像庚申塔

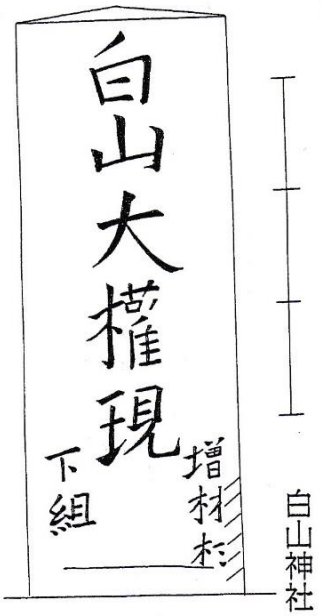
下組集会所



寛政２（１７９０）

100 増林・道標付き「白山権現」文字塔

白山神社



［側面］



明和８（１７７１）

101 増林・向かい夫婦の奉納石塔

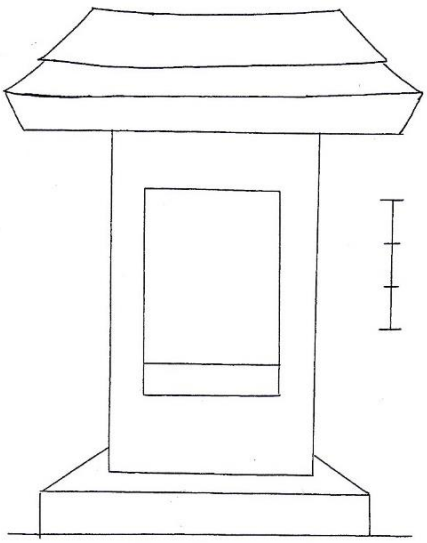
白山神社



天保９（１８３８）

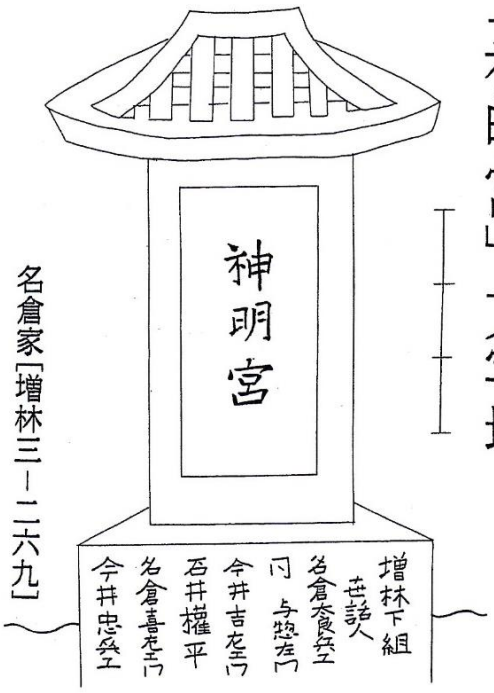
102 増林・水神宮石塔祠

名倉家［増林四五三七］



正徳４（１７１４）

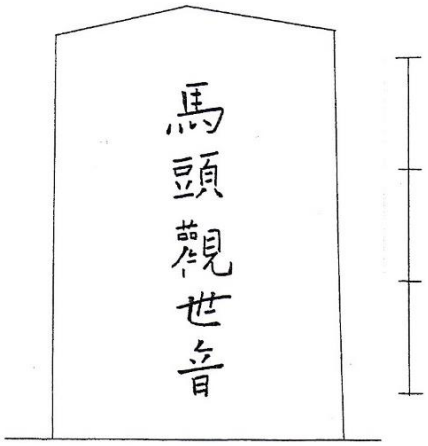
103 増林・「神明宮」文字塔



寛政８（１７９６）

104 増林・「馬頭観音」文字塔

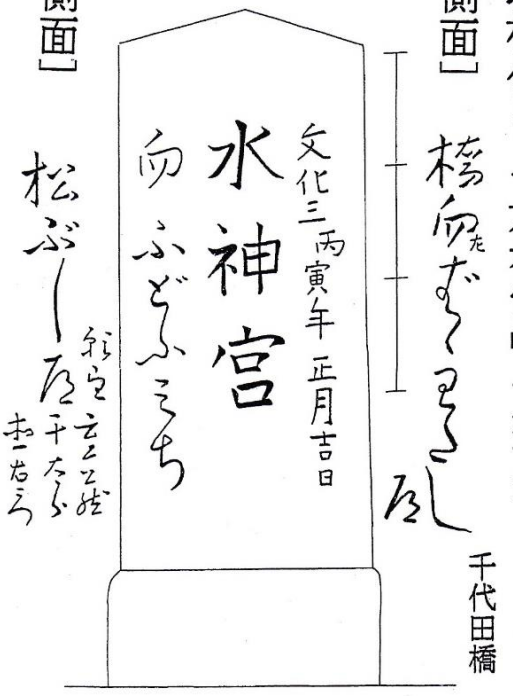
千代田橋



天保１３（１８４２）

105 増林・道標付き「水神宮」文字塔

［側面］



千代田橋

文化３（１８０６）

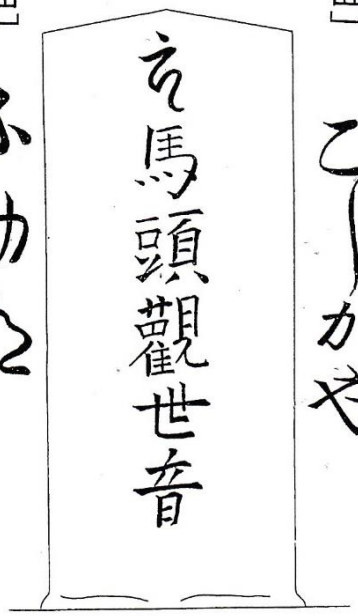
106 増林・文字庚申塔

城ノ上稲荷神社



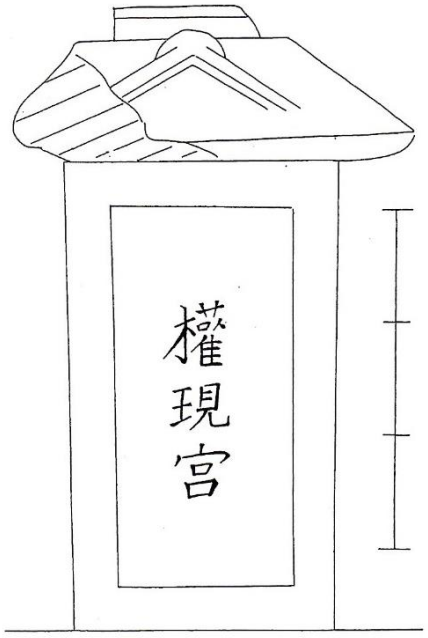
寛政１２（１８００）

107増林・道標付き「馬頭観音」文字塔



城ノ上稲荷神社

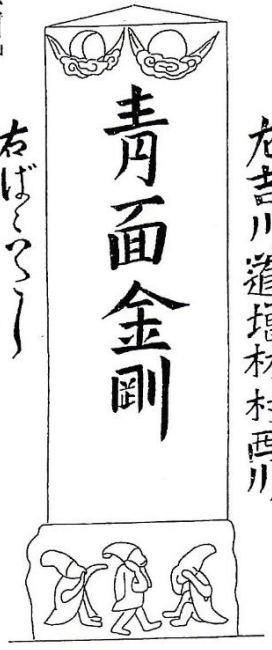
108増林・「権現宮」文字塔



須賀家［増林一―四］

明和4（1767）

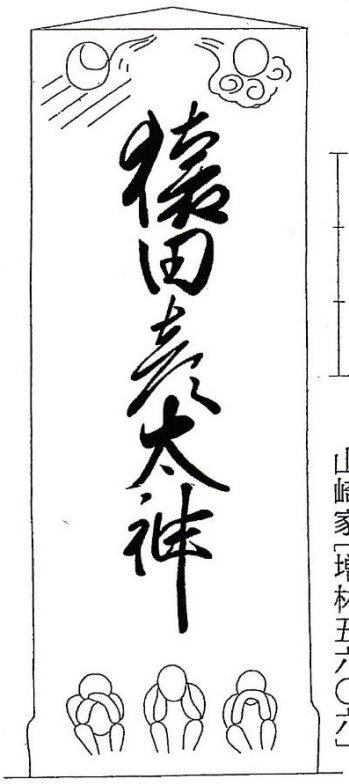
109増林・道標付き文字庚申塔



百木家［増林五六四三］

寛政12（1800）

110増林・道標付き猿田彦文字庚申塔

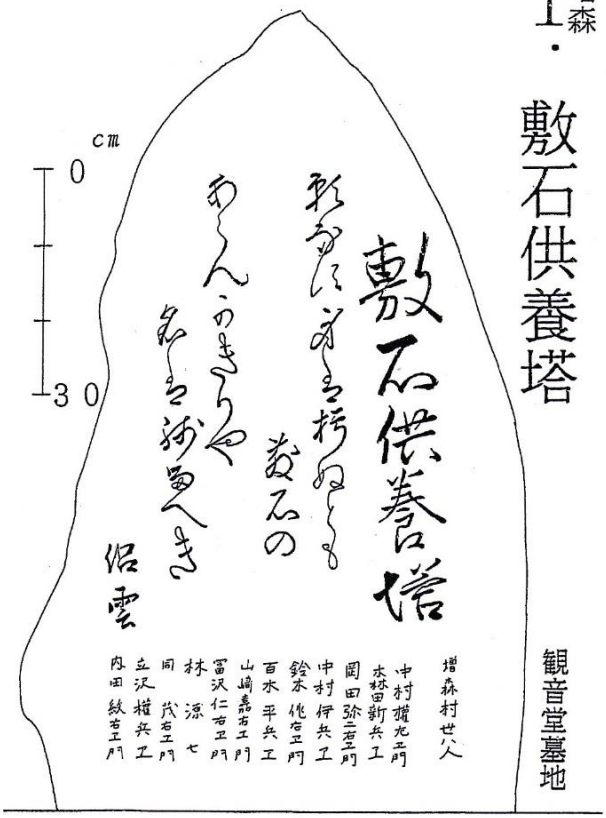


山崎家［増林五六〇六］

［側面］
左　吉川　流山
のさ　参と
道

文久3（1863）

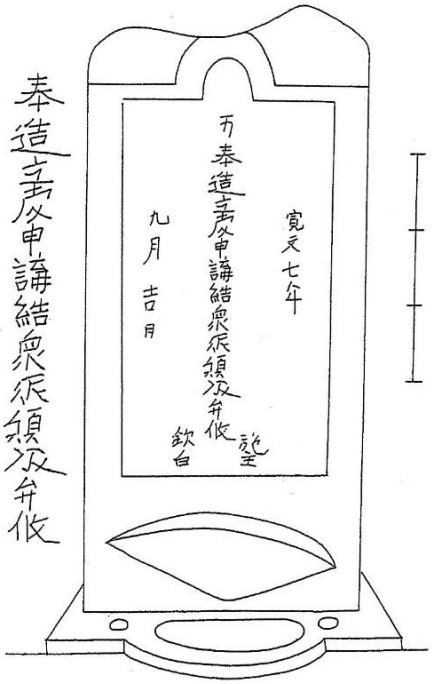
増森1・敷石供養塔



天保11（1840）

増森2・板碑型文字庚申塔

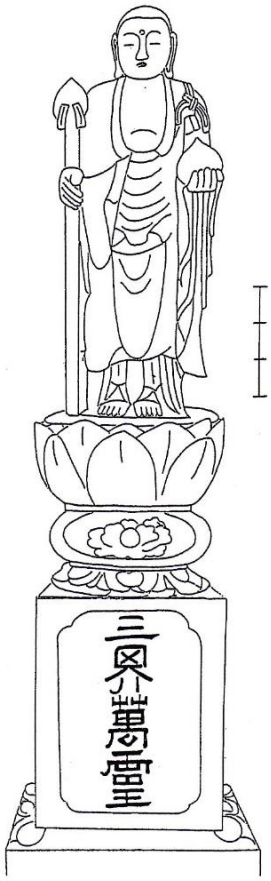
河原崎の内田稲荷



寛文7（1667）

増森3・『高（たか）地蔵尊』石仏

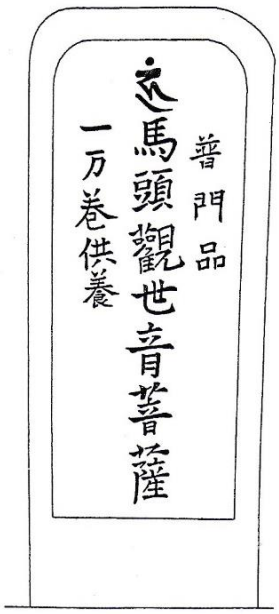
宝正院



宝暦6（1756）

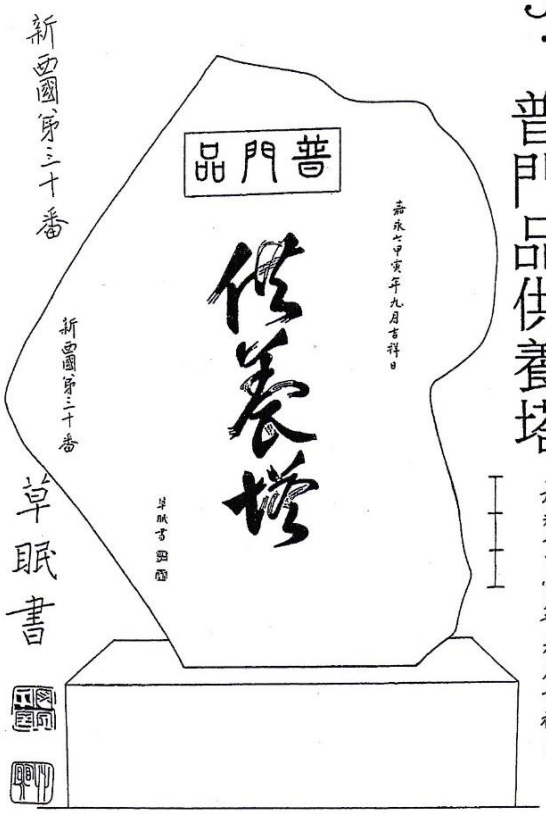
増森4・「馬頭観音」文字塔

宝正院



延享2（1745）

増森5・普門品供養塔



嘉永7（1854）

増森6・『大日様』石仏

「消防団増林分団第七部」路傍



寛文3（1663）

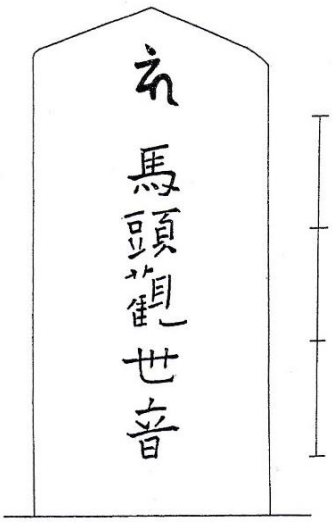
追加増森7・三界万霊塔



薬師堂

延享5（1748）

増森8・「馬頭観音」文字塔

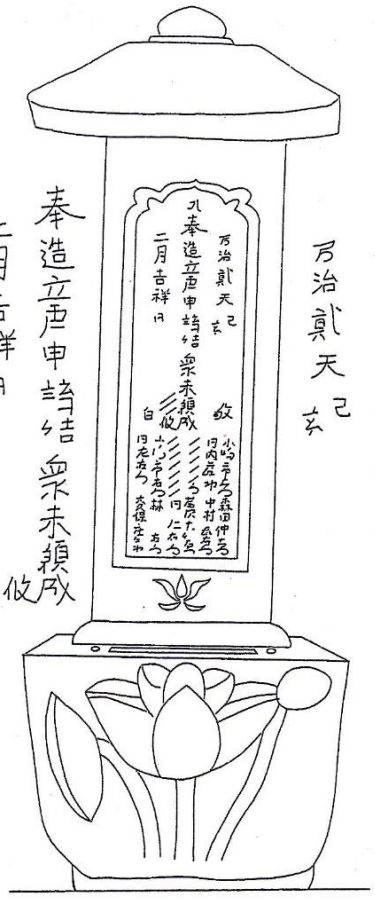


薬師堂

天保12（1841）

増森 9・ 文字庚申塔

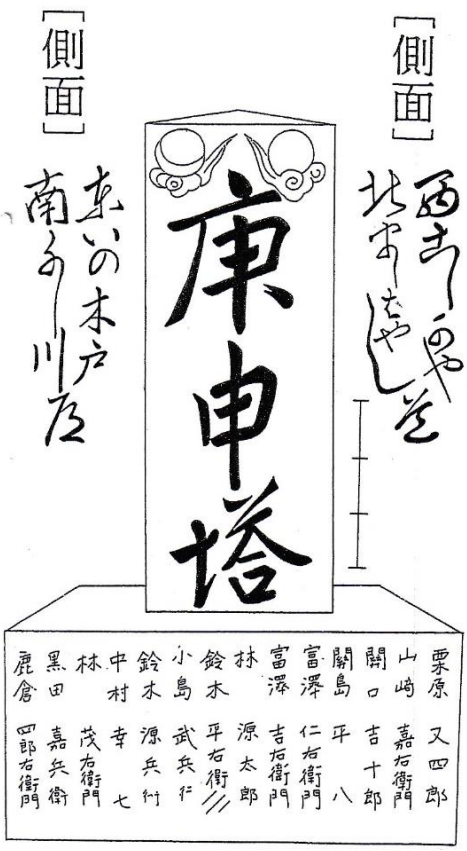
薬師堂



万治２（１６５９）

増森 10・ 道標付き文字庚申塔

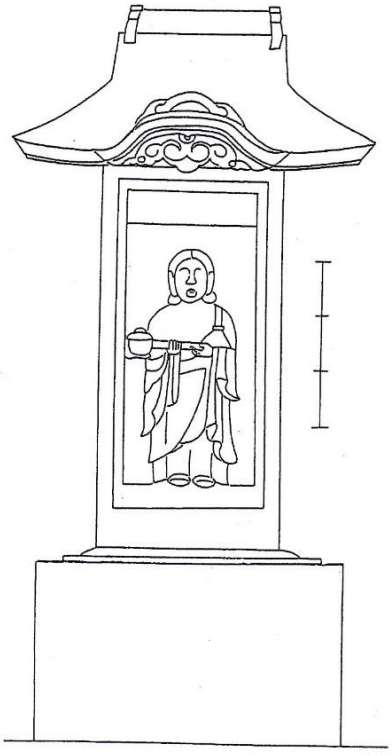
薬師堂



元治元（１８６４）

増森 11・ 聖徳太子像

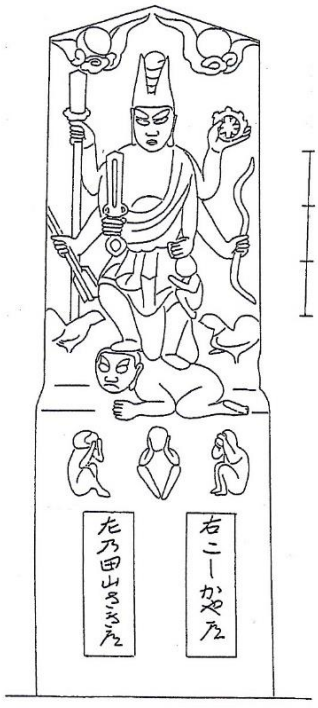
薬師堂



文化４（１８０７）

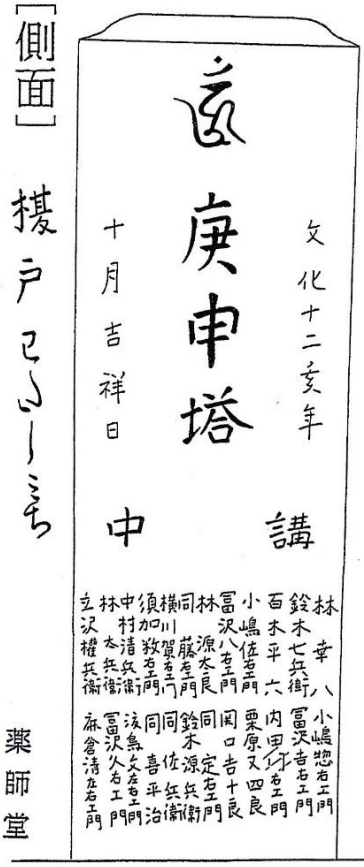
増森 12・ 道標付き青面金剛像庚申塔

薬師堂



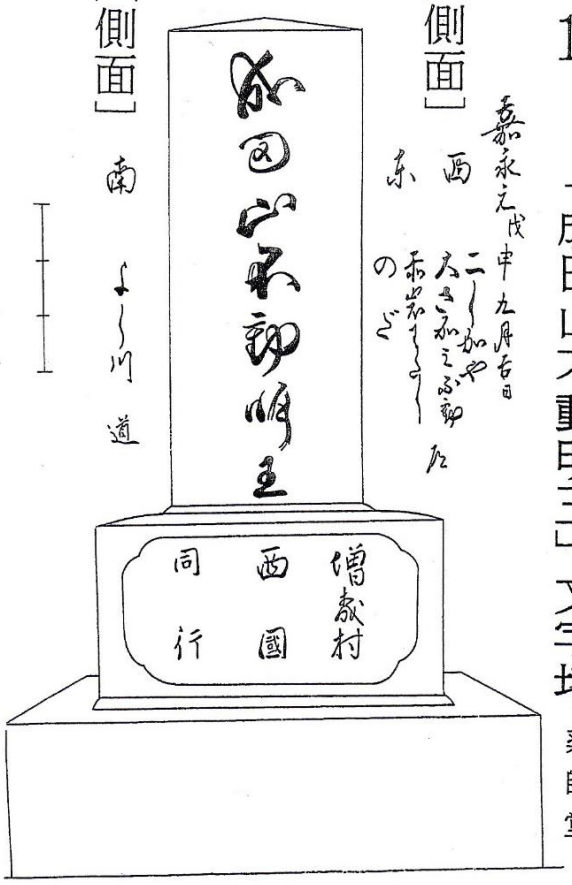
安永３（１７７４）

増森13・道標付文字庚申塔 越ヶ谷



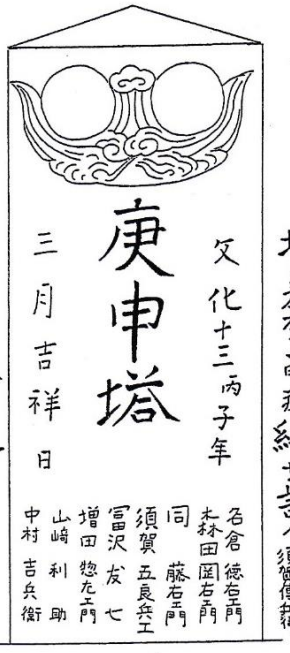
文化１２（１８１５）

増森14・道標付き「成田山不動明王」文字塔 薬師堂



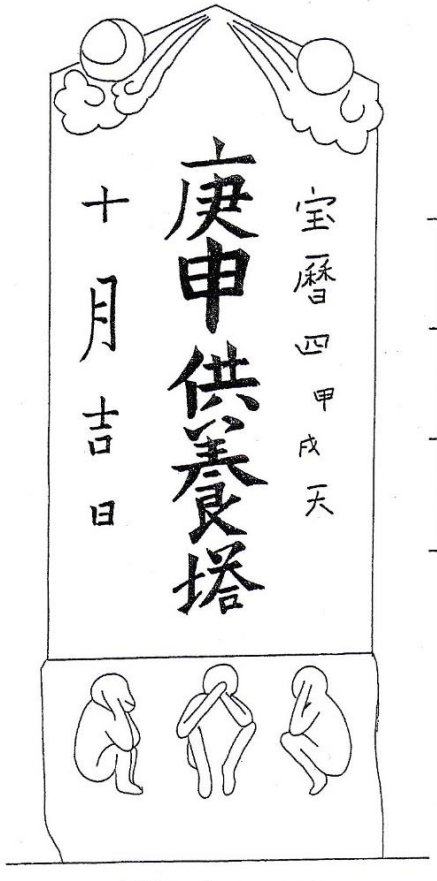
嘉永元（１８４８）

増森15・道標付き文字庚申塔 増森神社



文化１３（１８１６）

増森16・文字庚申塔

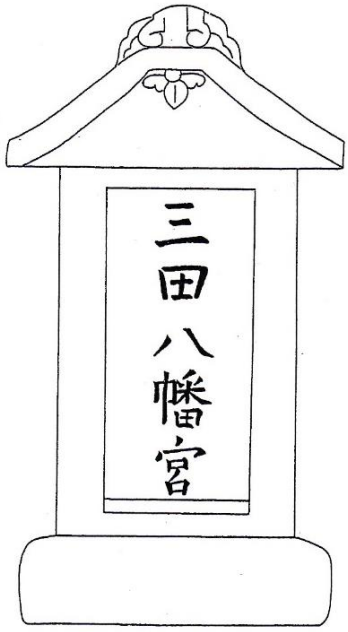


宝暦４（１７５４）

中村家［増森二―四七］

17 増森・「三田八幡宮」文字塔

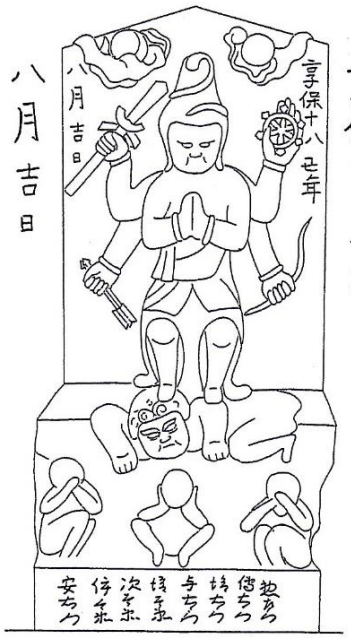
中村家［増森二―四七］



天保１２（１８４１）

18 増森・青面金剛像庚申塔

増森新田の稲荷社



享保１８（１７３３）

19 増森・青面金剛像庚申塔

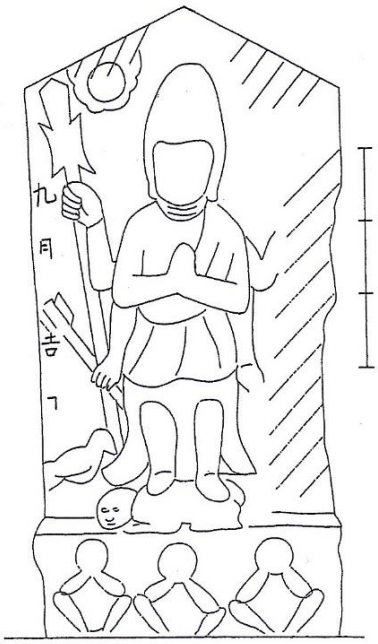
増森新田の稲荷社



明和７（１７７０）

20 増森・青面金剛像庚申塔

増森新田の稲荷社



21・増森 道標付き青面金剛像庚申塔

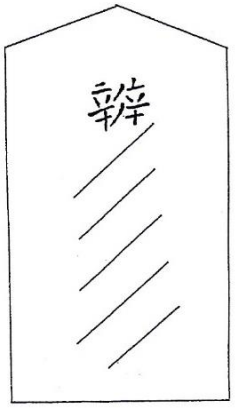
［側面］



増森新田の稲荷社

寛政１１（１７９９）

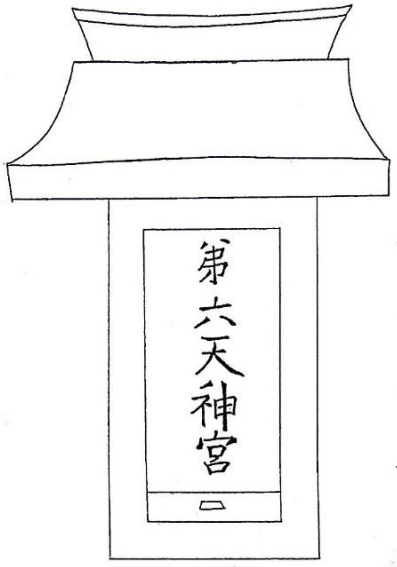
22・増森「弁財天」文字塔



増森新田の稲荷社

天保９（１８３８）

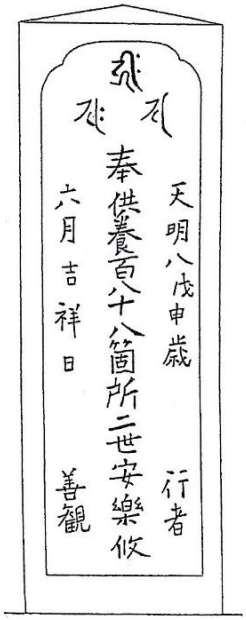
23・増森「第六天」文字塔



増森新田の稲荷社

宝暦６（１７５６）

24・増森 百観音・八十八箇所巡礼塔

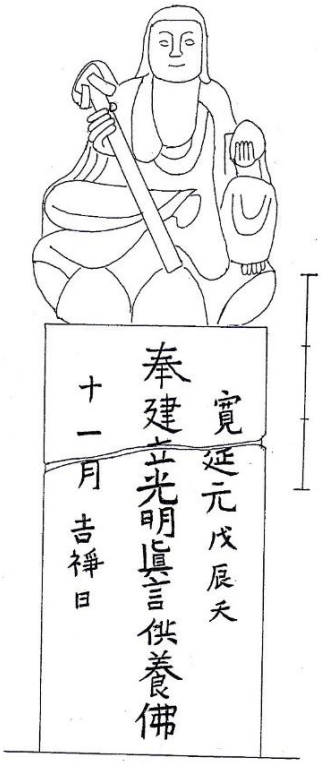


増森新田センター

天明８（１７８８）

追加増森25・

光明真言供養塔



増森新田センター

寛延元年（１７４８）

追加増森26・

青面金剛像庚申塔

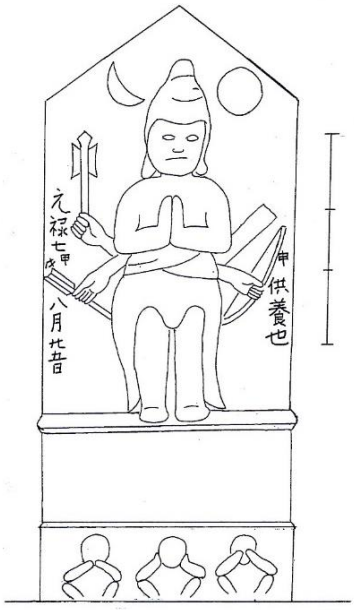


増森新田センター

元禄１３年（１７００）

追加増森27・

青面金剛像庚申塔

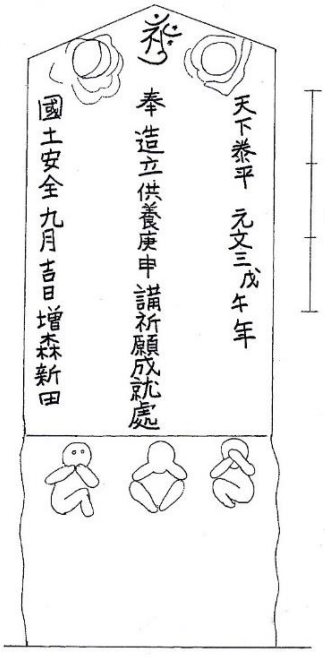


増森新田センター

元禄７年（１６９４）

追加増森28・

文字庚申塔

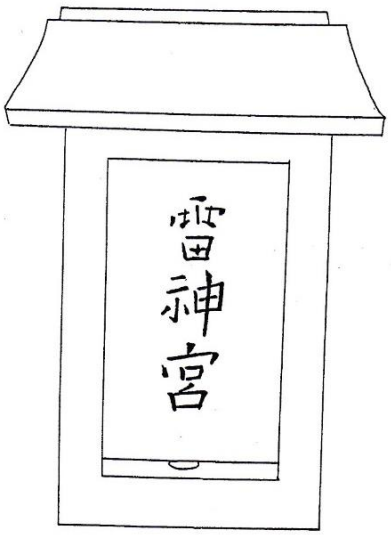


増森新田センター

元文３年（１７３８）

29増森・「雷神宮」文字塔

吉田家【増森二四八四】



安永2（1773）

30増森・道標付き文字庚申塔

森西川集会所



［側面］ 吉川道

［側面］ 越ヶ谷 大相模不動道

［裏面］ 摸戸 赤岩渡 のたり

文化5（1808）

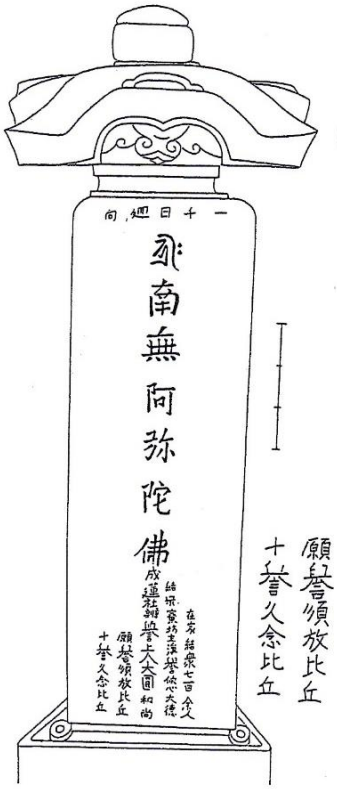
31増森・十九夜念仏塔



森西川集会所

嘉永6（1853）

32増森・名号塔



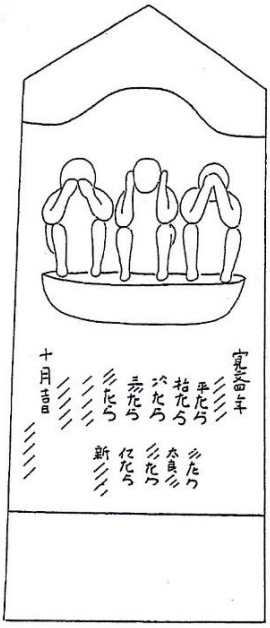
一千日廻向

森西川集会所

寛文10（1670）

増森 33・ 三猿庚申塔

森西川集会所



寛文4（1664）

増森 34・ 青面金剛像 庚申塔

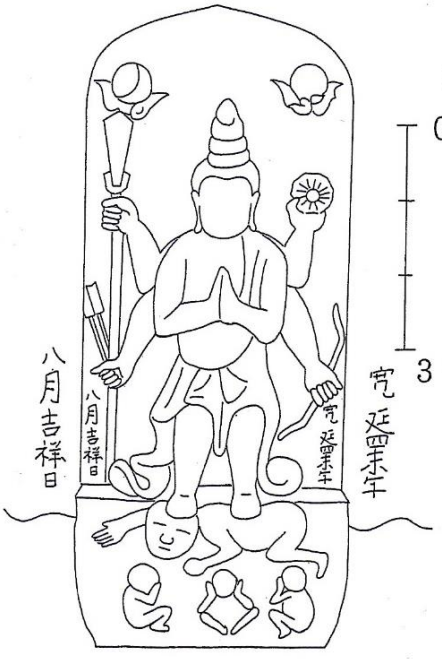
森西川集会所



貞享4（1687）

中島 1・ 青面金剛像庚申塔

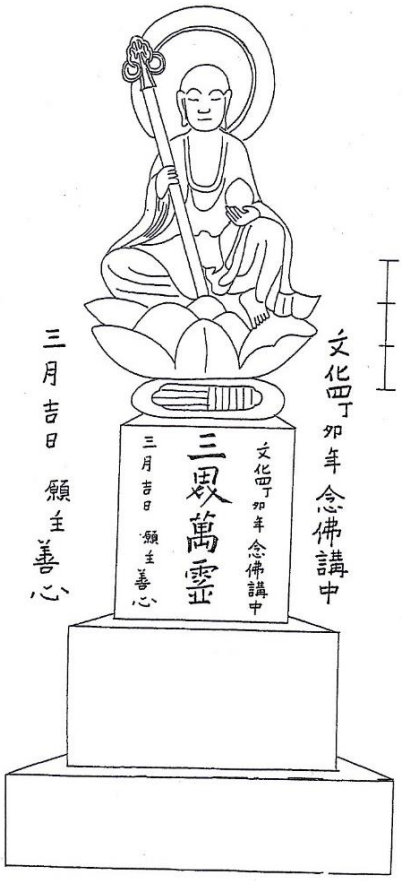
林家［中島一－七九］



寛延4（1751）

中島 2・ 地蔵像付き三界万霊塔

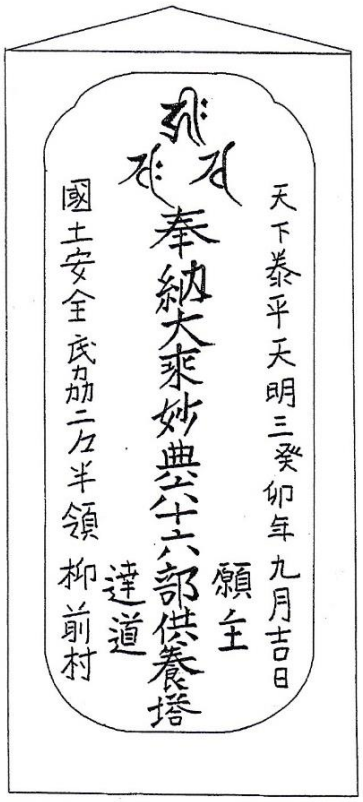
中島神社



文化4（1807）

中島 3・ 六十六部供養塔

正福寺管轄の共同墓地



天明3（1783）

中島 4・ 地蔵像付き念仏塔

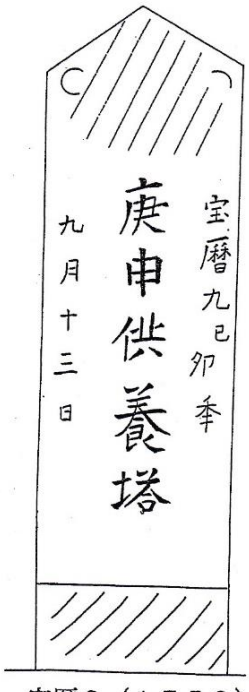
正福寺管轄の共同墓地



宝暦6（1756）

中島 5・ 文字庚申塔

小川家［中島二－八九］

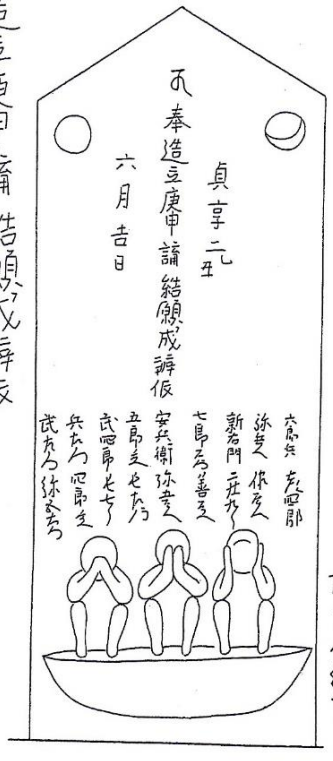


宝暦9（1759）

中島 6・ 三猿庚申塔

小川家［中島二－八九］

奉造立庚申誦 結願成辨仮



貞享2（1685）

7・中島　青面金剛像庚申塔

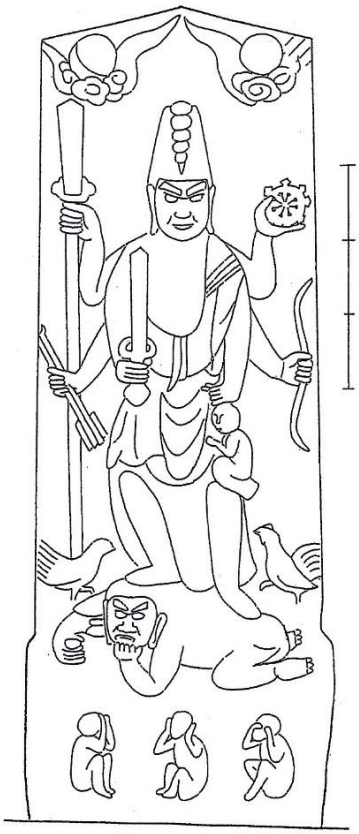
小川家［中島二－八九］



正徳４（１７１４）

8・中島　青面金剛像庚申塔

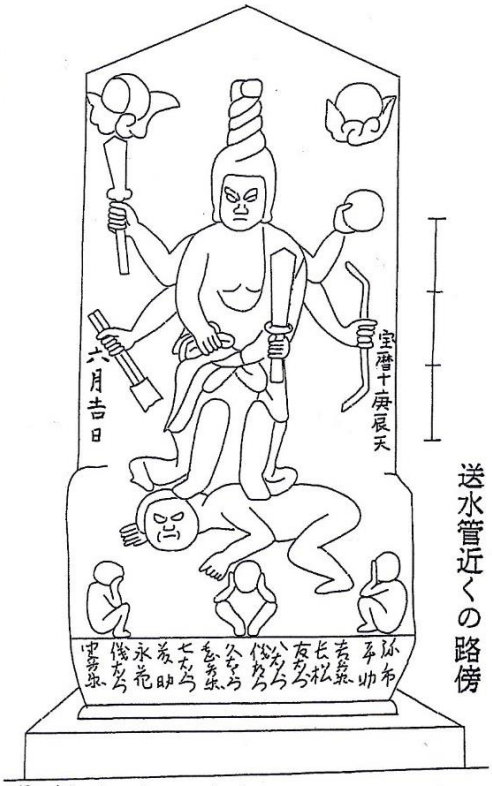
鈴木家［中島二－一一九－二］



安永６（１７７７）

9・中島　青面金剛像庚申塔

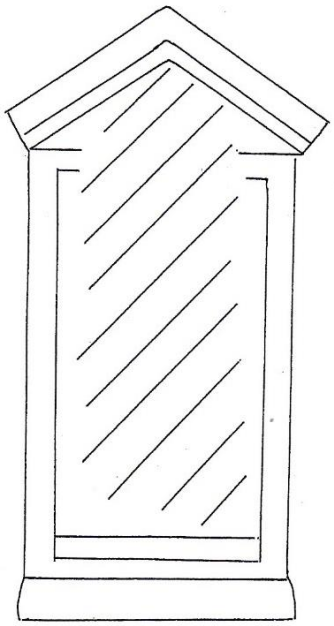
送水管近くの路傍



宝暦１０（１７６０）

10・中島　「水神」文字塔

送水管近くの路傍



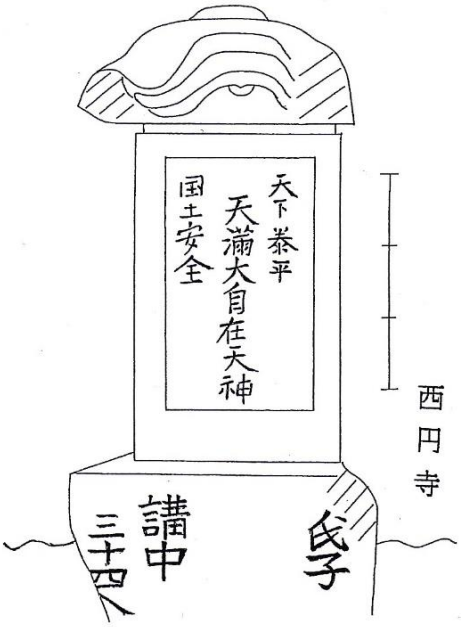
文化６（１８０９）

1・花田　猿田彦文字庚申塔



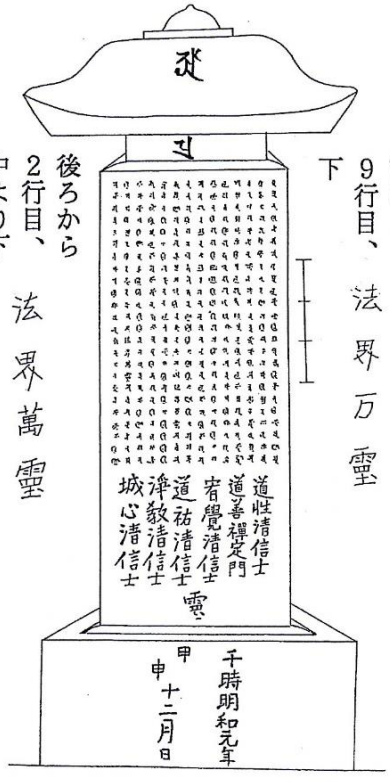
安政5（1858）

2・花田　「天満大自在天神」文字塔



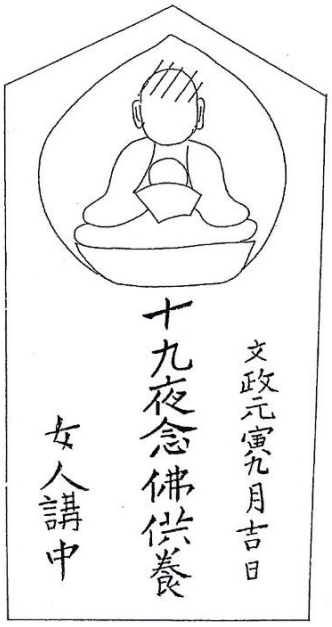
安政12（1800）

3・花田　「大随求陀羅尼（だいずいぐだらに）」梵字文供養塔　西円寺



明和元（1764）

4・花田　十九夜念仏塔



文政元（1818）

3の「大随求陀羅尼」梵字文

［右側面］



［正面］



3の「大随求陀羅尼」梵字文

［左側面］



［裏面］



花田5・十九夜念仏塔



西円寺

宝永7（1710）

花田6・十九夜念仏塔

カ



西円寺

明和5（1768）

花田7・阿弥陀像付き念仏塔



西円寺

寛文6（1666）

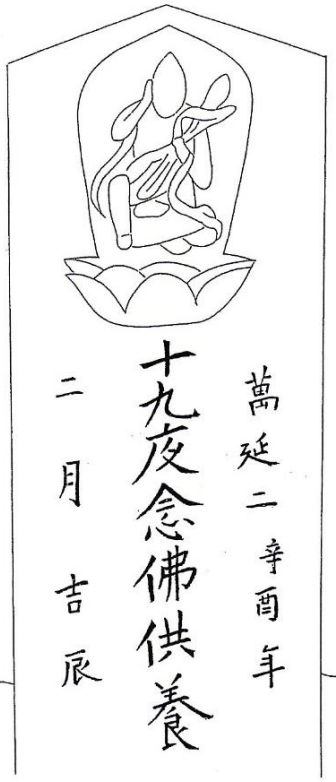
花田8・文字庚申塔



西円寺

文久3（1863）

9 花田
・十九夜念仏塔



西円寺

万延２（１８６１）

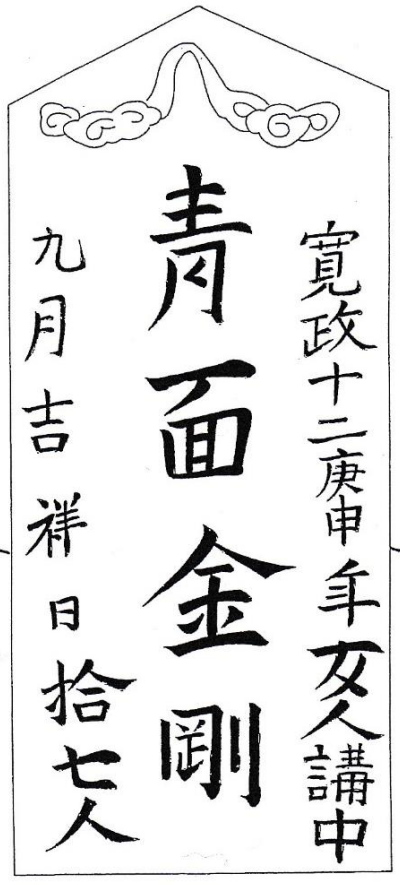
10 花田
・文字庚申塔



西円寺

文政７（１８２４）

11 花田
・文字庚申塔



西円寺

寛政１２（１８００）

12 花田
・文字庚申塔



西円寺

天保１４（１８４３）

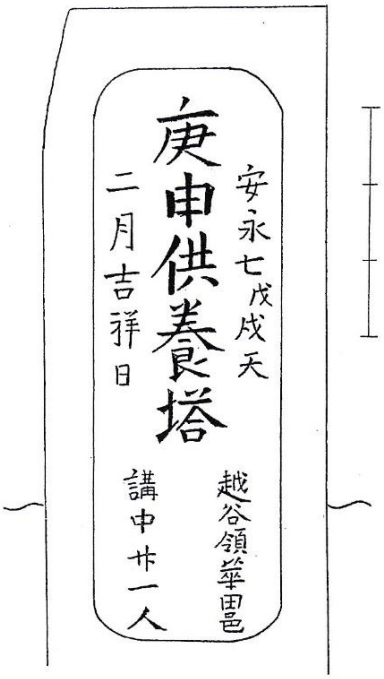
13・花田　道標付き文字庚申塔



西円寺

寛延3（1750）

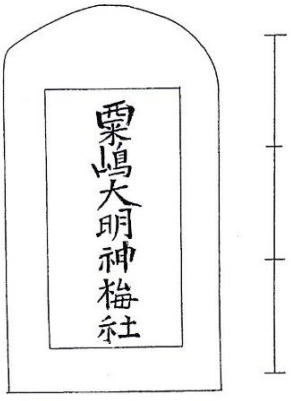
14・花田　文字庚申塔



西円寺

安永7（1778）

15・花田　「淡島（あわしま）明神」文字塔



山本家［花田四－二一－一］

寛政5（1793）

16・花田　青面金剛像庚申塔

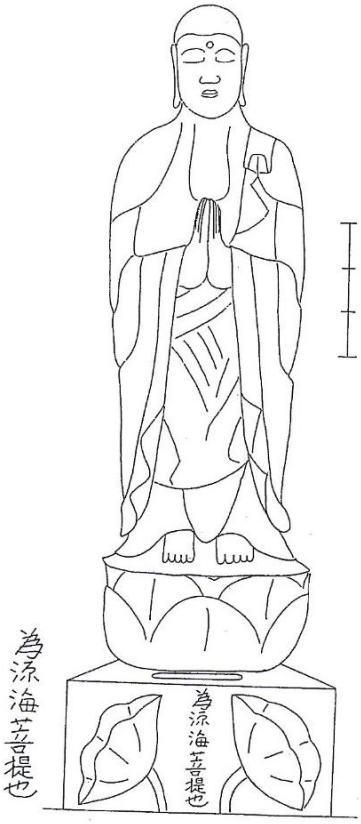


佐藤家［花田四－二〇－一三］

安永3（1774）

17・花田『スナッカラ地蔵』石仏

佐藤家［花田四－二〇－一三］



承応4（1655）

18・花田青面金剛像庚申塔

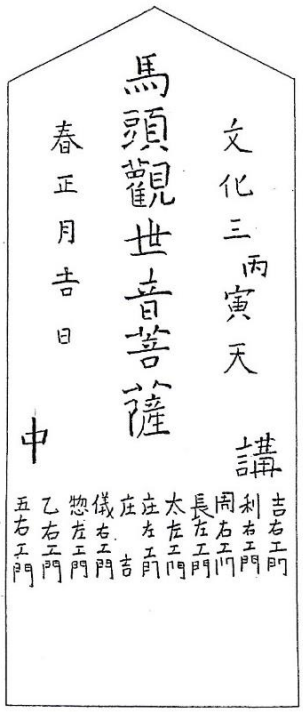
佐藤家［花田四－二〇－一三］



正徳5（1715）

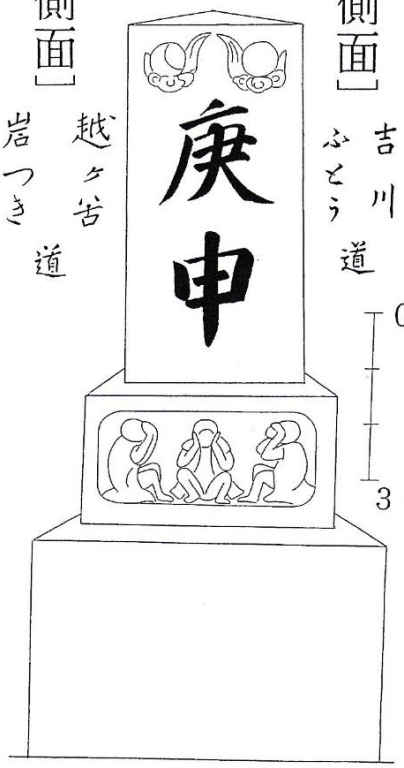
19・花田「馬頭観音」文字塔

佐藤家［花田四－二〇－一三］



文化3（1806）

小林 1・道標付き文字庚申塔



東小林香取神社

文化11（1814）

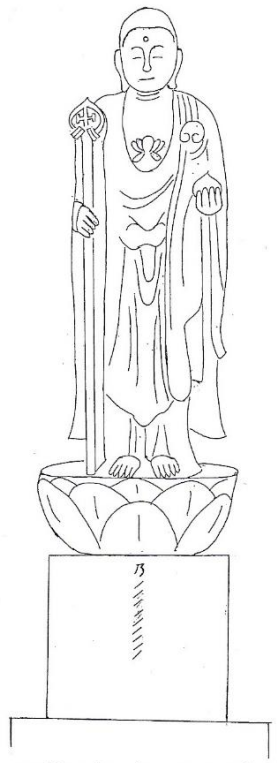
追加 小林 2・地蔵像付き三界萬霊塔



東福寺

宝暦5年（1755）

追加 小林 3・地蔵像付き六十六部供養塔



東福寺

正徳3年（1713）

追加 小林 4・地蔵像付き念仏塔



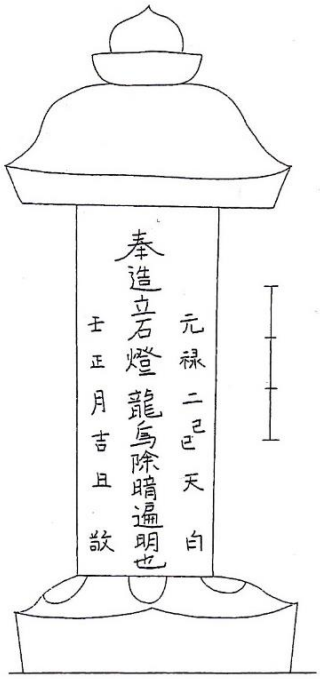
奉造立地蔵菩薩念佛講人敬二世安楽処諸主妙道社厄

于時寛文二天 九月吉祥日 敬白

東福寺

寛文2年（1662）

小林5・石燈籠供養塔



東福寺

元禄2（1689）

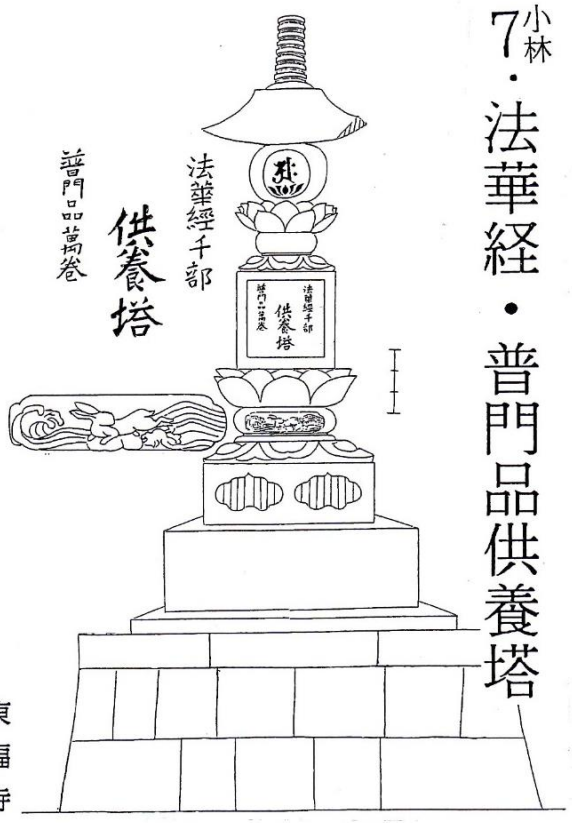
小林6・地蔵像付き三界萬霊塔



東福寺

享保12（1727）

小林7・法華経・普門品供養塔



東福寺

文化12（1815）

小林8・十九夜念仏塔



東福寺

享保7（1722）

9小林・観音像付き念仏塔

東福寺



延宝元（１６７３）

10小林・青面金剛像庚申塔

東福寺



享保５（１７２０）

11小林・地蔵像付き念仏塔

東福寺



※平成12年にスケッチ

追加12小林・地蔵像付き供養塔

東福寺



享保３年（１７１８）

追加 小林 13・ 地蔵像付き供養塔

東福寺



追加 小林 14・ 地蔵像付き供養塔

東福寺



享保3年（1718）

小林 15・ 地蔵像付き念仏塔

東福寺

※平成12年にスケッチ



享保3年（1718）

追加 小林 16・ 地蔵像付き供養塔

東福寺



享保3年（1718）

17 小林 大日如来像付き光明真言塔 東福寺



宝永8（1711）

18 小林 大日如来像付き光明真言塔 東福寺



正徳3（1713）

19 小林 十九夜念仏塔 力 東福寺



天明4（1784）

追加 20 小林 地蔵像付き供養塔 東福寺

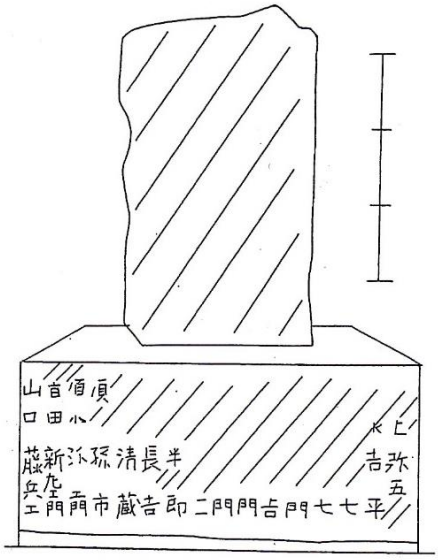


右建立志者為善秋信菴貞信女舎尊信士菩提也
施主坊林村 敬白

右造立之意趣者為浄慶信士愛幻童子證菩提二
施主須賀大夫
同名兵四郎

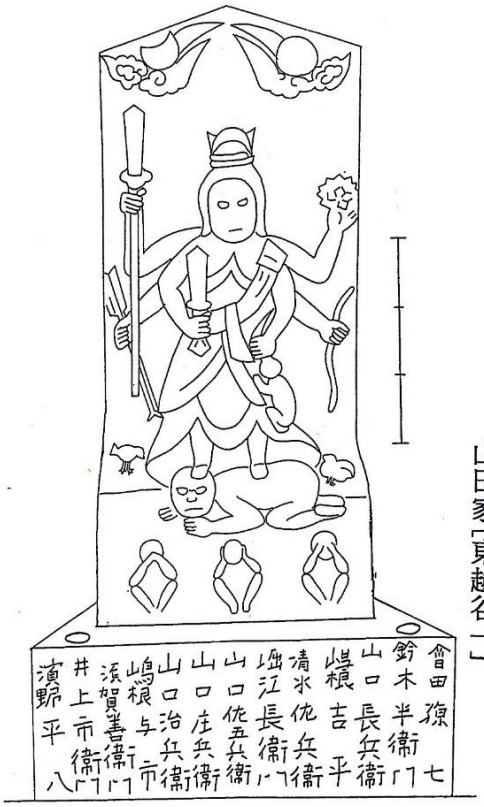
21・小林 道標付き『庚申様』石仏

会田家［東越谷二一二一二］



22・小林 青面金剛像庚申塔

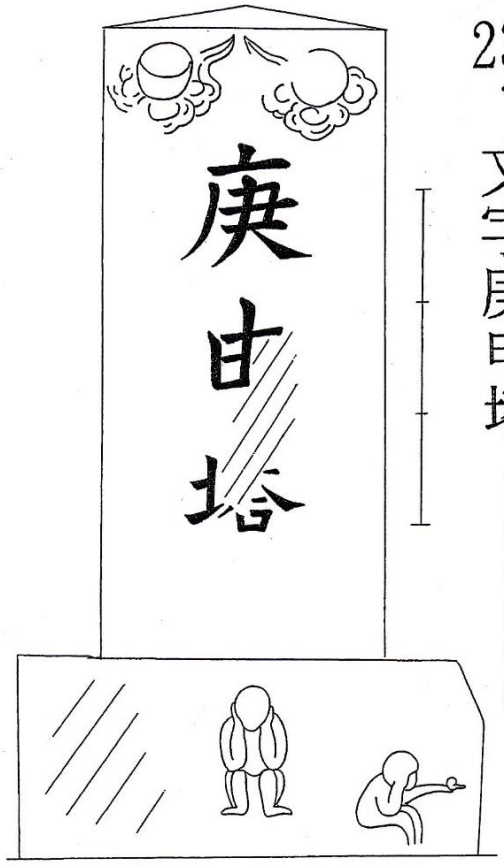
山田家［東越谷一］



天明４（１７８４）

23・小林 文字庚申塔

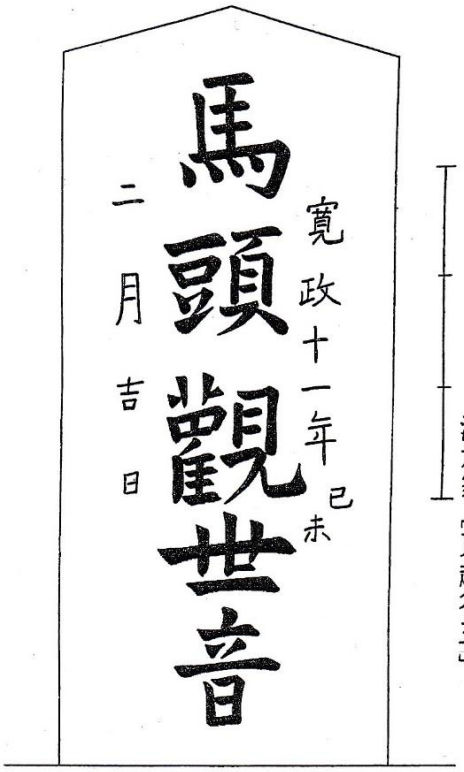
会田家［東越谷三］



嘉永２（１８４９）

24・「馬頭観音」文字塔

清水家［東越谷三］



寛政１１（１７９９）

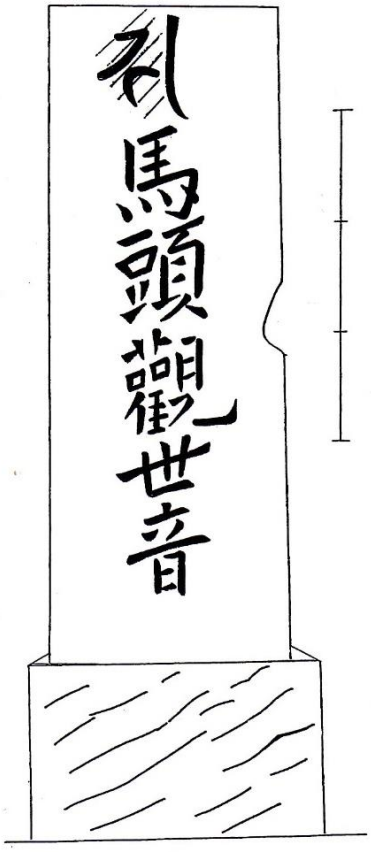
25小林・「荒神（こうじん）」文字塔



清水家［東越谷三］

明治２１年（１８８８）

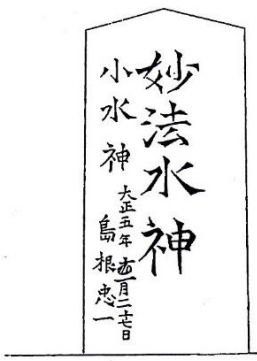
26小林・「馬頭観音」文字塔



鈴木家［東越谷二］

文化７（１８１０）

27小林・越谷八景の「水神（すいじん）」文字塔



島根家［東越谷二一二〇－四］

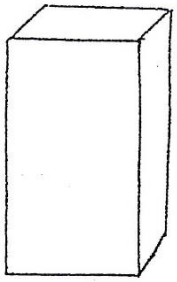
大正５年（１９１６）

塔型分類

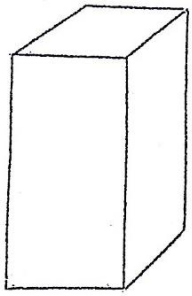
当資料では、石塔の型式の分類を以下のようにする。

頭部

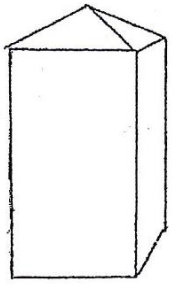
角型



角柱型



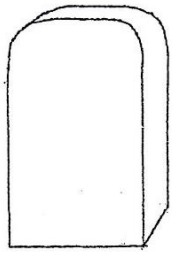
山状角型・角柱型



（尖頭角型）

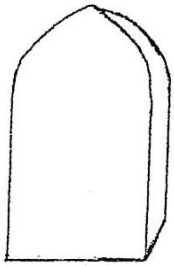
上部

隅丸角型

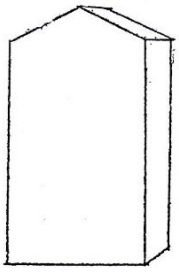


（櫛型）

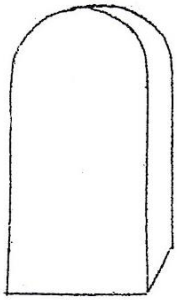
舟型



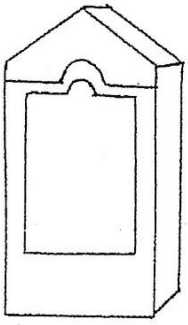
駒型



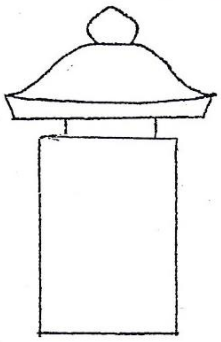
上部丸型



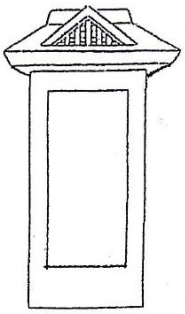
板碑型



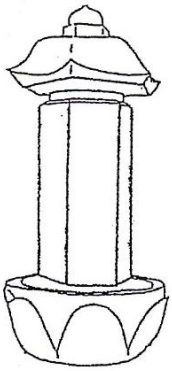
笠付角型



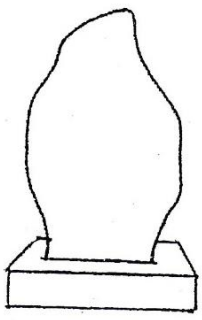
祠型



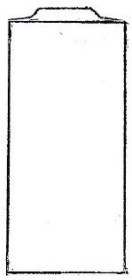
六面石幢



自然石



頭部丘状角型



また、石塔の高さの目安を以下のようにする。

「低」は　～５０cm　　「中」は　５０cm～１２０cm

「高」は　１２０cm～２７０cm　　「超高」は　２７０cm～

旧増林村の石仏

（1）増林前波（ぜんなみ）の水神宮

1．道標付き普門品供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・前波［ぜんなみ］の水神宮
石塔型式　頭部山状角型（北向き・高さは中）
年　号　文化十二年（一八一五）
［左側面］
ひがし　こやすくわんをんミち
［正面］
文化十二乙亥　全波組　講中
普門品供養
二月吉祥日
［右側面］
ミなみ　こしがや江戸　願主要心
きた　のださしま　みち　世話人　源右ヱ門

※左側面に刻まれた道標には、「ひがし　こやすくわんをんミち」（東、子安観音道）となっている。林泉寺には、現在でも観音堂（大慈殿）に子安観音を安置している。かつては「子安観音」の寺院として大変有名であったことがわかる。

2．敷石供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・前波の水神宮
石塔型式　頭部山状角型（北向き・高さは低）
年　号　嘉永六年（一八五三）
［左側面］
セ　□良（六カ）兵ヱ
ハ　大助
人　平六
［正面］
嘉永六癸丑年　発願主　半五□（良カ）
敷石□（奇カ）□
川岸舩持中　※「敷石寄付」カ
大吉巳之七
二月吉□（日カ）
川崎仲吉ヱ門
［右側面］
前波組氏□中
粕カベ新町石工寅□

3．道標付き成田山供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・前波の水神宮
石塔型式　角型（北向き・高さは中）
年　号　慶応三年（一八六七）
［左側面］
右こ□□（しが）や二十丁
左のだ　二里
［正面］
成田山
増林□張　是ゟ（二カ）□丁　世話人　三郎右衛門　儀右衛門　弥兵衛
［右側面］
慶応□□（三カ）年

4．普門品供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・前波の水神宮
石塔型式　自然石（東向き・高さは高）
年　号　嘉永元年（一八四八）
［正面］
普門品供養
鑑章斉于時謹書㊞
［台石］
戸張佐治右ヱ門
平野源八
岡安又左衛門
平野権左ヱ門
中山重三郎
同　儀右衛門
中埜平八
岡安新五右ヱ門
平野吉五郎
［裏面］
嘉永元戊申年六月建焉
増林邑前波組講中

※焉＝之

◎ 弘法大師像の石の祠堂

普門品供養塔そばにある石の祠の前に「太子講」と書かれた木札が置かれ、中に太子講が奉納した弘法大師座像の石像（高さ31㎝）が安置されている。祠の中をのぞいてみると弘法大師座像の脇に文字が書かれた扇の木板の掛軸のようなものが置かれている。『越谷ふるさと散歩（下）』（本間清利）では「祠堂の外に掲げられていたものであろう。」としている。掛軸には「御遠忌 第十一番水神宮 御詠歌 くもはれて またくもかゝる すいじんの みづにすむのも のちの よのため 昭和九年 七月廿一日」との歌が墨で記されている。昭和九年の弘法大師千百年遠忌の奉納である。

（2）定使野橋そば水神宮

この水神宮は増林村の北東の端にある定使野の地に祭られている。もとは個人の敷地内に祭られていたものである。

5．百八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』諸国廻国二番）
所在地 増林・定使野橋そば定使野公園内の水神宮
石塔型式 頭部山状角柱型（南々東向き・高さは中）
年　号 寛政五年（一七九三）
［左側面］
越後国三嶋郡出雲崎
願主市川惣右衛門
［正面］
天下泰平
（梵字ア）奉納秩父坂東
西国四国 順礼供養宝塔
国家安全
［右側面］
寛政五癸
丑天四月吉日

6．地蔵菩薩像付き念仏供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・定使野橋そば定使野公園内の水神宮
石塔型式 特殊型（南々東向き・高さは中）
年　号 宝永八年（一七一一）
［正面］
奉造立念佛同行三十二人信心 施主
（地蔵菩薩立像）
（辛）
宝暦八□
（卯）□天正月吉日 敬白

7．宝篋印塔
所在地 増林・定使野橋そば水神宮
石塔型式 宝篋印塔（南南東向き・高さは中）
年　号 寛永十三年（一六三六）
［正面（塔身）］ ［台石（基礎）］
寛永十三年
（不明） 内海行人
□十月□

※各地を信仰のために旅する行者がこの地で亡くなった墓塔であろうか。

8．「水神宮」文字塔
所在地 増林・定使野橋そば水神宮
石塔型式 駒型（南南東向き・高さは中）
年　号 嘉永二年（一八四九）
［左側面］
嘉永二酉□
［正面］
□神宮 ※「水神宮」カ
［右側面］
六月吉祥□ ※□は「日」

※花田二―二―七の戸張喜蔵氏からの水神宮に関する聞き取り調査によると、次の通りである。

水神宮の地に、かつては小沢家が住んでいてその敷地内に祀っていたが、小沢家が現在地の花田二―一七―一に移転すると、しばらく空き地となっていた。

大正十二年に関東大震災翌年あたりに、増林の前波の前波の水神社のそばに住んでいた戸張喜蔵氏の父がこの空き地（旧住所・増林四六九）に移転してきた。裏（北側）には逆川が流れ、旧・定使野橋の土橋が架かっていたが、ここが公園化することによって、逆川や土橋の地域は公園となって消滅する。それにともない戸張家は、現在の花田二―二―七に移転する。

水神宮の行事は七月七日の「夜宮(よみや)」と呼ばれる夜祭りがあり、水神宮に二つの提灯を掲げるのはかつては花田二ー一七ー一の小沢家で、翌日には「御神酒(ごじんしゅ)」(お神酒)が地元の定使野(じょうつかいの)の有志によって行なわれていた。場所はかつては小沢家であったが、その後は花田二丁目自治会館となる。

(3) 定使野(じょうつかいの)共同墓地

現在は宮野橋の新方川下流六十メートル先の右岸にあるが、もとは宮野橋の上流六十メートル先の拡幅された川の中程から右岸の岸辺あたりに「宝珠庵」と呼ばれた寺院跡地であった。昭和五十九年から六十年にかけて現在地に移転したのである。

9・道標付き三界万霊塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地　増林・定使野共同墓地路傍
石塔型式　駒型(東向き・高さは中)
年　号　寛延四年(一七五一)
[左側面]
ふとう道
[正面]
右　こしがや道
願主増林村慨誉放山慈光尼
(一仏)　三界萬霊有無縁等
寛延四辛未天三月吉祥日
左　さしま道
[右側面]
のだほうし花道

※不動道(大相模の不動尊に参詣する道)、越ヶ谷道、猿島道、野田・宝珠花道を示す道しるべを兼ねた石塔で、元は猿島道(現在の野田街道)にあった。現在の「花田交差点」の北東角地である。

10・青面金剛像庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔一四七番)
所在地　増林・定使野共同墓地路傍
石塔型式　駒型(東向き・高さは中)
年　号　安永四年(一七七五)
[左側面]
奉建立庚申供養
[正面]
(日月)(青面金剛像)(二鶏)(鬼)(三猿)
[右側面]
安永四乙未正月吉日　定使野村　講中

※定使野は増林村の一部であるが、かつては単独の村であったことが裏付けられる貴重な石仏である。

11・「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』馬頭三〇番)
所在地　増林・定使野共同墓地
石塔型式　駒型(西向き・高さは低)
年　号　嘉永六年(一八五三)
[正面]
嘉永六丑五月吉日
馬頭観世音
定使野

12・観音像付き普門品供養塔(『越谷市金石資料集』普門品五番)
所在地　増林・定使野共同墓地
石塔型式　浮彫仏像付角柱型(西向き・高さは高)
年　号　天明九年(一七八九)
[正面]
天明九己酉歳増林定使野　[台石]　願主
(観音菩薩座像)奉読誦普門品二万巻供養
二月吉祥日　講中二十人
[右側面]
門助
文化六年
外　二万巻供養
巳　九月吉日

13・筆子塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地　増林・定使野共同墓地(中村家墓所)
石塔型式　笠付角型(西向き・高さは中)
年　号　不詳

［左側面］

［台石］

當所　小沢門　助
會田八郎兵ヱ
滝田和　吉
横川半四郎
平野藤　吉
島田与　市
中村又　市
赤岩　山崎与兵衛
松伏　鈴木又右衛門
粕壁　丸八いつ女
前波　中山儀右ヱ門
升岡庄　蔵

［台石］

［正面］

當院再職白髭翁祐清法印
妙教院空阿浄心優婆夷
前准年行事召翁祐仝法印
蓮昭院發譽彭泉薫優婆夷

［右側面］

［台石］

弥十郎村　嶋田平録
白鳥辰五郎
花田　澤初太郎
同　柳右衛門
同　國次郎
染谷利　助
新戸亀次郎
松沢源太郎
高畑　尾ヶ井長左ヱ門
同　平左ヱ門
同　音次郎

［最下段の台石の右側面］

弥十郎　石井松五郎
尾ヶ井岩蔵
當所　島田定　七
鈴木市五郎
須賀茂兵ヱ
尾ヶ井熊次郎
同　与市
高橋庄太郎
大沢　同　□蔵
同　久次郎
清水忠兵衛
大吉　加藤市太郎
前波　岡安磯五郎
同　幸次郎
神明下　松沢孫左ヱ門
黒田栄次郎
野島幸次郎
増森くら女
原右ヱ門
□次郎
直次郎

※中村家の屋号は「梅光院」。梅光院は宮野橋より千間堀の上流百メートル先の左岸にあった寺院。江戸時代はこの寺院と宝珠院は陸続き、千間堀は梅光院の東側を迂回して流れていた。

14．筆子塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・定使野共同墓地（中村家墓所）
石塔型式　丘状頭角型（南向き・高さは中）
年　号　明治元年（一八六八）

［左側面］

法印保榮者下野國足利郡山下邨普門院任職中島俊長二□
也弘化元年來於此地而襲於梅香院二十八世矣嘉永二□□
歴於大倭國箕面葛城大峯諸山樹下石上□□艱苦以究顕密
法同時上京洛遂被許浅黄色法服歸郷而後以餘□□國詩自
稱梅園香守吟詠不尠矣當時入門而受学業者□百有餘人豈
可不謂盛乎于時明治元年四月五日□享年五十有七歳也

［正面］

［台石］

明治元戊辰年四月五日　筆
前准年行事無恕院保榮法印　子　※准年行事
運　壽　妙　順　大　姉　中　修験の格式

［右側面］

むさしのの　ちくさに宿る
　月かげも
はかなくきゆる
　風のしら露

15．光明真言曼荼羅塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・定使野共同墓地
石塔型式　舟型（南向き・高さは中）
年　号　不詳

［正面］

（梵字「カーン」）厳説清信士
（光明真言曼荼羅）
（梵字「ウン」）厳智清信女

※カーンは不動明王、ウンは降三世明王

16・六十六部供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・定使野共同墓地
石塔型式　円柱型（南向き・高さは高）
年　号　天保四年（一八三三）
［左側面］
清祐禅定尼　元禄十一寅年十一月　一六九八
泰嶽春芳信士　文政二卯二月二十一日　一八一九
霜岩智白信女　文政二酉十二月初日
回念本向信士　寛政六寅三月七日　一七九四
道雲自照信士　明和九子八月十二日　一七七二
要山道機沙彌　文政八乙酉天十月八日　一八二五
祖山妙眼比丘尼　天保四巳十月八日　一八三三
［正面］
六十六部供養塔
［右側面］
先祖代々一切精霊
妙開信女　女　享保廿卯七月十日　一七三五
浄室妙光信女　文化十酉四月廿二日　一八一三
幻夢童子　子　寛政九巳十月十二日　一七九七
道學智照童子　文化十酉九月三日　一八一三

（4）島田家（花田二－三－七）稲荷社

17・百箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田（大字増林字定使野）・島田家（花田二－三－七）稲荷社
石塔型式　笠付き角柱型（東向き・高さは中）
年　号　弘化二年（一八四五）
［左側面］
弘化二乙巳三月吉日
［正面］
奉順禮西國百番供養塔
坂東　源治良
［台石］
施主
文内　嶋田
秩父　□

※ここに定使野の島田家を含む産業道路（越谷八潮線）の東西の広い地（ヨークマートやダイレックス）には、このあたりの土豪である島田帯刀（たてわき）の「帯刀屋敷」と呼ばれた陣屋があったという江戸時代以前のことである。（「大沢猫の爪」）。

18・「荒神（こうじん）」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田（大字増林字定使野）・島田家（花田二－三－七）稲荷社
石塔型式　祠型（北向き・高さは低）
年　号　元禄七年（一六九四）
［左側面］
元禄七甲戌年
［正面］
荒神
［右側面］
九月十五日

※荒神とは、三宝荒神（さんぽうこうじん）のことで、カマドの神である。
※この石塔は、もとは花田二－六－五の島田家の北隣にある「逆さ川」の対岸、北岸伝いの道の路傍にあった。このあたり一帯の地を地元では「こうじん耕地」と呼んでいた。「こうじん」との耕地名は、この石塔から由来するのであろう。

（5）「かけい堀」そば十字路

19・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二九三番）
所在地　増林・野田街道東側の「かけい堀」そば十字路南東の路傍
石塔型式　頭部山状角柱型（西向き・高さは中）
年　号　嘉永七年（一八五四）
［左側面］
左ふどう道
［正面］
（日月）庚申塔（三猿）
［右側面］
右のだミち
［裏側］
嘉永七年六月吉旦樹之
［台石］
※もとは猿島道（野田道）にあった。
「左不動道」とは、南に進む猿島道が不動方面の道を意味している。
「右野田道」とは、北に進む猿島道が野田方面の道を意味している。

20・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔三五番）
所在地　増林・野田街道東側の「かけい堀」そば十字路南東の路傍
石塔型式　駒型（西向き・高さは高）
年　号　元禄十七年（一七〇四）
［左側面］
奉供養庚申講諸願成就
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］
元禄十七甲申卯月吉日

おひつ　おたつ
おたん　おこ□（けヵ）
おまん　おふう
おけさ　おけさ
おふし　おとら
おふく　おまん

［台石］
平野源左ヱ門
岡安□右ヱ門
岡安孫□郎
関根五兵衛
平野源兵衛
中野□□□
中野□□衛門
岡安権四郎
中山久四郎
中野三郎右衛門
□□義兵衛
おせん
おつま
おせん

※山本泰秀氏の調査によると、「かけい堀」と県道とが交差する南側角地にかつては高さ五尺の西方の不動尊への道しるべの石塔があり、野田道と不動道の文字が刻まれていたという。五尺とはこの20番をさし、道しるべの石塔とは19番をさすと思われる。
※猿島道（現在の野田街道）から掛樋堀（かけいぼり）沿いに入り、現在の宮前橋方面に通じる古道は、大相模　の不動尊への近道と地元ではいわれた。

（6）清涼院墓地

山本泰秀氏（増林二―四九四）によると、廃寺となった清涼院のお堂は元はここより西方百六十メートル先かけい（懸樋）堀と県道とが交差する南側の一帯にあったという。このあたりが清涼院の境内地であろう。ここは清涼院（清了院）の境内から離れた清涼院の墓地である。

21・石燈籠供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　頭部半球付角型（東南東向き・高さは中）
年　号　享保七年（一七二二）
［正面］
奉納石燈籠念佛
享保□（七ヵ）壬寅年　増林村
七月吉日　講中

22・十三仏像容塔（『越谷市金石資料集』十三仏三番）
所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　笠付角型（東南東向き・高さは中）
年　号　明和七年（一七七〇）　天明七年（一七八七）
［左側面］
明和七庚寅二月吉日
［正面］
（大日）（薬師）（弥勒）（不動）
（阿閦）（観音）（地蔵）（釈迦）
（虚空蔵）
（阿弥陀）（勢至）（普賢）（文珠）

［台石］
講中　おはな
妙空　おはち
貞光　おはつ
おしけ　おきわ
おかく　おいく
久栄　おかち
おまん　お七
おさい　茂吉
おさわ　おろく
天明七未天
江天旭潭
二月廿七日

※宝珠と剣を持っている虚空蔵菩薩、智拳印を結んでいる大日如来、阿閦触地印は結んではいないが配置からして推定できる阿閦如来、阿弥陀説法印を結ぶ阿弥陀如来、薬壷を持つ施無畏・与願印の薬師如来、蓮の花を持つ観音菩薩、合掌する勢至菩薩、両手のひらに宝塔を載せた弥勒菩薩、宝珠と錫杖を持つ地蔵菩薩、配置から推定して蓮の花を持つ普賢菩薩、羂索と剣を持つ不動明王、施無畏・与願印の釈迦如来、経典を上に載せた蓮の花を持つ文珠菩薩、以上合計十三の仏の像容が見られる。

23．十九夜念仏を兼ねた三界万霊塔（『越谷市金石資料集』月待四番）
所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　駒型（東南東向き・高さは中）
年　号　寛延四年（一七五一）
［左側面］
講中三十人
拾九夜念佛供養塔
願主平野源八
［正面］
（如意輪観音像）二二甲介萬霊等
［右側面］
武州崎玉郡新方領増林村
寛延四辛未年十月吉日上全波
［裏面］
増林村
中野浅右ヱ門
関根七右衛門
中村武助
岡安寿右衛門
同清右衛門
戸張長四郎
平野茂吉
戸張弥右衛門
向畑村
松崎五右衛門
※十九夜の月の出を待つ行事を行った記念の石塔である。十九夜月は月の出を寝て待つ頃の月なので、「寝待月」とも呼ばれる。この石塔の上部には、十九夜月の主尊の如意輪観音菩薩が描かれている。

24．出羽三山及び百観音巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　頭部山状角型（東南東向き・高さは高）
年　号　文化七年（一八一〇）
［左側面］
増林村　鈴木甚右衛門　今井清右衛門　中村孫右衛門
世話人　中野平兵衛　同六右衛門　会田惣七
小島平兵衛　同幸助　生誉浄心法師
須賀市良兵ヱ　深谷重右衛門　□本五良兵衛
榎本才兵ヱ　中村林庵　須賀長右衛門
鈴木勘右衛門　岡安又兵衛　渡辺庄八
中野源蔵　同勝右衛門　鈴木権八
関根孫七　鈴木岡右衛門　実権
文化七庚午年
［正面］
月山　坂東　天下泰平
湯殿山　西国　奉順禮百番供養塔
羽黒山　秩父　国土安穏
［右側面］
大吉村　向畑村　藤塚村
世話人染谷長右衛門　鈴木利左衛門　遠藤七良治
同久右衛門　山田小左衛門　中井村
中山佐兵衛　松伏村　杉村與右ヱ門
元木五良兵衛　鈴木彦左衛門　向畑村
加藤久兵衛　長小左衛門　鈴木栄蔵
赤岩村　同上文七
大沢下宿　染谷兵右衛門　川崎村
中山五良左衛門　鈴木佐七
十二月吉日

25．清涼院庵主供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　上部隅丸角型（東南東向き・高さは中）
年　号　元禄十年（一六九七）
［正面］
元禄十丁丑歳
風屋嶺順庵主
十一月八日
※庵主（あんじゅ）とは、庵を構えている僧侶のことで、特に尼僧をさす。清涼院の女性住職の供養塔であろうか。

26．「暦住塔」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　自然石（東南東向き・高さは中）
年　号　不詳
［正面］
暦住塔（篆書）
［裏面］
前□平□鳳十九世千舟海鱗大和尚
清涼院而造立之者也
※「暦住塔」とは、代々の住職の標識塔という意味であろう。

※禅宗では、開山は寺院を開いた僧侶、開基は寺院に大いに貢献したほどの在家の人をさす。ここにあげる梅岩勝林居士は開基の一人である。

86.「祖師西来意（そしせいらいい）」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　O家墓所
石塔型式　板碑型（南東向き・高さは中）
年　号　寛文元年（一六六一）
［正面］
于時寛文元年
（鶴カ）
祖師西来意　□　宗椿禅定門　施主
辛
丑八月吉祥日　敬白

※『祖師西来意』とは禅宗でみられる公案の一つである。公案とは仏法を究めさせるために参禅者に出された問題である。『祖師西来意』は「達磨大師が西のインドから中国にやって来たということはどういう意味か」という内容の問題である。祖師とは中国禅宗の開祖達磨大師。
※この岡安家の『祖師西来意』文字塔には「吉祥日」の文字が見られる。ゆえにこれは墓塔ではなく、公案に関する信仰上の貴重な石塔といえる。この石塔を建立した施主「宗椿禅定門」の禅宗（曹洞宗）に対する信仰の深さがうかがえる。
※山本泰秀氏によると、岡安家一族の先祖は、西の丹波国（京都府）の綾部郡岡安村よりこの地に来たという。

◎K家の『祖師西来意』文字塔
　K家墓所にも、O家より二年前の万治二年（一六五九）に建立された『祖師西来意』文字塔（板碑型）がある。長い年月にわたって雨風にさらされたため、表面が摩耗し不鮮明であるのが残念である。この石塔は、亡くなった家族の者への供養をかねた墓塔といえる。栗田家も岡安家と同様に禅宗に対する故人の信仰の深さがうかがえる。

　　万治二年
祖師西来意　玉林寿銀禅定尼
　　己
　　亥霜月朔日

※『祖師西来意』文字塔は、市内ではここ勝林寺の二基と末寺の清涼院跡墓地北西塀側に関根内蔵助家の寛文年間の墓塔（板碑型）がある。

87.六十六部廻国塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　I家墓所
石塔型式　笠付角型（南東向き・高さは中）
年　号　宝暦五年（一七五五）
［左側面］
宝暦七丁丑天　※一七五七年
喜顔慈見信女　九月初八日
明和庚寅年　※一七七〇年
海雲照月信女　十一月廿二日
［正面］
天下和順于時宝暦五乙亥天　※一七五五年
奉読誦大乗妙典廻国供養塔
明和三丙（戊）□　※一七六六年
願主　心柳見外
日月清明十一月吉旦　三月廿一日
［右側面］
心海広円信士　安永三甲午正月廿日　※一七七四
半窓禅定尼　延享三丙寅九月初五日　※一七四六
［裏側］
武州埼玉群（郡）新方領増林村
二二　界　萬　霊　等
施主石井氏　次郎左衛門

88.烏八臼（うはつまゆう）の墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地、T家墓所
石塔型式　板碑型（北東向き・高さは高）
年　号　寛文七年（一六六七）
［正面］
維寛文七丁未天
鴿為應順禅定尼菩提也
五月念八日

[右側面]

二月吉祥日

中嶋孫左ヱ門
同　平八
岡安長兵ヱ
願同　要吉
主同　重平
須賀平兵ヱ
同　重良右ヱ門

※台石は、すぐそばの別の所にある。横幅は五十三・八センチ、高さは二十五センチ、奥行きは四十八・五センチんで、正面に三猿が描かれている。

83. 道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一八七番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　変形角型（頭部上部が平らな突部付・南東向き・高さは高）
年　号　寛政十年（一七九八）

[左側面]　わたしバ道　[台石]

[正面]

当所庚申講中
講頭　岡安助左ヱ門
同　忠左ヱ門
同　与ヱ門
須賀作ヱ門
同　新助
同　徳兵ヱ
同　甚左ヱ門

天下泰平

五穀成就

(日月)青面金剛　(三猿)

越前国□念
石井八ヱ門
同　八兵ヱ
栗原安左ヱ門
小川大助
同　十良兵ヱ
同　岩五郎
講中奇附金二朱

講内當増林山大正院

[右側面]

寛政十年戊午三月吉祥日

ふどう道
小川十右ヱ門

※台石は、すぐそばの別な所にある。横幅六十・五センチ、高さ三一・五センチ、奥行き五十九・五センチである。
※「わたしば（渡し場）」とは、古利根川の対岸の上赤岩と増林を往来していた「渡し場」のことをさすと思われる。この渡し場は「ばば渡し場」ともいう。「ばば渡し」については105番の解説文を参照のこと。

84. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔五五番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　舟型（南東向き・高さは中）
年　号　正徳四年（一七一四）

[正面]

奉造立庚申之尊像
諸願成就之処敬白
(日月)（青面金剛像）（鬼）（三猿）
願主中組□□
正徳四□天二月

85. 一葉観音像付き開基塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地S家墓所
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年　号　寛永元年（一六二四）、建立年代は寛政九年（一七九七）カ

[左側面]
儀賢禅門　文明二歳九月廿九日　※文明二年は一四七〇年
□秀比丘尼明応七歳七月七日　※明応七年は一四九八年

[正面]
当寺寛永元戊子星　※寛永元年は一六二四年
（一葉観音像）法敬院梅岩勝林居士　干支は甲子だが、この石塔は戊子となっている。
開基五月廿有五日

[右側面]
月照童女　寛政八辰年六月十三日　※寛政八年は一七九六年
法儀孩児　寛政九巳年二月廿五日　※寛政九年は一七九七年

※一葉観音菩薩とは、水に浮かぶ一枚の蓮の葉の上に、左膝を立てて左手を置き、右手を蓮の葉について座る姿で表される観音。道元が日本に帰国するときに暴風雨に遭遇するが、観音経を唱えたら一葉観音が現れて道元を救ったとの説話がある。
一葉観音菩薩の像が刻まれた石仏は珍しく、市内ではここ勝林寺にしかないと思われる。

◎関根内蔵助家の『祖師西来意文字塔』

所在地　増林・清涼院墓地（北西塀側の墓所）
石塔型式　板碑型（東南東向き・高さは中）
年　号　寛文八年（一六六八）
［正面］
寛永十　癸酉年　寛文四　甲辰年
銘春禅定門　道忠禅定門　各霊
三月十日　四月十八日
祖師西来意□（鶴カ）
元和六年　寛文八戊申年
妙祐禅定尼　妙忠禅定尼　敬白
□九月四日　六月廿日
関根内蔵助

※この祖師西来意文字塔の中に、世代が違う二組の夫婦の戒名が刻まれている。つまり、寛永十年（一六三三）と元和六年（一六二〇）没の夫婦の戒名とそのせがれと嫁と思われる寛文四年（一六六四）と寛文八年（一六六八）没の夫婦の戒名である。元和の元号が刻まれているのは珍しい。現在、関根内蔵助の子孫は他所に転居している。
「祖師西来意」についての解説は、86番の項を参照のこと。

27. 地蔵像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　増林・清涼院墓地
石塔型式　舟型（北北東向き・高さは中）
年　号　寛文元年（一六六一）
［正面］
奉造立石地蔵一躰念佛誦衆為二世也發願六右門同行　拾四人
（梵字カ）（地蔵菩薩立像）
于時寛文元年　辛丑　今月吉日　敬白

（7）平野家（増林三五〇〇）邸内

28.「山神宮」文字塔（『越谷市金石資料集』山神一番）

所在地　増林・平野家（増林三五〇〇番）邸内
石塔型式　角型（北東向き・高さは中）
年　号　寛延三年（一七五〇）
［正面］
寛延三庚午四月大吉日
山神宮
願主平野源左右門

※もとは、大吉香取神社（現在は古利根堰公園）そばの平野家所有「平野稲荷社」（現在は平野家邸内に移転）前の野田道（猿島道）路傍にあった。平野家はかつては代々源左衛門を名乗り、地元では「源左衛門」がなまって「ゲンゼム様」と呼ばれ、寿橋の凡そ五十メートル下流の古利根川右岸にあった増林河岸（源左衛門河岸、ゲンゼム河岸）を差配していた。

29.「勘解由両体大権現」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　増林・平野家（増林三五〇〇）邸内
石塔型式　駒型（北東向き・高さは低）
年　号　寛政二年（一七九〇）
［左側面］
寛政二庚戌年　増林村
［正面］
勘解由両体大権現
［右側面］
信心施主
仲春吉祥日　平野氏

※高さ四〇センチ、幅三二センチの自然石の「馬頭観世音」文字塔あり。裏面には「大正十五年六月　平野茂吉　建之」と刻まれている。
※嘉暦三年（一三二八）の板碑（高さ五五センチ、幅二五センチ）あり。主尊が蓮座の上に梵字「キリーク」（阿弥陀如来）で刻まれている。
※また、鷺後用水（葛西用水、逆さ川）に架かる新方橋の東詰めの南側近く、野田街道（猿島道）西側路傍に昭和四年六月廿五日に建立した自然石の『有縁無縁一切仏』と刻まれた石塔がある。

（8）平野家個人墓地

かつて「ゲンゼム様」と呼ばれた平野家（増林三五〇〇）の個人墓地である。「源左衛門庵」と呼ばれたお堂があった。

30. 六十六部廻国塔（『越谷市金石資料集』六十六部五番）
所在地　増林・平野家（増林三五〇〇番）個人墓地
石塔型式　駒型（南東向き・高さは高）
年　号　享保五年（一七二〇）
［左側面］
願主圓心
于時享保五庚子霜月吉旦
施主平野氏
［正面］
敬白
（一　仏）奉納大乗妙典六十六部日本廻国成就之所
謹言
［右側面］
夫以武陽散人圓心僧久有廻国望于𣳾當村施主平野氏源左衛門
為蜜厳光顕法師相積寿圓大姉并有縁無縁三界万霊平等
利益有金銭之助力右之僧戊三月□廻国日本六拾六ケ国奉納
大乗妙典諸国行脚之内諸人他力善根請庚子十月古郷帰
去故供養塔造立者也　敬白

※「于𣳾」は「ときに」と読む。「𣳾」は「之(この)日」という意味。武陽散人の雅号をもつ僧侶円心が、戊年（享保三年）の三月より子年（享保五年）の十月までの二年七カ月をかけて六十六部廻国を成就している。それを記念して翌月の十月に増林三五〇〇の平野家（屋号は「げんぜむ」）の先祖、平野源左エ門が建立したものである。大松の平野家（大松一七五）路傍にある六十六部廻国塔にも円心の名が見える。

31. 石燈籠供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・平野家（増林三五〇〇番）個人墓地
石塔型式　頭部半球付角型（北西向き・高さは中）
年　号　享保七年（一七二二）
［正面］
享保七壬寅歳　増林村
奉納石燈籠
十月吉日　平野源左衛門

32. 地蔵像及び道標付き墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・平野家（増林三五〇〇）の個人墓地
石塔型式　角柱型（南東向き・高さは高）
年　号　天明二年（一七八二）
［正面］　［台石］
奉佼頭陀造立濁世導師
（丸彫地蔵立像）伏願令一切衆生不捨悲心
頓除妄想同證佛果
［右側面］（正しくはこれが正面）
右こしがや道
三界萬霊等　等＝塔
左庄内道
［裏面］　［台石］
天明二壬寅年
同會　貞松童女
十一月十七日

（9）笹原組の庚申塔　赤土製作所の三百㍍西、北側路傍

33. 文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二五八番）
所在地　増林・増林三五五五番地の角の路傍
石塔型式　角型（南東向き・高さは中）
年　号　文政十三年（一八三〇）
［左側面］
文政十三庚寅年
［正面］　［台石］
庚申（三猿）　笹原組
［右側面］
二月吉祥日

34．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔三三四番）
所在地　増林・増林三五五番地の角の路傍
石塔型式　型は不明（南東向き・高さは低）
年　号　文化三年（一八〇六）
［左側面］
（文カ）（寅カ）
□化三□□
［正面］
庚　申
［右側面］
□家□□
女人講中

35．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二一七番）
所在地　増林・増林三五五七―二番の角の路傍
石塔型式　駒型様角型（南東向き・高さは低）
年　号　年代不詳（『金石資料集』によると「文化三・一二・吉」）
［正面］
（青面金剛像）（鬼）（三猿）

※笹原組の住民によって毎年五月一日に庚申塔の前で行なわれている。

（10）鈴木家（増林三七六三）路傍

36．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二七一番）
所在地　増林・鈴木家（増林三七六三番）路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは高）
年　号　天保七年（一八三六）
［正面］
「椎の木組の庚申塔」
［台石］
榎本久助

今井清兵衛
鈴木文六
同七兵衛
同伊兵衛
同治兵衛
同勘右衛門
同金右衛門
栗田源五右衛門
榎本助右衛門
同金七
須賀左衛門
小菅仁左衛門
今井八良左衛門
栗原和助

（日月）庚申（三猿）

小菅半三郎

［右側面］
天保七丙申二月吉日

※地元では二ヶ月に一回程度の庚講（かのえ）が平成八年（一九九七）まで行なわれた。
※ここ鈴木家より百メートル西にある消防小屋の跡地（増林三六五九―一）は、かつては増林村の役場があった所である。また、ここに「増林村道路元標」がある。村役場があった名残である。

（11）今井家（増林三七一一）路傍

37．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二七〇番）
所在地　増林・今井家（増林三七一一番）路傍　元は護郷神社入口付近
石塔型式　駒型様角型（南西向き・高さは高）
年　号　天保七年（一八三六）
［正面］
「上組（かみぐみ）の庚申塔」
［台石］
関根平蔵
今井幸助
同平右衛門
平市良右衛門
鈴木庄右衛門
今井弥五右衛門
同伊三郎
同忠兵衛
吉田佐治兵衛
今井茂兵衛
同新右衛門
鈴木六良兵衛
榎本助右衛門
須賀市良兵衛
小菅彦七
榎本五良右衛門

（日月）庚申（三猿）

［右側面］
天保七丙申二月吉日

※地元では、二カ月に一回（庚申の日とは限らない）の割合で「かのえ講」（庚申講のこと）が上組一区の中で持ち回りで行なわれていたが、戦後廃止されたようだ。

（12）護郷神社（旧「浅間神社」）

浅間神社が大正二年（一九一三）に周辺のいくつかの神社を合祀して護郷神社と改称したもの

38・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二五四番）
所在地　増林・護郷神社（旧「浅間神社」）西端路傍
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　号　文政七年（一八二四）
［左側面］
文政七甲申三月吉旦
［正面］
（日月）庚申塔

39・板碑型三猿庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一六番）
所在地　増林・護郷神社（旧「浅間神社」）西端路傍
石塔型式　板碑型（南向き・高さは中）
年　号　貞享二年（一六八五）
［正面］
施主
与五兵衛
新五兵衛
三左□門
太郎兵衛
新五□衛門
甚□左衛門
彦兵衛
四郎兵衛
おくに
面金剛
奉造□庚申青（三猿）
貞享二天十二月吉日
敬白

※板碑型をした初期の庚申塔である。「奉造□（立カ）庚申青面金剛」と刻まれている。

40・石階・敷石供養塔（『越谷市金石資料集』普請供養二四番）
所在地　増林・護郷神社（旧「浅間神社」）
石塔型式　角型（北東向き・高さは中）
年　号　天保十年（一八三九）
［正面］
石階
供養塔
敷石
［右側面］
天保十己亥歳十一月　石工亀五郎作
當山現住太賢代
［台石］
中嶋村　鈴木伊左エ門
増森　林源太郎
黒田嘉兵エ
西川　須賀弥平治
山崎七郎右エ門
増森新田平林嘉右エ門
江河助右エ門
大吉　染谷七郎兵エ
向畑　石渡四郎兵エ
鈴木初右エ門
戸張久左エ門
鈴木八郎右エ門
岡田金右エ門
川崎
鈴木七郎兵エ
木邑与八

41・法華経供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・護郷神社（旧「浅間神社」）
石塔型式　笠付角柱型（南東向き・高さは高）
年　号　寛文元年（一六六一）
［左側面］
緑誉道雪禅定門為菩提也
［正面］
寛文元年辛丑
奉造立法華千部供養石塔一基
今月吉日敬白

（13）福寿院跡墓地

42・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品一番）
所在地　増林・福寿院墓地
石塔型式　頭部山状角型（西向き・高さは高）
年　号　享和二年（一八〇二）
［左側面］
当所上組
講中
二拾五人
享和二壬戌年弐月吉祥日

[正面]
天下泰平
（梵字サ）奉読誦普門品拾巻供養塔
五穀豊饒
[右側面]
新四国八拾五番　願主
正観世音　當院　中井林　庵
子大權現　同　今井幸　助
同　七郎兵エ
同　茂兵衛

43．弘法大師像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・福寿院墓地
石塔型式　特殊型（南向き・高さは中）
年　号　安永八年（一七七九）
[正面]
（弘法大師像）
[裏面]
奉造立弘法大師為令法
久住利益人天富井山住
法印快秀代施主小林
会田伊右衛門敬白于時
安永八年己亥極月之吉

44．不動明王像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・福寿院墓地
石塔型式　浮き彫り型（南向き・高さは高）
年　号　安永七年（一七七八）
[正面]
（不動明王像）
[裏面]
于時
安永七戊戌　四月八日
（梵字カーン）富井山現住法印
快秀造立之者也

◎この墓地には天正六（一五七八）の貴重な二十一仏板碑（いたび）がある。
また下部が欠けて上部だけの板碑もある。

45．宝篋印塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・福寿院墓地
石塔型式　舟型（南向き・高さは高）
年　号　安永六年（一七七七）
[左側面]
巻并供養法一千座
猶六十余州求靈山
靈場之宝土終而修
加持土砂之法廿一
箇度造立寶塔而納
是誠佛祖之大恩諸
[正面]
天中□之□威徳年
来之諸願今正成就
自他法界同證此福
于時安永六龍輯丁
酉冬大呂旬富井山
現住法印快秀謹言
[右側面]
若有有情能於此塔
一香一花礼拝供養
八十億却生死重罪
一時消滅生免災殃
死生佛家若有應隨
阿鼻地獄若於此塔
[裏面]
或一礼拝或一右遶
塞地獄門開菩提路
廣説云云　愛某宝
暦九己卯二月四日
自入當院發願而宝
篋印陀羅尼　十万



⇨
※この梵字の石と銘文の石との間の部分に隙間がある。
石塔の中心部の空洞の中に経文を入れるためか。
龍輯＝龍集　※一七七七

この墓地に「快秀」の卵塔あり

※一七五九

※この石塔のあるあたりは周囲よりも50㎝高く盛り上がっていて、石塔の場所は更に高かったようだ。この石塔は戦後数年たって倒れ、その後に少し南にずらして積み替えた。その時に、最上部の屋根やその上に載る露盤、九輪、宝珠の部分が組み込まれずにそばに置かれた。令和4年2月に、石塔全体が傾いていたので、木村榮氏ら三人により土台から積み直し傾きをなおした。

46．権僧正快運の碑（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・福寿院墓地
石塔型式　舟型（南向き・高さは高）
年　号　天明元年（一七八一）
[左側面]
當寺現住
法印快充代
[正面]　権僧正　（梵字ア）　快　運
[右側面]　和尚諱快運字音識
安永乙未年□
台命補豊山職位依
幕下執奏
敕任權僧正後再營
小池坊堂宇高建法
[裏面]
幢利濟□衆于時天
明元辛丑浪於院職
同七丁未年三月十
四日掩化矣
豊山三十七世
※法印は最高の僧位で、僧位の僧正に相当する。
[下段]
（獅子の絵）
[下段]
発願　※一七七二
檀本熊蔵王教義　※檀本＝榎本
今井清右ェ門
同幸助
并講中
※一七八一

47．「子権現」塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・福寿院墓地
石塔型式　特殊型（南向き・高さは低）
年　号　不詳
[正面]
子大権現
（巻物と数珠を持つ僧侶形の座像・「子の権現」像か）
因位御影　※因位・・菩薩の地位。
※「子の聖大権現」とも呼ばれ、子年（天長九年）の子日子刻に生まれた子といい、足腰を治す神仏。聖つまり僧侶の姿をしているのであろうか。

（14）須賀家（増林三七八一）前

[参考]五大の梵字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家（増林三七八一番）前
石塔型式　板碑型（南西向き・高さは中）　年　号　寛文四年（一六六四）
[正面]　寛文四甲辰年　新方領之内増林村住施主万海敬白　十月廿六日
（梵字ア・ジ）（梵字キャ・カ・ラ・バ・ア）善海
◎なお増林駐在所裏の路傍に「馬頭観世音」、裏面に「大正二年十一月廿三日」と刻まれた自然石の馬頭観音文字塔がある。地面からの高さは一一五㎝、幅は六五㎝である。
台石に書かれた人名は以下の通り。
[左側面]
発起人　小菅　安□郎　榎本　竹□□　今井　徳次郎　鈴木　栄次郎　平野　丑蔵　栗原　権次郎　尾川　仁蔵　小菅　仙蔵
[正面]
寄附連名
平野　茂吉　鈴木　芳太郎　竹ノ内清次郎　山崎　貞次郎　鈴木　作次郎　今井　善五郎　鈴木　春蔵　須賀　傳之丞　須賀　秋□郎　尾川　祐吉　岡安　徳太郎　関根　和吉　平野　豊吉
[右側面]
染谷　清次郎　黒田　仙蔵　染谷　信太郎

（15）林泉寺

林泉寺はかつて「子安観音」の寺として知られ、その子安観音像は本堂向かって左側手前の観音堂に安置されている。

48．百観音・八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（県道沿いの薬師堂墓地）
石塔型式　頭部山状角柱型（西北西向き・高さは中）
年　号　文化十二年（一八一五）
[左側面]
夏山童子　文化三寅癸天三月十三日
妙音童子　享和三癸天三月廿三日
[正面]
文化十二亥年八月十二日
四国　進誉忍精信士
西国
奉　巡礼供養塔
秩父
坂東　本誉周圓信女
享和元酉年十月十六日
※「増林48」の図版は平成11年に描かれたものである。蓮台や台石がみられるが、現在はその蓮台や台石はなくなっている。
※この巡礼塔は、薬師堂墓地（今井家墓地）入口入って右端にある屋号「油医者」の墓所に見られる石塔である。薬師堂の開帳は4月8日。屋号「油医者」は、菜種油の販売と開業医から呼ばれたようだ。この墓所には他に、次にあげる49や50の石塔もある。

49．百観音・八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（薬師堂墓地）
石塔型式　山状角柱型（西北西向き・高さは中）
年　号　文政五年（一八二二）
［左側面］
江都横山町二丁目
住吉屋新助母
行者　さく
施主　笠原組　今井清右エ門
［正面］
天下泰平
奉　四国西国
（弘　法　大　師　像）　供養塔
納　坂東秩父
国土安穏
［右側面］
文政五　壬
午　年二月
50．地蔵像付き三界万霊塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（薬師堂墓地）
石塔型式　角型（西北西向き・高さは中）
年　号　延享四年（一七四五）
［左側面］
［　台　石　］
延享四丁卯年三月廿七日
［正面］
［　台　石　］
施主
（丸彫り地蔵菩薩立像）三界万霊有無両縁等　※等＝塔
［右側面］
今井氏
［　台　石　］
乗誉迎雲大徳
51．板碑型墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（薬師堂前）
石塔型式　板碑型（西北西向き・高さは中）
年　号　寛永十三年（一六三六）
［正面］
寛永十三丙
子　年
（観音梵字）
（阿弥陀梵字）　春　琮　禅　定　門
（勢至梵字）
三月十七日
※寛永年間の墓塔は珍しい。平成十一年の調査ではここ薬師堂墓地にあった。その後、墓地全体が大きく改葬されて整然となったが、現在は残念ながら所在不明となっている。
［参考］
※墓地の正面奥に今井家の大きな墓所（屋号が「おおいまい」）「大今井の意味」）がある。そこに万治二年（一六五九）と刻まれた江戸初期の高さ87cmの板碑型の墓塔がある。干支は「庚子（かのえね）」と刻まれている。庚子は万治（まんじ）三年をさす。年号と干支とが矛盾しているが、当時は「干支」は生活に密着して人々の間で使われているので、万治三年が正しいことがわかる。このように江戸初期は、刻まれた年号に誤りが見られることがある。
（サ）　皆万治二　庚
子　年　※皆＝ときに
（キリーク）　壽清禅定門　※万治三年の誤り。
（サク）九月十一日
※屋号が「大今井（おおいまい）」と呼ばれた今井家は、かつての敷地は広く（増林三〇九九番地）、若くして県会議員になった今井晃（あきら）氏が出るほどの家柄である。

52. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一三七番）
所在地　増林・林泉寺（県道そば）
石塔型式　駒型（北西向き・高さは中）
年　号　明和五年（一七六八）
［左側面］
奉造立庚申供養
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］
明和五戊子四月吉日　願主
講中

53. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一八五番）
所在地　増林・林泉寺（県道そば）
石塔型式　駒型（北西向き・高さは中）
年　号　寛政九年（一七九七）
［左側面］
寛政九丁巳四吉祥日
［正面］
［台石］
上組
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）

54.「不動剣」石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺の不動堂裏
石塔型式　自然石（南西向き・高さは中）
年　号　明治十四年（一八八一）
［正面］
（日）成田山不動明王
（月）（　不動剣　）
［裏面］
明治十四年辛巳歳□月□
増劔講拝中□

55. 地蔵像付き念仏供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺裏の土手下（後に、林泉寺参道に移転）
石塔型式　舟型（西向き・高さは高）
年　号　嘉永二年（一八四九）
［正面］
奉造立地蔵尊発起　當山開誉代
（地蔵菩薩立像）
干時嘉永二酉星四月檀志萬人講
［台石］
世話人　女※歳神（木星）の年
講　回りによる記銘と
中　して「星」と記載。

※越谷市郷土研究会理事の小原勘三郎氏によると、次のように紹介されている。（平成四年の「第十八回越谷市民まつり」の『増林の地蔵尊』）
なお、文中にある「お姫講」は現在は廃止されている。
上組のこの場所は、溺死者・疫病死者の火葬場跡ともいわれている。
市内には、かつて女性の講の発達が著しく、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念仏講と、女性のみの年齢階層による講が多かった。台石に「女講中」とあるのは、定かでないが、林泉寺に今も続く女性の念仏講（お姫講ともいう）とつながりがあるのかも知れない。
平成十四年十一月に林泉寺参道に移転。

56.「三部経」供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺の地蔵堂そば関根家墓地
石塔型式　舟型（南東向き・高さは高）
年　号　年号不詳
［正面］
三部経百五十部供養塔
（梵字サ）（観音菩薩立像）

※表面が薄く削られた跡がある。秀作の観音像の墓石を再利用したのかもしれない。

57. 地蔵像付き念仏供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（参道南東側墓地）
石塔型式　舟型（南東向き・高さは高）
年　号　寛文七年（一六六七）
［正面］
奉造立地蔵為菩提也念佛講
（梵字カ）（地蔵菩薩立像）
旨寛文七丁未年八月廿四日同行二十人　※旨は「ときに」

※この石仏は元は増林三八九四の今井家北東隣の榎本家敷地内にあった。
昔、この地で起きた切り合いによる死者を弔うために造立したとの言い伝えがある。

58. 利剣名号塔（浅間山噴火供養塔）（『越谷市金石資料集』名号一四番）
所在地　増林・林泉寺（山門前）　※天明三年七月七日の
石塔型式　山状角型（南西向き・高さは高）　浅間山の噴火のちょうど
年　号　天明四年（一七八四）　一年後に造立された石塔
［左側面］
子　天明四甲辰歳
［正面］
安　観世音　七月初七日
勅許　疫癘除　□□偏利劍名號者為除滅天変地妖災癘　朝廷賜于當寺
知恩寺主写之　□（声カ）誉融音
南無阿弥陀仏　（花押）
林泉寺十九主
頂誉（花押）
［右側面］
新西国三十一番
正　観音　正林山
［裏側面］
願主　宣然
上州　中妻浄圓
信州　為横死流転忘霊皆蒙解脱也　清兵衛（亡霊）
行倒
餓鬼施主定使野組中

※疫癘除の疫癘とは疫病のことで、悪性の流行病。知恩寺とは京都市左京区百万遍にある由緒ある浄土宗寺院、「百万遍知恩寺」としても知られる。「正林山」とは林泉寺の山号。「中妻」は地元中妻組のこと。
※林泉寺には子安観音が安置されていて、かつては子安観音の信仰が盛んであった。江戸への出開帳も行われ、江戸との関係が見られた。
※林泉寺は、武蔵三十三箇所（観音霊場）札所巡りの三一番にあたる。
※この名号塔の正面の名号「南無阿弥陀仏」の文字は、文字の先端が剣のように尖っている「利剣名号」である。利剣名号は、後醍醐天皇の時代に宮中より浄土宗本山の知恩寺（総本山の知恩院とは違う）に下賜されたものといわれる。この名号の文字の周囲に刻まれた金石文には『天皇の許可　疫病除け・・・利剣名号は天変地妖や災害・疫病を取り除く　朝廷より当寺に賜る知恩寺の住職である声誉融音がこれを書き写す　林泉寺　第十九世の頂誉』。裏面には『横死の為、流転亡霊、皆解脱を蒙る也』というような内容が刻まれているようだ。天明三年七月七日に発生した浅間山の噴火による死者を弔う供養塔は当時よく見られたが、このような由緒ある利剣名号塔の供養塔はここだけかもしれない。

59.『新六阿弥陀二番』標識石塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（山門前）
石塔型式　頭部山状角型（南西向き・高さは中）
年　号　天明八年（一七八八）
［左側面］
天明八戊申年
［正面］
新六阿弥陀二番　林泉寺
願主船渡村
受道
［右側面］
五月廿五日

※59番は六阿弥陀参りのために寺院に建てた標識である。「六阿弥陀参り」とは阿弥陀如来を安置している六ケ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。江戸の町で盛んに行われた。この越谷地域にも江戸の六阿弥陀参りをまねて『新六阿弥陀参り』として行われたのであろう。現在、増林の林泉寺に『新六阿弥陀二番』、ここ林西寺に四番、大泊の安国寺に五番、大松の清浄院に六番の標識が残っている。願主はすべて船渡村の受道である。なお、一番は不明であるが、当時勢力のあった天岳寺であろう。また三番は従来は登戸の報土院とされてきたが、平成十八年五月の調査により、江戸時代の本来の三番は松伏町赤岩の源光寺であることが判明した。以上の寺院はすべてが阿弥陀仏を本尊とする寺院である。

60.『御殿境内』文字付き巡礼標識石塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺境内（山門前向かって左脇）
石塔型式　角型ヵ（南東向き・高さは中）
年　号　不詳

[左側面]
増林村林泉寺
[正面]
正観音武州順禮
[右側面]
第三十一番
[裏面]
御殿境内

「越谷市史続史料編(一)」の一〇四頁「西方村旧記壱」より引用した文章を紹介する。「増林村御殿跡と申し候は、当時(「現在」の意味、文政年間か)右村(増林村)林泉寺境内ニ正(しょう)観音建て置き候場所、御殿跡と申す石杭(いしぐい)ニ記し有之由(これあるよし)、右村役人榎本氏(増林三八九〇の榎本家先祖)より承り伝え置き候」とある。つまり、林泉寺境内の「正観音堂」(現在の「観音堂」)のそばに「御殿跡」と刻まれた石杭があると、西方村の人が増林の榎本氏から聞いているとしている。石杭とは今で言う石塔のこと。鷹場御殿を意味する「御殿境内」の石塔には造立年が刻まれていないのが残念である。一方「正観音武州巡礼第三十一番」と表面に、両側面には所在地や「第三十一番」と刻まれた時期は、武蔵国三十三ヶ所観音霊場が開創された元禄十年頃と思われる。

増林村の榎本氏が伝えた「御殿境内」を西方村側では聞き間違えて「御殿跡」として記録に残してしまったのではないか。「御殿跡と申す石杭」とはこの現存する「御殿境内」の石塔のことと思われる。

いずれにしても林泉寺は、かつては豪華さを極めたであろう越ヶ谷御殿とともに、家康が鷹狩りで立寄った寺院の一つであり、恐れ多くも「御殿」の言葉が使われたことから、仮御殿として家康に愛された家康ゆかりの寺院だったと思われる。

61. 阿弥陀如来像付き開山塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地　増林・林泉寺(歴代住職の墓地)
石塔型式　舟型(南東向き・高さは高)
年　号　寛文五年(一六六五)
[正面]
(梵字キリーク)(阿　弥　陀　如　来　像)
法界平等利益林泉寺住持
寛文五乙巳年七月十五日開山本誉上人
※この寺院を開山した本誉上人の墓塔である。本誉上人は文正元年(一四六六)に開山した(新編武蔵風土記稿)。また永仁五年(一二九七)の銅像阿弥陀如来像があり、開創は永仁五年と考えられている。

62. 辞世の句付き僧侶の墓塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地　増林・林泉寺(歴代住職墓地の南東隣)
石塔型式　頭部六角錐状六角柱型(南東向き・高さは中)
年　号　安永四年(一七七五)
[左側面]
降ツモル深山ノ雪モ春ノ日ノ
光(ひ)カリサスヨリ消テ行ラメ
[右側面]
安永四乙未歳
[正面]
経蓮社典誉信阿孔善和尚
[右側面]
正月初四日
[右側面]
唯タノムねテモサメテモナム阿ミタ
仏マカセニ有無ヲロンセン
辞世
[裏面]
林泉寺寛大誉弟子生国丁子口村
受生　在住三十六年　六一寂

◎林泉寺の歴代住職墓地の南東隣に一列に並べられた石仏石塔群がある。向かって右端の石仏(地蔵菩薩立像)を除くすべては、清伝寺の跡地(現、増林一-四の須賀家あたり)より移転してきたもの。向かって右より紹介すると次の通り。この50番はこれらの中の一つである。
地蔵菩薩立像(人の背丈くらいの高さがある、年代不詳)
僧侶の墓塔・「経蓮社典誉信阿孔善和尚」(安永四年正月四日)
僧侶の墓塔・卵塔「心誉」(年代不詳)
僧侶の墓塔・「天蓮社□誉智□和尚」(享保四年)
僧侶の墓塔・「寛蓮社相誉上人吟説和尚」(天明七年十二月廿二日)
僧侶の墓塔・「迎蓮社来誉上人玄教和尚」(文政八年十二月廿四日)
僧侶の墓塔・「念蓮社称誉教存和尚」(元禄六年五月廿日)

僧侶の墓塔・「真蓮社性誉春察和尚」（寛保元年五月十二日）

三界万霊塔・

明和九壬辰天

岩船三界萬霊

地蔵 十二月吉日

63・徳本行者の名号塔（『越谷市金石資料集』名号二〇番）

所在地 増林・林泉寺境内（本堂そば）

石塔型式 角柱型（南東向き・高さは 高）

年 号 文政二年（一八一九）

［左側面］

［台 石］

同 山崎与兵衛

同 加藤喜太郎

下赤岩村

同 榎本幸左衛門

下広嶋村

同 岡田武右衛門

拾壹軒村

同 松永伊右衛門

松伏村

同 川尻弥右衛門

同 川尻喜左衛門

同 長 作右衛門

上赤岩村

四 人

下内川村

六 人

同国崎玉郡越ケ谷領花田村

同 松沢初右衛門

同国同郡新方領大沢町

石工 戸張八五郎

同 同 亀五郎

［台 石］

文政二己卯季大簇吉日建之

武州崎玉郡新方領増林村

當山廿一世恵誉代

念仏講発願主 榎本斎兵衛

同世話人栗田源五右衛門

［正面］

南無阿弥陀仏 徳本（華）

念仏講中

千百餘人

並諸精霊

法名等牌

中入之

※名号の六文字は、筆順がわかるように刻まれている。

［右側面］

同 栗原四五右衛門

同 平野半治郎

同 今井清十郎

同 升岡半五郎

同 瀧田文右衛門

［台 石］

同 渡辺伝右衛門

同 戸張忠三郎

同 平野吉右衛門

同 栗原安左衛門

同 須賀吉右衛門

同 中嶋玄 泰

同 山崎七郎衛門

同 山崎たに 是心

同 増森村

同 栗原又四郎

同 冨沢倉右衛門

同 須賀多郎兵衛

同 岩井弥五左衛門

同 渋谷伊左右衛門

同 中嶋村

同 杉山孫兵衛

同 弥十郎村

同 尾賀井源 助

同 八木橋要 助

同 大吉村

同 染谷長右衛門

［台 石］

大沢町

同 高畑加藤□□門

同 鷺後中村□□衛門

同 中村彦左衛門

同 下間久里村

松崎勘兵衛

［裏面］

正面の文字『南無阿弥陀仏　徳本(花押)』の鏡文字が刻まれている。

小林村
同　嶋根安右衛門
同　須賀多左衛門
同　嶋根与右衛門
同　山口惣左衛門
同　会田嘉　助

同国同郡八條領西方村
同　秋谷林右衛門
同　瓦曽根村
　　鈴木五郎右衛門

同国葛飾郡松伏領川藤村
同　鈴木もん
同　増田佐次右衛門

同　鈴木儀右衛門
同　山崎源右衛門

正面の台石で、「季(とし)」は年を意味し、「大簇(たいそう)」は一月を意味する。

※徳本行者とは、宝暦八年（一七五八）の紀伊国（和歌山県）の生まれで、念仏を広め活躍した浄土宗の代表的な念仏僧。各地に独特の書体による名号塔が多く残されている。林泉寺にある名号塔は、徳本行者が没した文化元年（一八一八）の翌年のものである。徳本行者の独特の書体による名号と花押（サイン）が刻まれている。徳本行者の徳を慕って広範囲の地域の多くの人々によって建立され、林泉寺の当時の隆盛が窺える。人々は林泉寺に訪れ、石塔の後ろに設置した台に上がって、その鏡文字を競って和紙に墨で石刷り(拓本)し、自宅の仏壇や中には床の間に飾って信仰を深めたのであろう。名号の書を通して地元の信仰に密着した石塔であり、掛軸の置物としての書としても利用でき、多くの人々の熱心な信仰が垣間見られる石塔です。

64・増林関根氏始祖の五輪塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・林泉寺（境内西側）
石塔型式　五輪塔（南東向き・高さは　高）
年　号　万治三年（一六六〇）

【地輪の左側面】※「弐」（二）は「三」の誤り。庚子は万治三年の為。
于時万治弐庚子年　干支は日常使用するので信頼性が高い。
【地輪の正面】
心光院本誉岳法道雪信士
【地輪の右側面】
十二月十五日
【地輪の裏面】
越前大守義景卿旗下
元祖朝倉氏
従三田崎六郎入道景長
四代之□(孫カ)
関根亦兵衛尉景行　塔
依當寺□引導死□□是
施主　大沼作右衛門尉景房

※関根家墓所
墓所入口には大沼景房が造立した石灯籠が二基あり。正面向かって右は心光院（関根景行）、左はその妻の普心院（渡部）の灯篭である。石灯篭には、カタバミ紋が見られる。

◎この墓地には、同形の五輪塔が二つ並んで造立されている。向かって右側が、増林の関根氏の始祖となる万治三年十二月十五日没の心光院の供養塔である。向かって左側は、その妻である延宝八年（一六八〇）三月廿六日没の普光院の供養塔である。

※林泉寺所蔵の文政十年（一八二七）三月作成の「分記関根氏一族過去譜序」によると、主に次のことがわかった。
越前（今の福井県東部）の戦国大名朝倉義景（織田信長と対立し、一乗谷で滅びる）によって三田崎［みたさき］の地を与えられたという武将三田崎氏の子孫(現在の松伏町上赤岩九九二番地の三反崎家)と言われる三田崎景行が増林村に移り、関根と改称したと推定。これが関根氏の祖となる。初代関根景行は俗名を亦兵衛と称したが、万治三年(一六六〇)十二月十五日に亡くなる。諡（おくりな）は、心光院である。なお関根　家二代目は景行の甥の景正で、諡は円誉である。

（16）　今井家（増林三八九四）路傍
65・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二六二番）
所在地　増林・今井家（増林三八九四番）路傍
石塔型式　角型（南西向き・高さは中）
年　号　天保三年（一八三二）

［左側面］
天保三壬辰歳
［正面］
日月
庚申（三猿）
清明
［右側面］
三月吉祥日

［台石］
中妻組講中
榎本順蔵
同　金兵衛
須賀甚左衛門
今井新兵衛
同　新五兵衛
同　源左衛門
同　常治郎
栗原四五右衛門
小菅彦市
小沢定右衛門
世話人
今井三左衛門

※上部の左右に「日月」「清明」と文字で書かれているのが珍しい。

※地元の上二区の一部の人たちによって毎月一回程度持ち回りで庚申講が行われていたが、平成十一年の初め頃に廃止された。
※上組地区には笹原講・椎の木講・中妻講・上組講の庚講（かのえ）があった。

（17）須賀（すか）家（増林二－四三一）邸内

この地は、屋号を「六兵衛さま」と呼ばれ、地元有力者であった須賀家のかつての敷地内の一部であった。戦後、「六兵衛さま」は転居した。

66・「土公神（どこうじん）」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家（増林二－四三一）敷地内
石塔型式　駒型（南東向き・高さは中）
年　号　不詳
［正面］
土公神
※石塔正面の「土公神」の文字を保護するための石の蓋がついている。

67・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家（増林二－四三一）敷地内
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年　号　文化二年（一八〇五）
［左側面］
講中世話人
増林中組
願主須賀六兵衛
［正面］
（日月）庚申（聞か猿）
［右側面］
文化二丑年九月吉日（言わ猿）

［台石］

※台石には三猿が描かれていて、正面は御幣のようなものをかついでいる聞か猿、両側面には小太鼓とばちを持った見猿と両手で口をふさいだ言わ猿である。ここは元、「六兵衛様」と呼ばれた須賀家があった。

68・「水神宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家（増林二－四三一）敷地内
石塔型式　駒型（南東向き・高さは低）
年　号　嘉永七年（一八五四）
［左側面］
嘉永七寅三月吉日
［正面］
水神宮

※古利根川の「ばば渡し」からここに移された。

（18）須賀（すか）家管理の稲荷社

69・「成田山・真大山不動尊」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家敷地内の稲荷社（増林駐在所の東南東300M先）
石塔型式　駒型（南西向き・高さは低）
年　号　嘉永六年（一八五三）
［左側面］
嘉永六丑九月吉日
［正面］
成田山不動尊
真大山不動尊

※須賀家管理の稲荷社の祠の近くに不動信仰に関する石塔がある。これを見ると成田山新勝寺（成田不動）や地元の真大山大聖寺（大相模不動）への不動信仰が地元では幕末に盛んであったことがうかがえる。

（19）勝林寺の北西の「とうかん山」

かつては畑の中に、地元では「とうかん山」と呼ばれた杉の木々が生えていた小山があった。現在の増林公園の公衆トイレの北側あたりである。山本泰秀氏によると増林四〇八一である。現在はこの小山はない。この小山の上にあったとされる70番の石塔は「とうかん山」の北方30メートルほどにあった。

「とうかん山」は漢字では「透関山」と書くようであるが、「稲荷」を「とうか」とも音読みするので、野ウサギや狐などがいたこの地域では稲荷と関係が深い狐のすみかがある小山から由来したと推測できる。

70・法華経及び般若理趣経供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺の北西二百米先畑の中　越谷市斎場の建設にともなって勝林寺に移転。
石塔型式　笠付角型（南西向き・高さは中）
年　号　享保十四年（一七二九）

［左側面］
皇風永扇帝道遐昌佛日増輝法輪常転
国家安寧風調風順五穀豊登万民康楽

［正面］
舌頭擎出妙蓮華八軸梵経遶歯牙
大乗妙典一千部読誦供養塔
大地群生得成佛無端倶駕白牛車

［右側面］
享保十四己酉年十月十五日
青山祖養造立焉

［裏面］
元文五庚申年十月十四日
大乗般若理趣分一千巻読誦供養塔
智慧清浄海理密義幽深

※「大乗妙典」とは法華経のこと。
「般若理趣分」とは般若経典の一つで、「理趣経」ともいう。密教化した般若経典である。

※右側面に刻まれた文字の中に、「青山」の名前が出てくる。この石塔を造立したのは、勝林寺の檀家である青山祖養である。彼は、中組の源六の伯父にあたり、享保十四年（一七二九）に大乗妙典読誦供養のためこの石塔を造立した。その後、さらに元文五年（一七四〇）にも裏面に般若理趣分の読誦供養を刻んでいる。彼は、宝暦十一年（一七六一）十二月十一日に亡くなっている。

※星野龍雄氏（勝林寺現住職の祖母の山本千代氏の弟）によると、「とうかん山」と呼ばれるこの小山には、
「勝林寺に落武者が訪れたので、寺では農夫の姿に着替えさせ、鎧や武者着の全てを透関山に埋没させた」との伝説があるという。
また、山本千代氏によると「落ち武者がここで自害した墳墓」との伝説があるともいう。

※山本泰秀氏（増林二―四九四）の研究によると、ここに葬られた人物は、この石塔を建立した青山祖養の先祖と考えられる矢場貞満であるという。貞満は寛政重修諸家譜巻第七十七によると、「慶安四年（一六五一）九月二十九日、常憲院殿（五代将軍綱吉）に附属せられ、神田の館に候し、のち落度の事ありて蟄居せしめられ、家た（絶）ゆ」と書かれている。また、勝林寺の過去帳によると「天和二年（一六八二）戌十月、性心院殿自安玄體居士、中・矢場一函」とある。中組の矢場家（家紋は五三の桐）の家系が絶えたことを示しているという。
矢場貞満は格式の高い院殿号の戒名を持つ。

（20）須賀家　南西路傍

71・不動三尊梵字付き成田山文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家　南西路傍　（勝林寺「越谷観音」より真西に二五〇メートルの地点）
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年　号　天保十三年（一八四二）

［左側面］
天保十三壬寅年十二月吉日

［正面］
（梵字タラ）
（梵字カーンマン）　成田山
（梵字タ）

［右側面］
願　須賀勘左ヱ門
同　市良右ヱ門
主同　彦三郎

※この石塔は祠の中に安置されている。

72・釈迦三尊十六善神塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家　南西路傍
石塔型式　丸彫り像付き角型（南東向き・高さは中）
年　号　延享二年（一七四五）

［左側面］
阿你嚕神王婆□嚕神王
提頭賴咤神王鈍徒毘神王
印陀嚕神王咩闥嚕神王
娑你嚕神王禁毘嚕神王

［正面］
［正面台石］
法誦菩薩
文珠師利菩薩　（師）
（釈迦如来像）　玄奘三蔵法□
普賢菩薩　真蛇對王
常啼菩薩

［右側面］
［右側面台石］
抜折嚕神王跋□徒神王
毘迦嚕神王迦毘嚕神王
倶鞞嚕神王麻徠嚕神王
真陀嚕神王□美嚕神王

［裏面］
［裏面台石］
延享二丑年二月吉祥日
幻住二十傳青山祖養造立焉

※この石仏は、現在の70番の石塔の南方約三十メートルあたりにあった透関山（今はない）の、さらに南西約三十メートルあたり（増林二八四九）あたりにあった控え土手（俗に「中土手」ともいう。大正年間に古利根川の土手道と平行に作られた、今はない）の南側下にあったという。

※山本泰秀氏（増林二－四九四）の研究によると、裏面台石に刻まれた「幻住二十伝」とは、「幻住」は「仮の住まい」、「二十伝」は「先祖から代々受け継がれて二十代目」という意味であろうとのこと。そして、この石仏を造立した青山祖養（70番を参照）は、初代先祖（源家と推定される）から数えること二十代にあたり、透関山に葬られたと推定される矢場貞満は、青山祖養の先祖代々の一人であるという。

※この石仏の正面は、釈迦如来、文珠菩薩、普賢菩薩の釈迦三尊をあらわしている。その下には、玄奘三蔵法師と真蛇對王（深沙［じんじゃ］大将）、それに法誦菩薩と常啼菩薩の文字も刻まれている。

※この石仏の台石の左右側面に刻まれた十六人の神王は、釈迦を囲む武人である十六善神［ぜんじん］である。神王とは、仏教やその行者を守護する神で、多くは甲冑を身につけ怖い顔付きをしているという。十六の神王の中には薬師十二神将（薬師如来の家来である十二人の神王）の名前に由来すると思われるものがいくつか見られる。次にあげる神王の（　）内は、その神王に相当すると思われる十二神将。

［左側面］
阿你嚕神王（頗你羅大将）　婆□嚕神王（波夷羅大将？）
提頭賴咤神王　鈍徒毘神王
印陀嚕神王（因達羅大将）　咩闥嚕神王（迷企羅大将？）
娑你嚕神王　禁毘嚕神王

［右側面］
抜折嚕神王（伐折羅大将）　跋□徒神王
毘迦嚕神王（毘羯羅大将）　迦毘嚕神王
倶鞞嚕神王（宮毘羅大将）　麻徠嚕神王
真陀嚕神王（真達羅大将）　□美嚕神王

《天神宮にある記念碑の紹介》

勝林寺の近くにある天神宮の本殿建物裏に、四基の記念碑などがある。向かって左から紹介すると次の通りである。

◎「忠勇義烈碑」記念碑
明治三十九年七月二十四日に建立され、『忠勇義烈碑』と表面に刻まれた高さ九一センチの自然石の記念碑である。
裏面を見ると「明治三十七八年戦役ニ際シ出征軍人」の「凱旋記念」として建立されたことがわかる。

◎「古峯神社」記念碑
明治三十四年十月に建立され、表面には
『十口　峯　神　社
六十九齢
竹洞（ちくどう）恭書』
と刻まれた高さ一四五センチの自然石の記念碑である。

※古峯神社は栃木県鹿沼市にある神社で、「こみねさん」とも呼ばれている。

◎不詳の石塔
高さ八〇センチの角型様の石塔である。表面が摩耗していて一部の文字「大権現」がかろうじて判読できる程度で、何大権現の石塔か不明である。
◎和歌と人物像が刻まれた記念碑
和歌と人物像が線刻されている高さ一〇四センチの自然石の記念碑である。若い頃にもっと勉学に励めばよかったとの後悔の念が読み取れる。

あかるミを　くらく過ぬる　雪にほたるの
くやしさよ　学なくして

舎楽翁

（短冊が置かれた机の前で　袖に涙する舎楽翁の　しゃがんだ姿が刻まれている）

裏面をみると文久元年(1861)正月に建立したことがわかる。

［右側面］
船渡村
大杉村
増林村
大崎玄仙居士
佐藤村
太伯甚内
広嶋村
十一軒村

(21) 勝林寺

昭和五十年（一九七五）建立の大きな立像の「越谷観音」がある寺院。境内には市文化財の十三仏板碑（文明三年、一四七一年）がある。

73・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺参道
石塔型式　変形角型（頭部上面が平らな突部付・南東向き・高さは中）
年　号　享和三年（一八〇三）

［左側面］
享和三龍次癸亥年十月十八日

［台　石］
伊原村
越谷町
大沢町
大里村
七左新田
越巻村
荻嶋村　※荻嶋村の誤り
恩間村
［　　］

［正面］
普門品供養

［　　］
関根又兵衛
増森　平太
大川戸村
赤岩村
川藤村
後新田
金杉村
田嶋村
上内川村
八子村
鍋小路村

※「後新田（うしろしんでん）」とは、川藤村内にある新田村。佐藤村は、加藤村（現、吉川市内）の誤りか。
※当時この勝林寺が、現在の越谷市・松伏町・吉川市にまたがる広範囲な地域からの信仰を受けていたことがわかる。
※なお、この普門品供養塔を造立した勝林寺第十九世の大仙叡山が残した直筆の古文書（正法眼蔵のうち帰依三宝、現成公案などの十三巻の写し）が当寺に保管されている。

74・大乗妙典供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺参道
石塔型式　笠付角型（南東向き・高さは高）
年　号　享保十六年（一七三一）

［正面］
享保十六辛亥年
奉読誦大乗妙典一千部衆生或世了脱出所
三月吉旦　当寺九世

75・六十六部及び十三仏供養塔（『金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺参道
石塔型式　不明（南東向き・高さは中）
年　号　上段は正徳元年（一七一一）、下段は明和六年（一七六九）

[左側面]
須賀氏
俗名吉兵衛
[正面]
奉納大乗妙典
六十六部施僧
供養之所敬白
願主国室要廻
[右側面]
正徳元辛卯年
九月念日
[左側面]
覚心法師
十二月五日
廿三日
廿四日
朔日
十日
一蓮宅生
[正面]
明和六年乙丑年
十三仏供養
六月吉日
[右側面]
七日聖霊
十一月九日
四日
廿九日
廿一日
十九日
施主おまん

※六十六部と十三仏の二つの石塔は全く異質のもの。六十六部と十三仏の二つの石塔が後世に合わさり、現在に至ったものと思われる。
※念日とは二十日のこと
※この石塔で、明和六年が「乙丑」となっているが、「己丑」の誤り。
※願主の国室要廻（増林村中組の八郎右ヱ門の子）、俗名須賀吉兵衛は、正徳元年九月二十日に、六十六部聖(ひじり)の為に供養して造立した。

76・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品二三番）
所在地　増林・勝林寺参道
石塔型式　駒型様角柱型（南東向き・高さは中）
年　号　文政八年（一八二五）
[左側面]
文政八乙酉歳
[正面]
普門品供養塔
[右側面]
九月十有八日
[台石]
中組
講中

77・六十六部廻国塔（『越谷市金石資料集』六十六部八番）
所在地　増林・勝林寺参道
石塔型式　笠付き角型（南東向き・高さは高）
年　号　享保二十一年（一七三六）
[正面]
天下泰平享保二十一丙辰稔武州崎玉郡新方領
奉納大乗妙典六十六部日本廻国願成就供養塔
国土安全二月吉祥日増林村願主外伝祖格

※「稔」は「年」という意味
※願主の外伝祖格（中組の五兵衛の兄にあたる）は、宝暦十二年（一七六二）正月三日に亡くなっている。

78・明覚禅師(みょうかくぜんじ)の文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　頭部山状角柱型（北西向き・高さは中）
年　号　万延元年（一八六〇）
[左側面]
万延元庚申歳十二月
[正面]
庚申塔（三猿）
[台石]
須賀六兵衛
中嶋雅治郎
須賀長右ヱ門
尾川重郎兵衛
セ八人
中嶋與左ヱ門
勅特賜明覚禅師(臥カ)□雲書印印
[右側面]
當山現住願主寛山叟

※勝林寺の第二十一世住職の太道寛山(たいどうかんざん)大和尚が、万延元年（一八六〇）

にこの庚申塔を建立した。表面の文字は、かつて勝林寺の第十一世を勤め、後に永平寺第四十六世となり、朝廷（後桜町天皇）より高徳の禅僧に与える「真空妙有」の禅師号を賜った弥山良須大和尚によると伝えられてきた。しかし、今回の調査では、曹洞宗の開祖道元禅師の六百回忌を執り行った臥雲童龍大和尚の書体とわかった。彼は永平寺第六〇世を継ぎ、朝廷（孝徳天皇）より「大晃明覚」の禅師号を賜った高僧である。（山本泰秀氏）

なお、禅師号は、朝廷より曹洞宗の両大本山である永平寺と総持寺の住職にのみ与えられている。

また、寛山はこの庚申塔を造立する六年前の嘉永七年（一八五四）に版木（題名は『言濱』）を作っている。この版木は勝林寺に現在も保管されている。

※このそばに文明三年（一四七一）の十三仏板碑がある。

79．地蔵像付き百観音等巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺参道
石塔型式　丸彫（北西向き・高さは高）
年　号　享保十六年（一七三一）
［左側面］
西国秩父坂東札所
冨士山湯殿山立山
右諸願成就之供養為也
［正面］
為五穀成熟地蔵菩薩
（地蔵菩薩座像）
為三界萬霊六親眷属
［右側面］
享保十六辛亥年十一月廿四日
造立主　礒氏

※西国三十三箇所、秩父三十四箇所、坂東三十三箇所の巡礼や富士山・湯殿山・立山の登山を果たし終わった記念に造立された石塔である。

80．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二四七番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年　号　文政七年（一八二四）
［左側面］
文政七甲申歳
四月吉祥日
［正面］
（日月）庚　申
［右側面］
増林村中組講中

81．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二七二番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　頭部山状角柱型（北西向き・高さは中）
年　号　天保七年（一八三六）
［左側面］
天保七丙申年八月吉日
［正面］
（日月）庚　申　塔
［右側面］
増林村中組

82．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二二〇番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　頭部山状角型（北東向き・高さは中）
年　号　文化四年（一八〇七）
［左側面］
文化四丁卯□
［台石］
願主　尾川良助
同　須賀茂七
同　倉右ヱ門
同　五左ヱ門
同　三良兵ヱ
同　彦三良
同　重左ヱ門
［正面］
（日月）庚　申　塔
（三猿）

[右側面]

二月吉祥日

中嶋孫左ヱ門
同　平　八
願同　岡安長兵ヱ
主同　要　吉
須賀平兵ヱ
同　重　平
同　重良右ヱ門

※台石は、すぐそばの別の所にある。横幅は五十三・八センチ、高さは二十五センチ、奥行きは四十八・五センチんで、正面に三猿が描かれている。

83. 道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一八七番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　変形角型（頭部上部が平らな突部付・南東向き・高さは高）
年　号　寛政十年（一七九八）

[左側面]　わたしバ道　[台石]

[正面]

当所庚申講中
講頭　岡安助左ヱ門
同　忠左ヱ門
同　与ヱ門
須賀作ヱ門
同　新　助
同　徳兵ヱ
同　甚左ヱ門

天下泰平

越前国□念
石井八ヱ門
同　八兵ヱ
栗原安左ヱ門
小川大助
同　十良兵ヱ
同　岩五郎
講中奇附金二朱

五穀成就

講内當増林山大正院

(日月)青面金剛　(三猿)

[右側面]

寛政十年戊午三月吉祥日
ふどう道
小川十右ヱ門

※台石は、すぐそばの別な所にある。横幅六十・五センチ、高さ三二・五センチ、奥行き五十九・五センチである。
※「わたしば（渡し場）」とは、古利根川の対岸の上赤岩と増林を往来していた「渡し場」のことをさすと思われる。この渡し場は「ばば渡し場」ともいう。「ばば渡し」については105番の解説文を参照のこと。

84. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔五五番）
所在地　増林・勝林寺
石塔型式　舟型（南東向き・高さは中）
年　号　正徳四年（一七一四）

[正面]

奉造立庚申之尊像
諸願成就之処敬白
(日月)（青面金剛像）（鬼）（三猿）
願主中組□□
正徳四□天二月

85. 一葉（いちよう）観音像付き開基塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地S家墓所
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年　号　寛永元年（一六二四）、建立年代は寛政九年（一七九七）カ

[左側面]
儀賢禅門　文明二歳九月廿九日　※文明二年は一四七〇年
□秀比丘尼明応七歳七月七日　※明応七年は一四九八年

[正面]
当寺寛永元戊子星　※寛永元年は一六二四年
（一葉観音像）法敬院梅岩勝林居士　千支は甲子だが、この石塔は戊子となっている。
開基五月廿有五日

[右側面]
月照童女　寛政八辰年六月十三日　※寛政八年は一七九六年
法儀孩児　寛政九巳年二月廿五日　※寛政九年は一七九七年

※一葉観音菩薩とは、水に浮かぶ一枚の蓮の葉の上に、左膝を立てて左手を置き、右手を蓮の葉について座る姿で表される観音。道元が日本に帰国するときに暴風雨に遭遇するが、観音経を唱えたら一葉観音が現れて道元を救ったとの説話がある。
一葉観音菩薩の像が刻まれた石仏は珍しく、市内ではここ勝林寺にしかないと思われる。

※禅宗では、開山は寺院を開いた僧侶、開基は寺院に大いに貢献したほどの在家の人をさす。ここにあげる梅岩勝林居士は開基の一人である。

86.「祖師西来意」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　O家墓所
石塔型式　板碑型（南東向き・高さは中）
年　号　寛文元年（一六六一）
［正面］
于時寛文元年
施主
祖師西来意　□（鶴カ）　宗椿禅定門
敬白
辛
丑八月吉祥日

※『祖師西来意』とは禅宗でみられる公案の一つである。公案とは仏法を究めさせるために参禅者に出された問題である。『祖師西来意』は「達磨大師が西のインドから中国にやって来たということはどういう意味か」という内容の問題である。祖師とは中国禅宗の開祖達磨大師。
※この岡安家の『祖師西来意』文字塔には「吉祥日」の文字が見られる。ゆえにこれは墓塔ではなく、公案に関する信仰上の貴重な石塔といえる。この石塔を建立した施主「宗椿禅定門」の禅宗（曹洞宗）に対する信仰の深さがうかがえる。
※山本泰秀氏によると、岡安家一族の先祖は、西の丹波国（京都府）の綾部郡岡安村よりこの地に来たという。

◎K家の『祖師西来意』文字塔

K家墓所にも、O家より二年前の万治二年（一六五九）に建立された『祖師西来意』文字塔（板碑型）がある。長い年月にわたって雨風にさらされたため、表面が摩耗し不鮮明であるのが残念である。この石塔は、亡くなった家族の者への供養をかねた墓塔といえる。栗田家も岡安家と同様に禅宗に対する故人の信仰の深さがうかがえる。

万治二年
祖師西来意　玉林寿銀禅定尼
己
亥霜月朔日

※『祖師西来意』文字塔は、市内ではここ勝林寺の二基と末寺の清涼院跡墓地北西塀側に関根内蔵助家の寛文年間の墓塔（板碑型）がある。

87.六十六部廻国塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　I家墓所
石塔型式　笠付角型（南東向き・高さは中）
年　号　宝暦五年（一七五五）
［左側面］
宝暦七丁丑天　※一七五七年
喜顔慈見信女　九月初八日
明和庚寅年　※一七七〇年
海雲照月信女　十一月廿二日
［正面］
天下和順于時宝暦五乙亥天　※一七五五年
奉読誦大乗妙典廻国供養塔
明和三丙(戌)□※一七六六年
願主　心柳見外
日月清明十一月吉旦　三月廿一日
［右側面］
心海広円信士　安永三甲午正月廿日　※一七七四
半窓禅定尼　延享三丙寅九月初五日　※一七四六
［裏側］
武州埼玉群(郡)新方領増林村
二二　甲斗萬霊等
施主石井氏　次郎左衛門

88.烏八臼(うはつきゅう)の墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　T家墓所
石塔型式　板碑型（北東向き・高さは高）
年　号　寛文七年（一六六七）
［正面］
維寛文七丁未天
鴫為應順禅定尼菩提也
五月念八日

※「念」は、「廿」（にじゅう・ネン）と音が同じなので「廿」（二十）の代わりに用いた。それゆえ「念八日」とは「廿八日」のことである。

※増林にある曹洞宗寺院の勝林寺の墓地に、石仏愛好家の間で呼ばれている「烏八臼（うはっきゅう）」の印が刻まれた墓塔がある。『烏（鳥）』と『八』と『臼（旧）』の三つの字からなる「鬯」や「鴿」「鴿」「鴿」などの印である。この印は墓塔の上部に刻まれ、室町時代末頃より江戸時代中頃までの主に曹洞宗の墓塔に全国的に見られたという。そして、立正大学の久保常晴氏によると、隨求陀羅尼の中の「瑟鴿布羅耶莎賀」の「瑟鴿」（「成就吉祥」と訳される）から由来するとしている。その他にもさまざまな説があり、いまだにはっきりしていない。

市内での「烏八臼」の例としては、同じ曹洞宗の野島浄山寺の墓地や小曽川二六六の中島家そば共同墓地などにみられる。

これは「烏八臼」の印が文の中に組み込まれている珍しい例である。

『鴿』は「鳥が物をついばむ」という意味があり、「烏八臼」は、屍を林の中に捨て、鳥に鴿（ついば）ませて空に帰るとの意味で用いたとの説がある。この説によればこの文は「応順禅定尼の為に鴿（ついば）む菩提也」と読むのであろう。「烏八臼」は印や記号ではなく、文字（漢字）を示す。現在は「烏八臼」を「烏・八・臼の3文字を組み合わせた合字」とされているが合字ではない。烏・八・臼の3文字から構成されている鴿という一文字の漢字であり、「鴿字（たんじ）」とか「烏八臼（ちょうはっきゅう）」と呼ぶべきである。鳥に死骸を食べさせる鳥葬が根底にあると思われる。

◎T家の墓所に寛永年間の墓塔がある。
石塔型式　宝篋印塔型（南西向き・高さは中《八十五センチ》）
年　号　寛永十六年（一六三九）
［正面］（塔身の下の基礎部分）
寛永十六年卯　季　※「季」は、「年」という意味。
妙貞禅定尼
八月十三日

89・烏八臼（うはっきゅう）の墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　Y家墓所
石塔型式　双式板碑型（北西向き・高さは高）
年　号　寛文六年（一六六六）
［正面］
寛文元丑天
○栄息禅定尼
十月十五日
各霊位
※「○」は「空（くう）」を意味する。
寛文六丙午年
真岩善正禅定門
四月十二日
※「鴿」は、「烏八臼」と呼ばれる印。

◎Y家の墓所に寛永年間の墓塔がある。
石塔型式　宝篋印塔型（北西向き・高さは中《百十七センチ》）
年　号　寛永元年（一六二四）
［正面］（塔身の下の基礎部分）
寛永元年甲子
為□□禅定尼
十一月十九日敬白

90・元和（げんな）二年の宝篋印塔（ほうきょういんとう）墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・勝林寺西側旧墓地　N家墓所
石塔型式　宝篋印塔型（南西向き・高さは中）
年　号　元和二年（一六一六）　※越谷市内最古の墓塔
［正面］（塔身の下の基礎部分）
元和二年
為遊半禅門
十二月廿六日　※相輪部分（上部）が欠けていて不完全。

※烏八臼（うはっきゅう）の墓塔がある山崎家墓所の勝林寺本堂寄りにある。
元和年間の墓塔としてはとても珍しいものである。
市内で一番古い墓塔と思われる。
この石塔に関しては、昭和四十五年八月十五日発行の「広報こしがや」の中の『市史編さんだより』で明治大学教授の萩原龍夫氏（故人）によって紹介されている。市内無数にある中で発見したことに敬意を表す。
※なお、勝林寺近くの増林小学校そばの岡安家（増林二－四九九）敷地内に変わった石塔がある。『三井大神文字塔』（自然石）である。
表面は「三井大神」、裏面は「明治四十四年五月廿五日　三井病院、入院九月廿日　快退院、岡安友之助」と刻まれている。

東京の三井病院に入院して全快したことが、まるで三井病院が神様のように思えたのであろう。感謝の気持ちでいっぱいであったのを、この石塔に神様として表したのである。

（22）岡安家（増林二七〇七）路傍

91・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・岡安家（増林二七〇七－一）敷地内の十字路側角
石塔型式　駒型（南東向き・高さは低）
年　号　文化十四年（一八一七）
［正面］
文化十四年丑正月吉日
（梵字キ）馬頭観世音
願主
岡安平八

（23）岡安家（増林二－三六九）そば路傍

92・道標付き「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・岡安家（増林二－三六九）そばT字路南隅田んぼ側
石塔型式　駒型（向きは不明・高さは低）
年　号　安永三年（一七七四）
［左側面］
右　こしかや　道
［正面］
安永二巳六月五日
馬頭観世音供養塔
安永三午九月十九日
［右側面］
左ふとうそん道

◎岡安家（増林二－三六九番）前の路傍には昭和四十年四月に建立の「馬頭観世音守護」と刻まれた石塔がある。
◎この近くに大神宮の祠があり、その前に「沖治霊神」と刻まれた明治三十三年十二月に建立の石塔がある。

（24）宮川家（増林三－一七四）路傍

93・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・宮川家（増林三－一七四）敷地南角地の道路際
石塔型式　駒型（南東向き・高さは低）
年　号　文久二年（一八六二）壬戌
［正面］
文久二壬戌年
馬頭観世音
八月吉日　中嶋新助

（25）増林下組地蔵堂

94・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』馬頭一一番）
所在地　増林・地蔵堂
石塔型式　陽丸角型（南西向き・高さは低）
年　号　文化四年（一八〇七）
［正面］
文化四年
馬頭観世音菩□
□吉日　※「金石資料集」では「八月」と記載

（26）山崎家（増林三－一九〇）そば路傍

95・百観音巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・山崎家（増林三－一九〇）前道路反対側東寄り路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは低）
年　号　寛政五年（一七九三）
［正面］
寛政五癸丑年　戒進
（観音梵字）　秩父　平六
（阿弥陀梵字）　奉納西国為二世安楽也
（勢至梵字）　坂東　弥五左エ門
三月吉日　治郎八

※山崎家屋敷は、元は道路反対側路傍の石塔が立っているあたりにあったという。
なお、この石塔の奥には、かつて虚空蔵堂が建っていた。

（27）増林下組香取神社

山本泰秀氏によると、この神社のそばに屋号が「根郷（ねごう）」と呼ばれる家がある。このあたりは増林村の発祥地かもしれない。また、この神社の西側、地蔵堂の東側には虚空蔵堂があった。

96・敷石供養塔（『越谷市金石資料集』普請供養三〇番）
所在地　増林・増林下組香取神社
石塔型式　駒型（南西向き・高さは中）
年　号　嘉永五年（一八五二）
［左側面］
敷　石　名倉弥五左ヱ門
山崎平左ヱ門
中嶋惣右ヱ門
世話人　小川勘右ヱ門
［正面］
敷石供養塔
［右側面］
嘉永五子十一月吉日

（28）下組集会所（宝蔵院跡地）

ここは、今では寺院がなく墓地のみとなっているが、かつては「宝蔵院」と呼ばれる寺院があったところである。
なお、弘法大師の石像が祭られている祠そばの向かって左奥に「天満宮力石」と刻まれた力石がある。
また、もう一つの隣りの祠（鞘堂）には不動三尊像の石仏が祀られている。

97・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二二九番）
所在地　増林・宝蔵院跡地（下組集会所）
石塔型式　頭部山状角柱型（南東向き・高さは中）
年　号　文化八年（一八一一）
［左側面］
世話人　定平
太郎兵衛　三郎左ヱ門
平七
新左衛門
弥五左ヱ門
庄右ヱ門
与惣右ヱ門
文化八辛未年
太郎右ヱ門
清兵衛
儀右ヱ門
惣左ヱ門
［正面］
（日月）庚申（三猿）
［右側面］
世話人　吉左ヱ門
権平
庄十蔵
新助
伝十郎
権兵衛
兵左ヱ門
五郎左ヱ門
源助
次右ヱ門
利八
三月吉日

98・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔六三番）
所在地　増林・宝蔵院跡地（下組集会所）
石塔型式　駒型（南東向き・高さは中）
年　号　享保元年（一七一六）
［正面］
享保元丙申十月吉日
（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）
□□□□□□□□
奉建立庚申講□成就□所　念仏同行四十八人敬白
※「念仏同行四ホ人」と読まれやすいが、『四ホ人』の『ホ』は「十八」が重なったものである。四十八誓願を立てて極楽浄土に生まれ変わったのが阿弥陀如来とされている。そのため念仏を唱える人数を四十八誓願にあわせて四十八人にすることがあった。

99・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一六九番）
所在地　増林・宝蔵院跡地（下組集会所）
石塔型式　駒型様角型（南東向き・高さは中）
年　号　寛政二年（一七九〇）
［左側面］
寛政二庚戌歳
源□
利右ヱ門
治良八
庄右門
林蔵

[正面]
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
[右側面]
正月吉日
浅右エ門
徳兵衛
三左右門
太良右門
与左衛門

（29）白山神社

毎年一月二十日に地元の氏子によって「白山おびしゃ」が行われている。かつては、歯の病を治す神様として盛んに信仰されていた。

100．道標付き「白山権現」文字塔（『越谷市金石資料集』白山一番）
所在地　増林・白山神社（増林四四一〇）そばの県道路傍
石塔型式　頭部山状角型（東向き・高さは中）
年　号　明和八年（一七七一）カ
[左側面]
□辛
卯正月吉日
[正面]
白山大権現
増林村
下組
[右側面]
是より内ごんげん道

※県道の白山神社入口角地にある白山神社への手引き石である。
白山神社の境内地に長い間あったこの石塔は、平成十二年一月に県道の白山神社入口角の現在地に移転した。
元は増林四四〇四の石井家側の方の県道の白山神社入口角地にあったものである。古利根川には白山河岸があった。
「金石資料集」の白山一番に掲載され、年号は明和八年とされている。
なお、この資料集によると所在地が増森となっているが、増林の誤り。

101．向かい夫婦の奉納石塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・白山神社境内
石塔型式　駒型（南向き・高さは中）
年　号　天保九年（一八三八）
[左側面]
天保九戊年十二月吉日
[正面]
（互いに向き合い拝んでいる夫婦）
奉納
[裏面]
願主　鉄五良
たけ
とく
りせ

※男女がいることから、正面を向いた男女が手を握り合って睦ましくしている信州の双体道祖神を連想する。また、合掌していることから神仏に向かって合掌して願かけする願い絵馬を連想する。信州の双体道祖神の形体に影響を受けて男女夫婦が描かれ、願い事がかなえられるようにと願い絵馬の影響を受けて男女夫婦が願掛けをしているものと推測できる。上部に日月が描かれているのはよく見られる庚申塔の日月の形体を真似たものであろうか。

（30）古利根川の土手道　路傍

102．水神宮石塔祠（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・古利根川の土手道路傍（白山神社の東）
石塔型式　祠型（北々東向き・高さは中）
年　号　正徳四年（一七一四）
[正面]
（不詳）
※この祠はかつては堤外地（河原側）にあったもの。ご神体は不明。
[裏面]
正徳四甲午天
水神宮
造立
正月十一日之鏡盛

※名倉浩志氏が聞いたところによると、「この水神様は、昭和22年のキャサリン台風で（上流から）この地に流れ着いた」とのことである。

（31）名倉家（増林三―二六九）邸内

103．「神明宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・名倉家（増林三―二六九）邸内
石塔型式　祠型（南東向き・高さは中）
年　号　寛政八年（一七九六）
[左側面]
[台石]
寛政八丙辰十二月吉日

［正面］

神明宮

増林下組
世話人
名倉太良兵ヱ
同　与惣左門
今井吉左ヱ門
石井権　平
名倉喜左ヱ門
今井忠兵衛

(32) 千代田橋そば土手下

104・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・千代田橋南東詰めの土手下
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは低）
年　号　天保十三年（一八四二）
［左側面］
天保十三寅年十月吉日
［正面］
馬頭観世音
［右側面］
増林二子曽根
山崎治右ヱ門

※ここは、二子曽根（ふたごぜね）といわれる地で、せんげん堀（新方川）に架かる千代田橋は、以前は二子曽根橋と呼んでいた。

105・道標付き「水神宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・千代田橋南東詰めの土手下
石塔型式　駒型（南東向き・高さは低）
年　号　文化三年（一八〇六）
［左側面］
橋向左ばゝわたし
道
［正面］
文化三丙寅年正月吉日
水神宮
向ふどふミち
［右側面］
願主　重蔵
松ぶし道　千太郎
直右衛門

※ばば渡し道、不動道、松伏道の文字が刻まれた道しるべを兼ねた石塔。
※ 土手下 の二基とも栗原家（増林五三〇三番）が管理。もとは、新方川が拡張される以前の千代田橋の南東側の旧土手の上にあった。

≪ばば渡しと不動道（ふどうみち）≫

「ばば渡し」は増林村と対岸の上赤岩村を結ぶ古利根川にかかる渡しであった。林泉寺と勝林寺の中間から勝林寺よりにあった。「ばば渡し場」の「ばば」は、耳で聞くと「婆」を連想してしまう。そのためか、単に「渡し場」、あるいは地元が中組なので「中組の渡し場」ともいう。「ばば渡し場」の「ばば」の由来は不明である。婆さんが渡し場にいたからとの言い伝えもあるが、もともとは「馬場」という意味だったのかもしれない。

勝林寺の第二十六世山本敬秀の御祖母である山本千代氏によると、大正の頃は、渡しの料金は往復で大人三銭、子供一銭で、自転車は十銭であったという。地元の中組の人たちは、年に二回、秋に米（玄米）三升、夏に麦（殻麦）六升を納めたので渡り賃なしで渡れたという。

千代田橋（旧称、二子曽根橋）そばに道標（道しるべ）が刻まれた石塔がある。その石塔に、ばば渡し道、不動道、松伏道の文字が刻まれている。栗原家（増林五三〇三番）が管理している。もとは、新方川が拡張される以前の千代田橋（旧称、二子曽根橋）の南東側旧土手の上にあった。

この石塔に刻まれている『橋向左ばゝわたし（橋向こう左、ばば渡し）』とは、橋（二子曽根　橋）の向こうの道が古利根川にある「ばば渡し場」に通じる道であることを示している。橋を渡るとすぐに分かれ道（今はない）になっているが、向かって左の道（今はない）を多少蛇行しながら真北に進んで行く。するとかつての古道に突き当たる。それを左に曲がる。すると間もなく現在の新道（平方東京線）と合流する。さらに六十メートル先に進み、右に曲がり古利根川に通じる道を進む。突き当たりの土手が渡し場跡で、向かって左側あたりに屋号が「渡し場」と呼ばれた古利根川の渡し守をした人（現在は他所に移転）がかつて住んでいた所である。渡しは、戦後のカスリン台風が関東を襲った昭和二十二年（一九四七）頃まで行われていた。川原の渡し場跡東隣には現在二十本くらいの松が川に平行して密集して並んでいるが、これは渡し場廃止後に植林したものである。

また、『向ふどふミち（向こう、不動道）』とは、橋を渡らずに南に向かう道が大相模の不動尊に通じる道を示している。今もその名残の道がある。この不動道を道なりにしばらく行くと、T字路となり、突き当たりは現在も稲荷宮を祭っている元荒川のそばに住む百木家である。ここから西に向かう道を進むと、元荒川にかかる「不動の渡し場」に行く。東に向かうと、森西川（もりにしかわ、増森村西川）や吉川に行くのである。

増林・増森の古利根川の渡し場



その他の渡し（増林村・増森村）

うま渡し＝ばば渡しの下流、増森の観音堂墓地の北にあった。増林と対岸の下赤岩を結び、人の往来や馬の運搬がみられた。かつては赤岩渡しと呼ばれたと推定。

増森側では対岸の下赤岩で農耕をするために使われたようである。渡し守は増森本田のすぐそばの須賀家。

さんこう渡し＝馬渡しのさらに下流、現在の丹下製作所あたり。増森村と対岸の川藤村榎戸を結ぶ渡し。

明治十三年測量『迅速測図』

参謀本部陸軍部地図課と測量課による「越箇谷驛」「粕壁驛」の二つの『迅速測図』（縮尺二万分の一、明治二十一年再版）

《石仏に刻まれた「ばば渡し」と「赤岩渡し」》

古利根川にかかる赤岩方面の渡しとしては、増林村と上赤岩村とを結ぶ渡しと、その下流の増森村と下赤岩村を結ぶ渡しの二つがある。特に後者は明治十三年測量の迅速測図からわかるように、両岸に渡しにつながる道があるので江戸時代からの渡しであることがはっきりしている。

古老の話によると、上赤岩の方を「ばば渡し」下赤岩を「馬(うま)渡し」と呼んでいたという。

増林92番の文化年間の石仏には「ばば渡し」の名が刻まれ、増森26番の同じく文化年間の石仏には「赤岩渡し」の名が刻まれている。同時期に刻まれているので「ばば渡し」と「赤岩渡し」とは別である。「ばば渡し」の方は、古老から増林と上赤岩とを結ぶ渡しであると断定できる。するともう一方の「赤岩渡し」の方は、その下流にある「馬渡し」に違いないと結論付けたわけである。

さらに以上の考えを裏付けるものとして、「ばば渡し」の文字が刻まれた石仏は増林に限られ、「赤岩渡し」が刻まれた石仏は増森に限られていることである。「ばば渡し」は増林村とかかわりが深く、「赤岩渡し」は増森村とかかわりが深いと考えるのが自然である。

しかしながら松伏町教育委員会では、上赤岩にある「ばば渡し」を「赤岩渡し」と断定している。赤岩渡しと呼ばれていたのかも知れない。今後の検討課題。

（33）城ノ上稲荷神社

106・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一九八番）
所在地　増林・城ノ上稲荷神社（城ノ上記念会館）
石塔型式　頭部山状角型（南東向き・高さは高）
年　号　寛政十二年（一八〇〇）
［左側面］
寛政十二庚申年
初庚申日

［正面］
青面金剛　（聞か猿）　［台石］　講　（見猿）　（言わ猿）
（日月）

［右側面］
武州崎玉郡増林村
城之上組

※正月の初庚申日か

107・道標付き「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』馬頭五四番）
所在地　増林・城ノ上稲荷神社（城ノ上記念会館）
石塔型式　駒型様角型（南東向き・高さは低）
年　号　不詳
［左側面］
こしかや道

［正面］
（梵字カン）　馬頭観世音

［右側面］
ふ動

（34）須賀家（増林一―四）そば排水路

108・「権現宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・須賀家（増林一―四）そば排水路
石塔型式　笠付き角型（南東向き・高さは中）※元は南西向きだった
年　号　明和四年（一七六七）
［左側面］
明和四丁亥年

［正面］
権現宮

［右側面］
八月吉日

※須賀家敷地あたりは、清伝寺跡地である。この石塔は、須賀家の東側、すぐ近くにある水路の二股に分かれた所の二つの水路にはさまれた地点に置かれている。このあたりは、かつては通称「よでめ屋敷」と呼ばれ（小島初治氏）、この石塔はこの屋敷の守り神だったのかもしれない。
※ここの「須賀」の読み方は、周辺の「すか」と違って「すが」と濁る。

口清伝寺の参道入口北側沿いにあった地蔵像は現在、林泉寺の僧侶墓地の向かって左奥にある。

（35）百木家（増林五六四三）敷地内

109・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・百木家（増林五六四三番）敷地内・稲荷祠そば
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　号　寛政十二年（一八〇〇）
［左側面］
寛政十二庚申十一月吉日
左吉川道　増林村西川

［正面］
青面金剛　（三猿）
（日月）

［右側面］
右ばゝハたし
のだ道

※稲荷祠境内に上記の庚申塔の他に、力石も見られる。

※吉川や古利根川に架かる「ばば渡し」などに行くための道しるべを兼ねた庚申塔である。この庚申塔は他の場所から現在地に移されてきたと思われる。移される前の本来の位置は、千代田橋（旧称、二子曽根橋）より南に向かう道を道なりに来ると百木家そばのT字路に突き当たり、このT字路の北東角あたりであったと推定できる。この庚申塔に刻まれた道標「左、吉川道・増林村西川」とは、この庚申塔を造立した場所が増林村西川で、T字路からこの庚申塔の左側に（向かって右に）、つまり東方面に進むと吉川に通じる。また「右、ばゝハたし（ばば渡し）」とは、この庚申塔の右側に（向かって左に）、つまり北方面に進むと、「ばば渡し」や野田に通じるのである。
「ばば渡し」については88番の解説文を参照のこと。

（36）山崎家（増林五六〇六）邸内

110・道標付き猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増林・山崎家（増林五六〇六番）邸内
石塔型式　頭部山状角型（東向き・高さは中）
年　号　文久三年（一八六三）
［左側面］
文久三癸年　西川　□□　山崎□□ヱ門（弥左ヱ門カ）
百木平□ヱ門
同　□□
山崎七□門（七郎右ヱ門カ）

［正面］
亥九月吉日

（日月）

［右側面］
猿田彦大神　（三猿）
吉川流山
左　道
のた今ヿ上

山崎□□
同　定四良　※のた…野田
同　伊兵ヱ　※今上…江戸川
百木平兵ヱ　の渡し場

旧増森村の石仏

（1）観音堂墓地

昔は真言宗寺院の観音寺があった所で、かつては「武蔵三十三箇所」の観音霊場の三〇番に当たっていた。「武蔵三十三箇所」の札所めぐりは、一番の延命寺（吉川市吉川一五四一）から始まり、三三番の東泉寺（吉川市川藤二二〇）で終わり、吉川市、三郷市、葛飾区、八潮市、足立区、川口市、越谷市、松伏町に及んでいた。

最近までこの地に観音堂が建っていたが、平成十年に宝正院に移転され、新しく建て替えられた。

1．敷石供養塔（『越谷市金石資料集』普請三七番）
所在地　増森・観音堂墓地
石塔型式　自然石（南向き・高さは中）
年　号　天保十一年（一八四〇）
［正面］

敷石供養塔

願なす身は朽ぬとも
　敷石の
あらんかきりや
　名は残るへき
　　侶雲

増森村世八人
中村権左ヱ門
森田新兵ヱ
岡田弥二右ヱ門
中村伊兵ヱ
鈴木作右ヱ門
百木平兵ヱ
山崎嘉右ヱ門
富沢仁右ヱ門
林　源七
同　茂右ヱ門
立沢権兵ヱ
内田紋右ヱ門

［裏面］
天保十一年九月吉日

※参考までに、この石塔を造立した人々の現在の子孫をわかる範囲であげると、次の通りである。
岡田弥二右ヱ門
鈴木　作右ヱ門
百木平兵ヱ
富沢　仁右ヱ門
林　茂右ヱ門
内田　紋右ヱ門

※なお、ここにあるはずの『金石資料集』掲載の「真言一一番」「月待六番」の石塔や「越谷ふるさと散歩(下)」掲載の文政元年の「普門品一万五千巻供養塔」の所在が不明である。

《役場跡と馬渡し場跡》

観音堂の西側の道を挟んで反対側にかつては増森村の役場があった。そこでこの道を「役場道」とも呼んだ。この道の突き当たりに古利根川がある。ここに対岸の下赤岩とを結ぶ「馬渡し」と呼ばれた渡し場があった。人の往来の他に馬の運搬も見られたから名付けられた。渡し守は増森の須賀家が務めていた。

◎「香取宮」標識石塔（『越谷市金石資料集』その他一三番）
平方東京線の県道で増林から増森にはいるとすぐ右に分かれる道路がある。増森村に入る道である。入って百メートル程進むと左手に村で管理している香取宮の小さな祠がある。ここに一見すると力石のようにみえる年代不詳の「香取宮」と刻まれた標識石塔がある。

（2）河原崎の内田稲荷

内田稲荷は増森一四七五の須賀製作所の西側路傍にある。

2．板碑型文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・須賀製作所（増森一四七五）そば路傍
石塔型式　板碑型（南向き・高さは中）
年　号　寛文七年（一六六七）
［正面］

寛文七年
（梵字　不詳）奉造立庚申講結衆口願成弁攸　施主
九月吉日　　欽白

◎不詳の石塔
このそばに、この庚申塔と向かい合った祠型の主尊不明の石塔がある。高さ五十センチ位、幅二十五・五センチ、奥行き二十二センチの大きさで、表面は文字が不明であるが、左側面には「元禄十四辛巳　九月九日」と刻まれた年号が読みとれる。

（3）宝正院

江戸時代は東正寺（とうしょうじ）と呼ばれていた。明治四十四年（一九一一）に増林の宝蔵院（現、下組集会所）を合わせ、宝蔵院の宝と東正寺の正をとって現在名の宝正院（ほうしょういん）に改めた。

なお、東正寺はもと東照寺と書いていたが、日光東照宮と恐れ多くも字が一部同じなので江戸幕府によって東正寺と改められたという。

3・『高地蔵尊』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・宝正院の旧参道入口
石塔型式　丸彫り型（南向き・高さは超高）
年　号　宝暦六年（一七五六）
［左側面］
［台　石］
宝暦第十六
龍集丙子
［台　石］
［正面］
（丸彫り地蔵菩薩立像）　二二界萬霊
［右側面］
当村念仏
講中歓喜

※今でも地元では安産の仏様としての信仰が続いている。高地蔵の名前のいわれは背がとても高い地蔵だからであろう。
※また、ここは以前は宝正院の参道入口であった。

4・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・宝正院
石塔型式　上部隅丸角型（南向き・高さは中）
年　号　延享二年（一七四五）
［左側面］
鈴木七兵衛
延享二乙丑年　講中
冨沢勘右エ門
岡田次左エ門
鈴木□次郎
［正面］
普門品
（梵字カン）馬頭観世音菩薩
一万巻供養
［右側面］
九月吉日

※無縁仏の石塔群三群のうちの中央部の群の前から四列目の向かって左から七番目にある。無縁仏の中に埋もれてしまったのは残念である。

◎この近くの林家の墓所に文化元年（一八〇四）の次のように刻まれた笠付きの墓塔がある。
文化元甲子歳
（梵字ア）清寿院殿観心性蓮大尼霊位
三月廿二日

大名につける格式の高い「院殿」が付けられているので、大名に仕えた程の位の高い女性であったのであろう。
『越谷ふるさと散歩（下）』の九十三頁に、「伝えによると増森のある娘がお城にあがり殿様の側室になったといわれ、その人の供養墓石ではないかともいわれるが、詳しいことは不明である。」と紹介されている。

5・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品三一番）
所在地　増森・宝正院境内（元は観音堂墓地にあった）
石塔型式　自然石（西向き・高さは超高）
年　号　嘉永七年（一八五四）
［正面］
普
門　供　養　塔
嘉永七年九月吉祥日
［台石正面］
當所講中
富沢半兵衛
鈴木源兵衛
林　源太郎
金子源左衛門
富沢仁右衛門
林　太兵衛
同　源七
関口吉十郎
中村幸七
林　藤右衛門
同　茂右衛門
鈴木佐兵衛
須賀武次右衛門
小島武兵衛
大和田仲右衛門
小島善兵衛

品品

新西国第三十番

草眠書印印

鹿倉四郎右衛門
富沢八右衛門
中村権次郎
小島惣右衛門
鈴木喜平次
同　郡次郎
須賀伊　助
富沢佐兵衛
鈴木平右衛門

［台石右側面］
世話人
鈴木七兵衛
関口定右衛門

日光道中
越ケ谷宿
石工長兵衛作

（4）「消防団増林分団第七部」（増森一六五七）路傍

6・『大日様』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・「消防団増林分団第七部」（増森一六五七）路傍
石塔型式　上部丸型（南東向き・高さは中）
年　号　寛文三年（一六六三）
［正面］
文長法師
（大日如来像カ）
寛文三年三月□□

※菩薩形をした仏像である。地元では「大日様」と呼んでいる。印相は、手のひらを上向きにしてすべての指先を上方に向けた両手をへそのあたりで指の背側で合わせている。大日如来が結ぶ法界定印ではないが、法界定印のつもりで刻まれたものであろうか。
また、「文長法師」とは何を意味するのか不明である。
※かつてこの近くに流れていた旧「古利根川」（現在は工業団地となって、川跡の名残は全くない）の川の中より見つけたものと伝えられている。増森村と川藤村の間には、かつては古利根川が流れていて、増森村は木綿布の晒業が盛んであった。現在の流路に河川改修してからは廃れた。中村栄一氏の曾祖父である作蔵は、農業や晒業を営むかたわら、この古利根川で川魚を捕っていたが、漁の最中にこの石仏が網に引っ掛かったと伝えられている。以後、疫をきってくれる疫の仏様としての信仰が一部で見られたという。（以上はこのそばに住む［現在は他所に移転］中村栄一氏からの聞取りである。）

◎「浜子神社」文字塔
所在地　増森・富沢家（増森一六六五）
石塔型式　祠型（南東向き・高さは中）
年　号　明治四十四年（一九一一）
［正面］
濱子神社
［台石］
氏子中
［右側面］
明治四拾四年拾月再建

※中村家の近くの富沢家（増森一六六五）は、東照寺（現、宝正院）の前にあるので地元では屋号を「寺前（てらまえ）」と呼んでいる。この富沢家前の道路に面した祠に濱子明神の石塔が祭られている。この石塔の幅は一八・五センチ、奥行き一八・五センチで、台石を除く屋根の部分も含めた高さは七〇センチである。また、その石塔の下にある二つの台石を含めた総高は八七・五センチである。なお、宝正院の近くには「寺脇（てらわき）」と呼ばれる屋号の家もある。
「越谷市金石資料集」の「その他十二番」の石塔は、「浜子神社」と「氏子中」と刻まれた祠型（八〇×一五×一五）とされ、年代が不詳、所在地が宝正院裏路傍となっているが、この「その他十二番」の石塔は、ここの富沢家の石塔のことをさすのであろう。

《濱子明神のいわれ》
富沢源七氏（明治三十六年生まれ）からの聞き取り調査（平成十二年八月十七・十八日）によると、浜子明神のいわれは次の通りである。
明治の頃、古利根川で漁をしていた富沢沖次郎（おきじろう）氏が偶然に網にかかった木造の神様の像を手に入れた。場所は中村家（増森一六五四）よりさらに上流の東から南に曲流したあたりと思われる。
そして近くの畑地に安置した。地元では「明神様」と呼ばれた。増林

村の城ノ上に住む先達を勤めていた戸張氏によって「浜子大明神」と命名された。その後、源七氏が六歳位の頃（明治四十二年頃）に富沢家の敷地に移されたが、この木像は朽ちたので、明治四十四年に木像から現在の石塔にかわった。地元での信仰が盛んで、毎月一日と十五日に宝正院に参拝した帰りに立ち寄ってお参りする者もよく見られた。また、毎年十月二十八日に地元の人々によって持ち回りで講が開かれていた。現在は地元の自治会館（増森本田会館）で十月の最後の日曜日に行われている。なお、源七氏の祖父は沖次郎氏の養子となっている。つまり沖次郎氏は源七氏の曽祖父にあたる。

《さんこう渡し と 榎戸渡し》

中村家の少し上流（東方）、現在の丹下製作所のあたりに「さんこう渡し」と呼ばれた渡し場があった。増森側の渡し場は、屋号が「ふなば（船場）」と呼んだ渡し守を勤めた富沢家（富沢家は、かつては増森一五六三に住んでいた）の前あたりにあり、対岸の降り口が、川藤村榎戸（えのきど）の山崎家（吉川市川藤四四〇－一、屋号は「うしろっぱ・後端」）の裏あたりであった。江戸時代の「榎戸渡し」は現在の増森本田会館東側沿いにある南北の道路あたりと推測でき、また「越谷市民俗資料」52頁に《サンコわたし（三公わたし）とせきわたしは大正十二年の河川改修の時に廃止された。増森側（本田）で個人が経営していた。》と記載されている（秦野秀明氏）。榎戸渡しの少し上流50mにあった三公渡しは、江戸時代の榎戸渡しの代わりとなったのであろう。

《せい魚伝説》

なお、増森一七二六の小島専治氏（明治四十三年生まれ、平成十二年六月死去）からの聞き取り調査（平成十二年三月）によると、今はなき古利根川に残る言い伝えや増森本田の繁栄の様子は次の通りである。榎戸の山崎家（川藤四四〇－一、屋号は「うしろっぱ」）の裏の古利根川の榎戸側には、地元では「ふかんぼ」と呼ばれた水深数メートル程の深みがあった。また「深んぼ」から上流百メートル程は「せいケ（が）淵（ふち）」と呼ばれ、せい魚（ぎょ）の伝説がみられる。この淵の主である「せい魚」と呼ばれる巨大な魚が住んでいたが、川が土砂の堆積で浅くなり住みにくくなったので、故郷を捨て東京の隅田川にある鐘ヶ淵に移り住むようになった。ところがこのせい魚が鐘ヶ淵を通る船を転覆させ沈めるようになった。そこで、鐘ヶ淵を通る船は必ず『増森船（ましもりぶね）だよ』と言うことにした。すると「せい魚」は自分の故郷からきた船と思い込み、転覆させることはなく無事に通過することができたという。鐘ヶ淵は綾瀬川が隅田川に注ぐ地点のやや下流にあり、現在の墨田区立鐘淵中学校付近にあった。増森は、東京との交流が盛んであったからこのような伝説が生まれたのであろう。

《増森本田（ましもりほんでん）の繁栄史》

増森は、大正から昭和の初めにかけては最盛期を迎えていた。松伏の醤油が松伏から江戸に運ばれる高瀬船がここを通過した。増森本田では晒し業が盛んであった。馬車で江戸の日本橋方面に運送され、後に『本田（ほんでん）晒業』と書かれた一トン車のトラックがこの周辺では初めて使用された。また駄菓子屋、醤油屋、酒屋等の店も所々に見られていた。こうして一時は「増森東京」とまで呼ばれるようになった。なお増森の晒業最後の廃業は昭和十六年の増森一六六三の富沢家であった。

《昭和以降の古利根川》

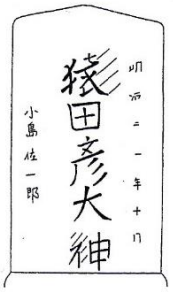
増森一二九八の山崎高義氏（大正七年生まれ）からの聞き取り調査によると、明治の頃、この山崎家の裏（東側）に増森村の役場があった。役場と観音堂との間を通っている道を「役場道」ともいったという。そしてその頃、山崎高義氏の祖父の弟（山崎寛龍）は勝林寺（勝林寺の本寺である岩槻の福厳寺のことと思われる）の住職であったという。また、かつて増森村の東側を流れていた古利根川について次の通り。

戦前、古利根川に「赤岩渡し」や「三公渡し」（少し下流に江戸時代の榎戸渡しがあった）や、その下流にも渡し場があった。増森神社の南三百mに屋し）の下流にも渡し場があった。増森神社の南の三百メートル程に屋号が「渡し場」と呼ばれて代々渡し守を務めた須賀家と屋号が「萬屋（よろずや）」とよばれて商売をしていた須賀家（増森二〇三四）があり、この両家の間の細い道に入るとすぐに古利根川の渡し場に突き当たる。現在はそこに幅広い東埼玉道路が通って、その名残は消えた。

大正十三年頃、現在でいう増森の越谷市工業団地の北端から、中島の送水管のあたりまでを直線に掘って新川が完成すると、増森村の東側を曲流していた古利根川の水量が激減し、流れが穏やかになり、それまでの古利根川の様相が一変した。さんこう渡しの方からこの渡し場手前あたりまで、地元では「なっこぶし」と呼んだ植物が、川面に繁茂したという。その実をとって食べると甘かったという。らい魚も多くいたという。現在はこの古利根川は埋められて昔の名残はない。

（5）小島家（増森一七二三－二）路傍

7．猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・小島酒店（増森一七三二－二）路傍
石塔型式　駒型（北西向き・高さは低）
年　号　明治□□年
［正面］
（明治）
□□□□年十月
猿田彦大神
小島佐一郎



◎この近くの小和田家（増森一七二〇）入口にも高さ四十二センチ程の駒型の猿田彦文字庚申塔がある。正面には「大正二年　猿田彦大神　小和田由蔵」と刻まれている。

（6）薬師堂（慈光庵跡地）

ここは慈光庵の跡地である。ここには県の文化財の二十一仏板碑がある。また、毎年四月八日は薬師様の縁日で地元の人達によって賑わい、毎月二十一日は弘法大師の縁日で、地元の古老（現在は女性のみ）がここに集まり今でも細々と信仰が続いている。

7．三界万霊塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　駒型（北東向き・高さは中）
年　号　延享五年（一七四八）
［正面］
三界萬霊有縁無縁乃至法界平等利益
（梵字カ）（地　蔵　菩　薩　立　像）
延享五　戊
辰年五月吉日　施主覚心法師
［左側面］
□久兵衛
林　又兵衛
和井田茂兵衛
［右側面］
小嶋市右ヱ門
同　内蔵助
□□□□
同　□□□
小嶋市右ヱ門
同左右ヱ門
［左側面］
森田□右ヱ門
中村□右ヱ門
□沢□□
同　仁右ヱ門
林□右ヱ門
大久保庄兵衛
□田伝左ヱ門
右ヱ門
弥兵衛

8．「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　駒型（北西向き・高さは低）
年　号　天保十二年（一八四一）
［左側面］
天保十二丑年九月吉日
［正面］
（梵字カン）馬頭観世音
［右側面］
施主　中村きよ
栗原□り
関口きく

9．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』名号五番カ）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　笠付角型（北西向き・高さは高）
年　号　万治二年（一六五九）
［正面］
万治貳天己
亥　敬
（梵字「サ」カ）奉造立庚申講結衆未願成
二月吉祥日　□攸
曰

10．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三〇六番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　頭部山状角柱型（北西向き・高さは高）
年　号　元治元年（一八六四）
［左側面］
［台　石］
小島佐右衛門
中村又左衛門
林　藤右衛門
同　定吉
鈴木喜平次
須賀伊　助
立澤権兵衛
富澤八右衛門
小島善兵衛
須賀武次右衛門
鈴木七兵衛
栗原又四郎
山崎嘉右衛門
関口吉十郎
関島平　八
富澤仁右衛門
林　源太郎
鈴木平右衛門
小島武兵衛
鈴木源兵衛
中村幸　七
林　茂右衛門
黒田嘉兵衛
鹿倉四郎右衛門
［正面］
庚申塔
道
北ましはやし
西こしかや

［右側面］

東いの木戸　道

南よし川

元治元甲子年十月

小島惣右衛門
鈴木佐兵衛
百木平　六
富澤半兵衛
鹿倉八十八
見晴直　蔵
内田紋右衛門

※「いの木戸」とは榎戸（えのきど）のこと。地元では「いのきど」となまって発音していたことがわかる。
※この庚申塔を造立した人々の中で、子孫のわかっている人を参考までにあげると次の通りである。

富沢八右衛門
関島　平八
富沢仁右衛門
林　源太郎
小島　武兵衛
林　茂右衛門
黒田　嘉兵衛
鹿倉四郎右衛門
小島惣右衛門
百木　平　六
富沢　半兵衛
内田紋右衛門

11．聖徳太子像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　祠型（北西向き・高さは高）
年　号　文化四年（一八〇七）

［左側面］

文化四丁卯年
五月廿二日

［台　石］

内田忠兵衛
林　又五郎
石井吉左ヱ門
富沢金　蔵
須賀久　蔵
中村藤左衛門
金子清　蔵
辰沢権兵衛
中村次良兵衛

［正面］
（聖徳太子孝養像）
［右側面］

山崎源次郎
須賀幸　七
前田吉右ヱ門
平林浅右ヱ門
中島久　八
大塚清　吉
内野平五良
会田孫　七
渋谷文右ヱ門

12．道標付き青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一四六番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　駒型（北西向き・高さは高）
年　号　安永三年（一七七四）
［左側面］
安永三甲午二月吉日　奇進村中
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］

右こしかや道
左乃田山さき道

願主
八右衛門
源　七
□　八
久左衛門
庄左衛門
平　六
小平次

※「乃田山さき道」とは、野田（現在の千葉県野田市）の山崎へ通じる道という意味。増森と山崎とは江戸の昔から交流がさかんであった。

13．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三四番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　変形角型（北西向き・高さは中）
　　頭部上面が平らな山状様角型
年　号　文化十二年（一八一五）
［左側面］　赤岩わたし道
［正面］
（梵字ウーン）庚申塔
文化十二亥年　講中
十月吉祥日
林　幸八　小嶋惣右ヱ門
鈴木七兵衛　冨沢吉右ヱ門
百木平　六　内田口右ヱ門
小嶋佐右ヱ門　栗原又四良
冨沢八右ヱ門　関口吉十良
林　源太良　同　定右ヱ門
同　藤右ヱ門　鈴木源兵衛
横川賀右ヱ門　同　佐兵衛
須加数右ヱ門　同　喜平治
中村清兵衛　渡鳥（辺）文左右ヱ門
林　太兵衛　冨沢久右ヱ門
立沢権兵衛　鹿倉清左右ヱ門
［右側面］
榎戸わたしミち
黒田賀兵衛
山崎賀右ヱ門
鈴木政右ヱ門
冨沢仁右ヱ門
林　茂右ヱ門
小嶋善兵衛
［裏面］
越ヶ谷　道
不　動　道
増　森　村
※増林109番（寛政年間）や増林105番（文化年間）の石塔に「ばば渡し」と刻まれているのが見られ、これは増林村と上赤岩村をつなぐ渡しのことであるから、赤岩渡しとは増森村と下赤岩村を結ぶ古利根川の「馬渡し」のことをさすと思われる。「馬渡し」（孫七渡し）は、渡し舟による人の往来の他に馬も運んでいたという。
榎戸渡しとは、増森村と川藤村の榎戸を結ぶ古利根川の渡しである。

14．道標付き『成田山不動明王』文字塔（『越谷市金石資料集』不動一三番）
所在地　増森・薬師堂
石塔型式　頭部山状角型（北西向き・高さは高）
年　号　嘉永元年（一八四八）
［左側面］
嘉永元戊申九月吉日
西　こしかや
　大さかミ不動
東　赤岩わたし
　のだ　道
［正面］
成田山不動明王
［右側面］
南　よし川　道
［台　石］
小嶌金治良
鈴木朝之助
小嶌惣　吉
冨澤仁兵ヱ
鹿倉八十八
中村安右ヱ門
林　仙　蔵
金子由　蔵
増森村
四　国
同　行
黒田嘉平太
百木伊三良
山崎勇　吉
小嶌平治良
冨澤清兵ヱ
小嶌善　蔵
関嶌嘉兵ヱ
中村要　吉

（7）増森神社
元は水神社といわれた増森村の鎮守である。

15．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三五番）
所在地　増森・増森神社
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　号　文化十三年（一八一六）
［左側面］
南　吉　川　道
増森村三町野組世話人　中村吉兵衛
　須賀伝兵衛

［正面］
文化十三丙子年　名倉徳右ヱ門
森田岡右ヱ門
同　藤右ヱ門
（日月）庚申塔　須賀五良兵ヱ
冨沢友七
増田惣左ヱ門
山崎利　助
三月吉祥日　中村吉兵衛
［右側面］
須加太良兵衛
同　孫右ヱ門
内田弥兵衛
北　増　林　道　森田清　蔵
内田忠兵衛
中村庄左ヱ門
金子太良右ヱ門
須加伝兵衛
［裏面］
此方みちなし

※増森二－一九〇〇の須賀傳次氏（昭和五年生まれ）からの聞き取り調査によると、この庚申塔は、もとは増森村三丁野の須賀家（増森二－二〇〇）と南東の隣家との敷地の境界線（この境界線にはかつて小道があった）の辺りにあり、須賀家の敷地にあった当時の大きな柚の木（今はその木の子孫がある）のそばの小道に面して、中村家の方を向いて（南西向き）建っていた。この小道は、昔は北は増林、南は吉川に通じていたのであろう。その後この庚申塔は、須賀傳次氏が小学校二年生の頃（昭和十三年頃）に現在の増森神社に移転されたという。

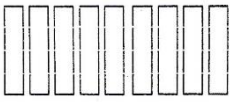
※須賀傳次氏によると、この庚申塔に刻まれている増森村の「三町野」（三丁野）の地名のいわれは、昔この地域には、初めは三軒しか家がなかったからという。すなわち、名前に「傳」がつく須賀家（増森二－二〇〇）、名前に「庄」がつく中村家、名前に「吉」がつく中村家の三軒である。この庚申塔に刻まれた名前の中の須賀伝兵衛、中村庄左ヱ門、中村吉兵衛が、その三軒にあたるのである。

参考までに、この庚申塔を造立した人々の子孫がわかるのは次の通り。
「名倉徳右ヱ門」
「森田岡右ヱ門」
「森田藤右ヱ門」
「須賀五良兵ヱ」
「冨沢　友　七」
「増田惣左ヱ門」
「山崎　利　助」
「中村　吉兵衛」
「須加太良兵衛」
「須賀孫右ヱ門」
「内田　弥兵衛」
「森田　清　蔵」
「内田　忠兵衛」
「中村庄左ヱ門」
「金子太良右ヱ門」
「須加　伝兵衛」

現在は小杉精機製作所の地となっている。

（8）中村家（増森二－四七）路傍

16．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・中村家（増森二－四七）路傍
石塔型式　駒型（東向き・高さは中）
年　号　宝暦四年（一七五四）
［左側面］



［正面］
宝暦四甲戌天
（日月）庚申供養塔（三猿）
十月吉日

※向かって右隣に祠に入った高さ三十六センチの駒型の「水神天」文字塔が安置されている。昭和九年七月建立の石塔である。

17・「三田八幡宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・中村家（増森二－四七）路傍
石塔型式　祠型（東向き・高さは中）
年　号　天保十二年（一八四一）
［正面］
三田八幡宮
［右側面］
天保十二年　丑　年
六月廿六日

（9）増森新田の稲荷社

18・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申八四番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　享保十八年（一七三三）
［正面］
享保十八丑年

（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）

惣左ヱ門
傳右ヱ門
□（増カ）右ヱ門
与右ヱ門
□（増カ）兵衛
次兵衛
伊兵衛
安右ヱ門

八月吉日

19・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一三八番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　明和七年（一七七〇）
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］

嘉右ヱ門　吉兵ヱ　由右ヱ門
与惣右ヱ門　清次郎　源右ヱ門
伊右ヱ門　伝次郎　庄八郎
喜七郎　伝六郎　吉右ヱ門
七郎右ヱ門　彦七郎　佐平治
利右ヱ門　勘兵ヱ　由右ヱ門

明和七庚寅三月吉日

20・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三七番カ）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　不詳
［正面］
□□□
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
九月吉日

※幅が約四十センチである。金石資料集の庚申塔三七番も同じなので、高さ百十センチ、幅四十センチの庚申塔三七番（元禄年間造立）かもしれない。

21・道標付き青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一九二番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　変形駒型（西向き・高さは中）
年　号　寛政十一年（一七九九）
［左側面］
右　ましはやし　道
左　こしかや
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（三猿）
［右側面］
寛政十一　己　未四月吉日

※青面金剛の下の左手には、「ショケラ」が描かれていたと思われる。

22・「弁財天」文字塔（『越谷市金石資料集』弁天六番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社
石塔型式　駒型（西向き・高さは低）
年　号　天保九年（一八三八）
［左側面］
天保九戌四月吉日
［正面］
辨財□□□（財天）　※「金石資料集」によると、「辨財天」

[右側面]
当村
別当　真正寺

※小さな祠の中に安置されている。すぐ近くには真正寺（しんしょうじ、現、増森新田センター）がかつてあった。真正寺は弁天社を所有していた。それを物語る石塔といえよう。

23．「第六天」文字塔（『越谷市金石資料集』第六天・一番）
所在地　増森・増森新田の稲荷社（増森三一九の松井家より移転）
石塔型式　祠型（南向き・高さは中）
年　号　宝暦六年（一七五六）
[左側面]
宝暦六丙
子暦
正月吉祥日
[正面]

第六天神宮

[右側面]
松井清学院長恵

※小さな祠の中に安置されている。もとは増森三一九の松井家にあった。屋号が『清学院』（清覚院）と呼ばれる松井家は、江戸時代に清学院（せいがくいん）の住職を勤めていた家柄で、第六天社を祭り、また寺子屋も開いていた。右側面に刻まれた松井長恵も寺子屋の師匠として活躍したのであろうか。
明治になると、越ケ谷の久伊豆神社の初代神主を勤めた。敷地内には、初代となった松井雄宣（かつのぶ）氏の墓石がある。そこには、

岡田勢以子　明治四年九月四日歿
　享年四十歳
前祠掌　松井雄宣之墓
池田多計子

と刻まれている。雄宣の前妻、後妻ともに名に「子」がついているので、家柄の高い出であったと推定できる。なお松井氏の後を引き継いだ宮司が池田氏のようである。戦後は現在の小林氏となる。
また敷地内には祠があり、不動明王立像、役（えん）の行者（ぎょうじゃ）と赤鬼・青鬼の像、松井雄宣氏の木像、それに中央に「（梵字ア）東照宮大権現家康公」、左右両側に「元和二丙辰」「四月十七日」と刻まれた位牌（裏側には二代から七代までの徳川家将軍の戒名なども刻まれている）が安置されている。赤鬼は前鬼、青鬼は後鬼。
松井雄宣氏の後妻となった池田多計子は、菊の御紋（十六葉八重裏菊）がついたお盆を松井家に嫁ぐ時に持ってきている。
また松井家では、清学院関係の古文書をはじめ多くの古文書を保管している。

（10）増森新田センター（真正寺跡地）

ここは、かつて真正寺があった所である。

24．百八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・増森新田センター隣の清水家墓所
石塔型式　頭部山状角型（南南向き・高さは中）
年　号　天明八年（一七八八）
[左側面]
三界萬霊一切衆生（梵字「ア」）善観法師霊位
[正面]
天明八戊申歳　行者
（梵字サ）
（梵字キリーク）　奉供養百八十八箇所二世安楽攸
（梵字サク）
六月吉祥日　善観
[右側面]
明和九辰年
（梵字「ア」）清浄心連信士
六月十九日

※『越谷市金石資料集』に掲載の「庚申二一番」「庚申九七番」「真言八番」の石仏石塔や『越谷ふるさと散歩（下）』二一六頁に掲載の明和八年の「六十六部廻国供養塔」の所在が不明である。
これは、天明を明和、八十八を六十六に見誤っての可能性がある。

25・光明真言供養塔（『金石資料集』真言八番）
所在地　増森新田センター
　無縁仏群・最前列の向かって右
石塔型式　丸彫り仏像付角型（北北東向き・高さは中）
年　号　寛延元年（一七四八）
[左側面]　[台石]
　乃至法界　願主
　　浄春
[正面]
　寛延元戊辰天
（地蔵座像）奉建立光明真言供養佛
　十一月吉祥日
[右側面]
　孝子
平等利益　中嶋源右衛門

26・青面金剛像庚申塔（『金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森新田センター
　無縁仏群・前から2列目、向かって左から5列目
石塔型式　駒型（北北東向き・高さは中）
年　号　元禄十三年（一七〇〇）
[正面]
　元禄十三
（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）
　（人名
　十月吉日　　五名）

※令和元年11月の現地見学で秦野秀明氏が無縁仏群の前列程の庚申塔No.26,27発見、後日の再調査によってNo.25,28の石仏もみつかる。大改修後の整然とした墓地のおかげで、記録に残すべき石仏の存在が4基程判明した。

27・青面金剛像庚申塔（『金石資料集』庚申塔二一番）
所在地　増森新田センター
　無縁仏群・前から3列目、向かって左から4列目
石塔型式　駒型（北北東向き・高さは中）
年　号　元禄七年（一六九四）
[正面]
　申供養也
（日月）（青面金剛像）（複数の人名）（三猿）
　元禄七　申
　　戌　八月廿五日

28・文字庚申塔（『金石資料集』庚申塔九七番）
所在地　増森新田センター
　無縁仏群・前から5列目、向かって左から4列目
石塔型式　駒型（北北東向き・高さは中）
年　号　元文三年（一七三八）
[正面]
（日）　天下泰平　元文三　戊
　午　年
（梵字「アーンク」）奉造立供養庚申講祈願成就處（三猿）
（月）　国土安全九月吉日　増森新田

※「アーンク」は胎蔵界大日如来をあらわす。

（11）吉田家（増森二四八四）路傍

吉田家（増森二四八四）の東側路傍に、昭和八年（一九三三）に遷宮されて祭られている雷電社と古峰神社の二つの祠が並んである。それらの祠の後ろには、「奉納　両社遷宮紀念　氏子中」と刻まれた高さが約百六十六センチの記念碑が建っている。ここは江戸時代に「雷電社」が置かれていた地である。

また祠の前には二基の力石が置かれている。さらに、雷電社の祠のすぐそばには、「雷神宮」と刻まれた石塔がある。

29・「雷神宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　増森・吉田家（増森二四八四）の東側路傍
石塔型式　笠付角型（南向き・高さは低）
年　号　安永二年（一七七三）
［左側面］
安永二癸巳歳四月吉日
［正面］
雷田　神　宮
※現在は、雷電（板倉町）・笠間・三峰の三社を祀る。
三社を参拝した後にお札を奉納している。

（12）森西川集会所

増林村の西川に対して、増森村の西川という意味で「森西川」という。この集会所の南側に墓地がみられる。この墓地は現在、元荒川に沿った道路の拡張工事にひっかかっている。

30・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三五番）
所在地　増森・森西川集会所
石塔型式　駒型（南向き・高さは中）
年　号　文化五年（一八〇八）
［左側面］
吉　川　道
［正面］
文化五戊辰年　寄嶋組
（日月）庚　申　講中　（三猿）
西川組
三月吉日
［右側面］
越ケ谷
大相模不動　道
［裏面］
榎戸渡　のた道
赤岩渡し
※右側面では、越ケ谷町や大相模の不動尊へ、左側面では、榎戸（えのきど）や赤岩渡し、野田への道しるべが刻まれている。

31・十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』月待八番）
所在地　増森・森西川集会所
石塔型式　駒型（北向き・高さは中）
年　号　嘉永六年（一八五三）
［左側面］
［台石］
□ふかさしこ□きたま□ん□つきでく
嘉永六丑三月吉祥日
かくれかみ□□□く
［正面］
嘉永六丑三月吉祥日
（如意輪観音像）十九夜塔
西川組
講中
□
［右側面］
みんねね□つんに

32・名号塔（『越谷市金石資料集』名号六番）
所在地　増森・森西川集会所
石塔型式　笠付角型（南向き・高さは超高）
年　号　寛文十年（一六七〇）

［左側面］
一千日廻向　（梵字サ）光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨

［正面］
一千日廻向　（梵字サク）南無阿弥陀仏　在家結衆七百余人
結衆寮坊主浄誉□心大徳
成蓮社辨誉上人大円和尚
願誉須放比丘
十誉久念比丘

［右側面］
一千日廻向　（梵字サク）願以此功徳平等施一切同発菩提心往生安楽国

［裏面］
一千日廻向　（梵字サク）南無釈迦牟尼仏　寛文十庚戌暦十月十五日

※石塔の全ての面には、奉納した人々の名前がすきまなくびっしりと刻み込まれている。「廻向」は「回向」とも書く。

33・三猿庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三番）
所在地　増森・森西川集会所
石塔型式　駒型（北向き・高さは中）
年　号　寛文四年（一六六四）

［正面］
寛文四年
□
（見猿）　平左ヱ門　□左ヱ門
□左ヱ門　太良□
（聞か猿）　□左ヱ門　□左ヱ門
三□左ヱ門　仁左ヱ門
（言わ猿）　□左ヱ門　新□
□
□
十月吉日
□

※「三猿」のみ刻まれた初期の庚申塔である。三猿庚申塔としては越谷市内最古。

34・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一七番）
所在地　増森・森西川集会所
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　貞享四年（一六八七）

［正面］
奉造立庚申堂結衆　　欽
新光寺
伝左ヱ門
平兵衛
七郎右ヱ門
源七郎
久兵衛
忠左ヱ門
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（三猿）
貞享四丁卯十月吉日　　言

※「新光寺」の文字が見られる貴重な石仏である。これにより、ここは「真光寺」の跡地とわかる。寺名で「真」の字の代わりに「新」も使われたのであろう。この地にあった寺院名を知る貴重な石塔と言える。
※これは、越谷市内最古の青面金剛像庚申塔である。これ以降、元禄年間からこの「日月・青面金剛・二鶏・三猿」の型式の庚申塔が越谷市内を含む日本各地でよくみられるようになる。

旧中島村の石仏

（1）林家（中島一－七九）路傍

1．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一一二番）
所在地　中島・林家（中島一－七九）路傍
石塔型式　舟型様上部隅丸角型（南東向き・高さは中）
年　号　寛延四年（一七五一）
［正面］
寛延四未年
（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）
八月吉祥日

◎この近くの杉山家（中島一－七六－二）の路傍に高さ五十六センチの自然石の馬頭観音文字塔（『越谷市金石資料集』馬頭三五番）が増森との村境にある。正面に刻まれた文字は次の通である。
一部破損していて解読不能の文字もある。
その後の令和二年八月の調査では、さらに破損され、その石塔の前にその代りとして新規の石塔が造立されていた。

明治二巳年
馬頭観世音
七月□□

（2）中島神社及び正福寺跡

ここは、稲荷神社と諏訪神社の両神社（ともに中島村の鎮守、現在は合祀）と正福寺（しょうふくじ）と呼ばれる寺院があった地である。

2．地蔵像付き三界万霊塔（『越谷市金石資料集』名号一八番）
所在地　中島・中島神社
石塔型式　丸彫型及び角柱型（南東向き・高さは高）
年　号　文化四年（一八〇七）
［左側面］
「台　石」
妙善法尼
刃誉鮮山信女　享和元　四月廿四日　一八〇一年
本空童子　安永五申三月十四日　一七七六年
［正面］
文化四丁卯年　念仏講中
（地蔵菩薩座像）二二界萬靈

※三界とは欲界・色界無色界。衆生が活動する全世界をさす。

三月吉日　願主　善心
［右側面］
周光童女　安永九子十月十四日　一七八〇年
教圓童女　天明六午九月十七日　一七八六年
是空童子　天明八申十二月廿二日　一七八八年

※戒名の頭に「刃」を付けるのは余程の事情があったものと思われる。四人の愛する子を相次いで亡くした哀しみから自刃を余儀なくされた母とその幼子女を弔って建立された石塔であろう。建立した人は善心であり、「刃」の文字を付けて「刃誉鮮山信女」（母の戒名）を作成した人は妙善法尼と思われる。

（3）正福寺管轄の共同墓地

中島神社そばにあった正福寺が管轄していた共同墓地である。

3．六十六部供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　中島・かつての正福寺管轄の共同墓地（中島二丁目五三）
石塔型式　頭部山状角型（北西向き・高さは中）　墓地入口入って右
年　号　天明三年（一七八三）
［左側面］
宝暦二申五月十一日　義円信士　安永九子天
梅伝心入信士　三月五日
花応英雪信女　智鏡信女　天明元丑年
明和三戌十二月廿七日　六月十三日
［正面］
（サ）　天下泰平天明三癸卯年九月吉日
願主
（キリーク）　奉納大乗妙典六十六部供養塔
達道
（サク）　国土安全武州二郷半領柳前村
［右側面］
秀岸清信女　宝暦十辰八月十七日
妙讃清信女　天明三卯六月二十八日
妙意比丘尼　宝暦八寅三月十三日

4．地蔵像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　中島・かつての正福寺管轄の共同墓地（中島二丁目五三）
石塔型式　上部丸型（北東向き・高さは中）　墓地入口入って右
年　号　宝暦六年（一七五六）

[正面]
念仏講中　真入法師延享元子
八月朔日
(カ)（地　蔵　菩　薩　像）
宝暦六丙
子九月吉祥日妙意比丘尼

(4) 小川家（中島二－八九）路傍

5．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一二七番）
所在地　中島・小川家（中島二－八九）路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは中）
年　号　宝暦九年（一七五九）
[正面]
宝暦九己
卯季
(日月)　庚申供養塔
九月十三日

※このそばに高さ七〇センチの板碑がある。

6．三猿庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一五番）
所在地　中島・小川家（中島二－八九）路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは高）
年　号　貞享二年（一六八五）
[正面]
(月)　貞享二乙
丑年
(梵字キャ）奉造立庚申講結願成辨攸
(日)　六月吉日

六郎兵へ　彦四郎
弥兵へ　作兵へ
新右門　庄九郎
七郎右ヱ門　善兵へ
安兵衛　弥五兵衛（三猿）
五郎兵へ　長左ヱ門
武四郎　長七郎
兵左ヱ門　四郎兵へ
武左ヱ門　弥五右ヱ門

※梵字キャは、十一面観音菩薩をさす。
江戸時代の初期の庚申塔の主尊は阿弥陀如来であったり、地蔵菩薩であったりして、主尊が一定していない。寛文年間（一六六一～七二）の頃から庚申様の主尊が青面金剛（梵字はウン）となる庚申塔がみられてくる。この庚申塔は寛文以降であるが、初期の庚申塔の特色がみられる貴重なものといえる。

7．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申六〇番）
所在地　中島・小川家（中島二－八九）路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは中）
年　号　正徳四年（一七一四）
[正面]
(梵字)（日月）（　青　面　金　剛　像　）（二鶏）（鬼）（三猿）
同行三拾人
正徳四甲
午天　九月吉日

《中島橋について》

中島橋の北詰めに、高さ百センチの自然石の記念碑がある。かつてはこの碑が建っていたところに元荒川の上に「荒川橋」が架かっていた。

◎「荒川橋開通紀念」の石碑
所在地　中島・中島橋北詰め
石塔型式　自然石（南西向き・高さは中）
年　号　昭和五年（一九三〇）
[正面]
荒川橋開通紀念
[裏面]
増林村前村長
今井　晃
増林村助役
山崎長吉郎
岩槻前工区長
吉澤皆三
常設委員
林　浅右ヱ門
昭和五年五月竣功
経営者
杉山末吉
経営者
鈴木吉五郎
経営者
内野清右衛門
経営者
内野勝太郎
吉川町
石工
鈴木初五郎

※記念碑の中に四人の経営者の名前が刻まれている。荒川橋の建設資金を出した地元の人たちである。荒川橋の完成後、この橋の北詰め（中島五一六の須賀家の南側）に小屋を作って、四人が交替で小屋に待機し、この橋の渡し賃を徴収した。徴収した渡し賃は片道は二銭、往復は三銭であったという。

なお、現在の中島橋は初代「荒川橋」から数えて三代目にあたる。

《中島の渡し》

かつてあった「中島の渡し」は、現在の杉山商店北側より渡し場に入り、中川を渡っていたのである。（現在は河川改修により大きく変貌）

なお、この近くには「中島の渡し」の他に、現在の吉川橋あたりにはかって「南百の渡し」があったが、明治七年にこの渡しに代わって平沼村（現、吉川市内）の徳江忠次郎が自費で作った木製の橋が架けられた。（徳江橋）

（5）鈴木家（中島二―一一九―一）の庚申塔

8．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一五三番）

所在地　中島・鈴木家（中島二―一一九―一）の東方の畑の中

中川改修工事により鈴木家敷地（中島三―六六―一）は新土手の下になる。鈴木家は中島二―一一九―一に移転、庚申塔は百以北方先の畑の中に移転する。

石塔型式　駒型（東向き・高さは中）

年　号　安永六年（一七七七）

［左側面］

奉建立庚申供養

八左右門　□兵衛
長左右門　平右門
繁右門　治　助
己之助　吉三郎
正兵衛　源治長
　　清右門

［正面］

（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）

安永六丁酉五月

［右側面］

重治良　惣　七
新　平　園右門
藤右門　勇　蔵
義右門　清治良
八兵衛　新九良

（6）送水管近くの路傍

9．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　中島・永田家（中島三―一―一〇）前の路傍

石塔型式　駒型（南々西向き・高さは中）

年　号　宝暦十年（一七六〇）

［正面］

宝暦十庚辰天

（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）

弥市　平助
吉兵衛　長松
友右エ門　八右エ門
儀左エ門　久右エ門
甚兵衛　七右エ門
藤助　永蔵
儀右エ門　由兵衛

※青面金剛が右手で衣の一端を握っているのは大変珍しい。

10．「水神」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　中島・永田家（中島三―一―一〇）前の路傍

石塔型式　祠型（南々西向き・高さは中）

年　号　文化六年（一八〇九）

［左側面］

文化六年巳年

［正面］

（正面が破損されていて不明）

［右側面］

林清左エ門

三月吉日

※『越谷ふるさと散歩（下）』の一一八頁に、「文化六年（一八〇九）の水神宮とみられる石祠が建てられている」と記されていることや、川のそばに建てられていることから、表面が破損され主尊が何か全く分からないこの石塔は「水神文字塔」ではないかと推定した。

［参考］「稲荷大明神」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　現在、中島橋の橋梁そば元荒川左岸の護岸に放置

石塔型式　祠型（南西向き・高さは中）

年　号　寛政十年（一七九八）

［左側面］

寛政十午四月吉日

［正面］

稲荷大明神

※発見者は角田久氏。他所に移しての保存が望まれる。

そばに、明治四十四年十二月造立の「馬頭観音」文字塔（駒型。高さ三八センチ、幅二二センチ、厚さ一三センチ。左側面に「願主細野金五郎」と刻まれている）も並べられて放置されている。

（平成二十六年五月）



寛政10（1798）

※本来あった場所は越谷市内か市外かも不明。

旧花田村の石仏

（1）西円寺（さいえんじ）

1．猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』猿田彦一五番）

所在地　花田・西円寺の稲荷社内（もとは西円寺前の路傍にあった）

石塔型式　自然石（南向き・高さは高）

年　号　安政五年（一八五八）

［正面］

（日月）　猿田彦大神　　天下泰平　風雨順時　真斎寿敬書印印

［裏面］

安政五戊午年十一月吉祥日

願主
栗原弥宗治
松伏村
石工茂兵エ重昌

栗原要助　黒田豊蔵
新戸長右エ門
松沢伊助
鈴木金右エ門
松沢岡右エ門
中村小右エ門
黒田弥次右エ門
染谷徳右エ門
鈴木清五良
同勘四郎
松沢所左エ門
染谷太右エ門
同彦助
同儀右エ門
同意助
同多平　黒田権右エ門
松沢政之丞　新戸藤吉
新戸八右エ門　同久右エ門
同万右エ門　同作右エ門
同吉右エ門　松沢富右エ門
同吉五良　同銀蔵
松沢定右エ門　同啓次良
同長左エ門　同平左エ門
同弥八　同利助
同庄右エ門
栗原民右エ門
染谷峰右エ門
同吾蔵

2・「天満大自在天神」文字塔（『越谷市金石資料集』天神八番）
所在地　花田・西円寺の稲荷社内
石塔型式　祠型（西向き・高さは中）
年　号　寛政十二年（一八〇〇）
［左側面］
寛政十二庚申歳
［正面］
天下泰平
天満大自在天神
国土安全
講中
三十四人
［台石］
氏子
［右側面］
九月吉祥日

「天満大自在天神」とは菅原道真に対しての「神号」。「大自在天」（シヴァ神）も「牛に乗る」という共通点から「大自在天」を選んだと推測される。（秦野秀明氏）

※もとは、西円寺前の路傍にあった。

3・「大随求陀羅尼（だいずいぐだらに）」梵字文供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　笠付角柱型（南向き・高さは高）
年　号　明和元年（一七六四）
［左側笠部］［左側面］
（五百四十六個の梵字と十九個の漢字）
（梵字ア）
［台石］
為法界万霊謹言
［正面笠部］［正面］
道性清信士
道善禅定門
宥覚清信士
道祐清信士
浄教清信士
城心清信士
（三百三十二個の梵字と四個の漢字）
（梵字アー）
霊
于時明和元年甲申十二月日
［台石］
施主俗名新戸久左右衛門

※笠部の下の首部に「梵字ハラ」（大随求菩薩の種子）が刻まれている。
于時は「時に」と読む。
［右側笠部］［右側面］
（五百四十六個の梵字と十九個の漢字）
（梵字アン）
［裏側笠部］［裏面］
（梵字アク）（五百七十個の梵字）

※「大随求陀羅尼」の呪文の梵字文が刻まれた石塔はとても珍しい。古来より、この長い梵字文を書き写し携帯すれば莫大なご利益を受け、他人がこの長い梵字の呪文を唱えているのを耳にするだけでも様々な苦難が免れると言われている。
※笠部に刻まれた梵字「ア」「アー」「アン」「アク」はそれぞれ東側、南側、西側、北側に見られるものである。
※《塔身の左側面》は、縦書きで一行三十八個の文字が十五行にわたって刻まれている。最後の行が三十三個となっている。ほとんどが梵字が刻まれているが、梵字の中に、漢字の「法界萬霊」「一切如来心印真言」「一切如来心真言」の計十九字が混じっている。
《塔身の正面》は、縦書きで一行二十四個の文字が十四行にわたって刻まれている。梵字の中に漢字の「法界萬霊」の四字が二箇所混じっている。
《塔身右側面》は、縦書きで一行三十八個の文字が十四行にわたって刻まれている。梵字の中に漢字の「法界萬霊」の四字が混じっている。
《塔身の裏面》は、縦書きで一行三十八個の梵字が十五行にわたって刻まれている。

4・十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　駒型（南向き・高さは中）
年　号　文政元年（一八一八）
［正面］
文政元寅九月吉日
（一仏）十九夜念仏供養
女人講中
※この十九夜月待塔（念仏塔）の主尊は、不詳の一仏の座像となっているが、一般的には、如意輪観音像が刻まれる。

5・十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　舟型（南向き・高さは中）
年　号　宝永七年（一七一〇）

［正面］
拾九夜念仏　　供養
　　講中
（如意輪観音像）　二世安
宝永七庚寅八月吉日　楽攸
　　講言

※講言（きょうげん）とは、謹言という意味。

6．十九夜念仏塔カ（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　上部隅丸角型（南向き・高さは中）
年　号　明和五年（一七六八）
［正面］
□□□□□　※剥落有る為に判別不能
（如意輪観音像）
明和五戊子正月吉日

7．阿弥陀像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　舟型（南向き・高さは高）
年　号　寛文六年（一六六六）
［正面］
　　奉造立阿弥陀如来念仏講中人数四十人二世安楽処
（梵字サ）
（梵字キリーク）（阿弥陀如来立像）
（梵字サク）
寛文六年丙午十一月拾五日　結衆中　敬白
　　花田邑

8．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三〇五番）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　頭部山状角型（西向き・高さは高）
年　号　文久三年（一八六三）
［左側面］
文久三癸亥年
三月中浣日建
［正面］
（日月）庚申塔　（三猿）　女講中
［右側面］
黒田長蔵
世話人　栗原□門
同　松沢源太郎
同　□吉
新戸卯之助
同　定次郎
染谷藤次郎
□んとよ
□りよつね
□あさなつ
□はつれん
□きのなか
□□し□
□□りよなつ
□□□とめ
□□□そ□
□□ほの□□
□□やすゆき
□□□かたね
□□□りそ□
□□□きませ

［台石］
※「中浣」（ちゅうかん）とは中旬という意味

9．十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』月待九番）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　万延二年（一八六一）
［正面］
　　萬延二辛酉年
（如意輪観音像）十九夜念仏供養
　　二月吉辰

10・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三九番）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　頭部山状角型（西向き・高さは中）
年　号　文政七年（一八二四）
［左側面］
文政七甲申年
［正面］
（日月）庚申塔
［右側面］
十月吉祥日

11・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　駒型（東向き・高さは中）
年　号　寛政十二年（一八〇〇）
［正面］
寛政十二庚申年　女人講中
青面金剛
九月吉祥日　拾七人

12・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　駒型（東向き・高さは中）
年　号　天保十四年（一八四三）
［正面］
天下泰平
（日月）庚申塔
五穀成就
［右側面］
天保十四卯三月□

13・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　隅丸角型（東向き・高さは中）
年　号　寛延三年（一七五〇）
［正面］
右江戸道　寛延三庚午七月吉日
（地蔵菩薩像）庚申供養
左庄内道　講中二十人　花田村

14・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・西円寺
石塔型式　角型（東向き・高さは中）
年　号　安永七年（一七七八）
［正面］
安永七戊戌天
越谷領華田邑
庚申供養塔
講中廿一人
二月吉祥日

※以上の11、12、13、14の石仏石塔が並んでいる前の南北の道は、北に向かうと花田古川に突き当たった古くからの道の名残である。

（2）山本家（花田四－二－一）路傍

15・「淡島（あわしま）明神」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・山本家（花田四－二－一）北側路傍
石塔型式　上部隅丸角型（北向き・高さは低）
年　号　寛政五年（一七九三）
［左側面］
新戸氏　遠祖近祖
［正面］
粟嶋大明神梅社
［右側面］
寛政五癸丑正月初子
当主保教

※「初子」は「はつね」と読む。

※この粟島明神の石塔は、かつては「下（しも）の病」（婦人病）に効く神様として周辺地域から盛んに参詣にきていたという。江戸時代に盛んであった淡島信仰の名残であろう。この石塔は、もとは山本隆氏（花田四－二－一）の祖父の生家であった新戸家（花田三－一八－三）にあったものである。

淡島（粟島）明神は和歌山市加太（かだ）にある淡島神社（加太神社）の神様である。婦人病に霊験のある神として広く知られた。江戸時代、淡島明神のお札を入れた神棚の箱を背負って、その縁起や功徳を唱えながら門付けをして諸国を歩いていた淡島願人（がんにん）と呼ばれる行者によって淡島信仰が広く伝えられた。地域によっては女性たちの「淡島講」もみられたという。

（3）佐藤家（花田四－二〇－一三）路傍

16．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一五七番）
所在地　花田・佐藤家（花田四－二〇－一三）南側路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは中）
年　号　安永三年（一七七四）
［左側面］
安永三甲
午十二月吉□
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］
□講中十八人　※□は「花田邑」カ

※16から後にあげる19までの石仏は、もとは花田古川（かつての元荒川）の自然堤防上の古川に沿った野道に一列に古川を背にして南西向きに並んでいた。その並び方は、向かって右から16、17、18、19と現在と同様である。
現在、古川や野道は区画整理事業の開発によって消滅している。

17．『スナッカラ地蔵』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・佐藤家（花田四－二〇－一三）南側路傍
石塔型式　丸彫り型（南西向き・高さは高）
年　号　承応四年（一六五五）
［左側面］
［台石左側面］
武州葛西領
東葛西之庄
上ノ割下小合
村
正徳寺
施主敬白
［台石正面］
［正面］
（地蔵菩薩立像）
為源海菩提也
［裏面］
承応四年
為源海三十三年菩提也　乙
未
正月廿六日

※下小合（しもこあい）村は、小合溜（こあいだめ）そばの現在の東水元二丁目付近にあった。
※承応年間には既に葛西領を東西に分けて、東葛西領・西葛西領、さらに東葛西領を上之割・下之割と分けていたことがわかる。
※もとは古川（かつての元荒川筋）の自然堤防上の野道にあった。
※この石仏に刻まれている銘文によると、源海という人物（僧侶であろう）の三十三回忌の菩提を弔うために、江戸時代の初め頃に造立したものである。面長の地蔵菩薩像である。
※「スナッカラ地蔵」の由来
地元やその周辺では、一般に「花田のお地蔵様」と呼んで親しまれていた。しかし地元では一部で「スナッカラのお地蔵様」と呼ぶこともあったという。花田の区画整理事業が行われ始めた昭和五十一年頃より「花田のお地蔵様」は「スナッカラ地蔵」として紹介されるようになる。地元に置かれた「解説板」では「スマッカラ地蔵」となっている。離れた周辺では「スマッカラ」として伝わっている。
「スナッカラ」とは地元の耕地名からきている。「花田のお地蔵様」

がスナッカラの地にあったから「スナッカラ地蔵」と呼ばれるようになったのである。「スナッカラ」は、「花田のお地蔵様」あたりから鷹匠橋（たかじょうばし）までの間の古川（昔の 元荒川 筋）の河原跡にみられる耕地をさす。その耕地名が「砂河原」という意味である。「スナッカラ」は、その「すなかわら」がなまったものと思われる。

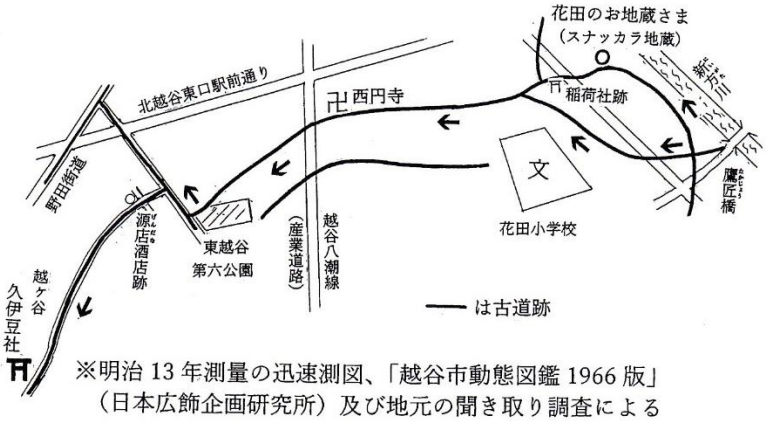
なお、対岸の増林村の人々は、「花田の地蔵」のことを「見晴らし地蔵」とも呼んでいた。それは、この「花田の地蔵」が他所よりも最も高い所（昔の元荒川の自然堤防上）に立って目立っていて、周囲を見晴らしているように思えるからである。

※花田村の村道と久伊豆神社、西円寺の薬師堂、花田の地蔵の参拝。

越ケ谷の久伊豆神社から「せんげん堀」（新方川）に架かる鷹匠橋に通じる村道があった。花田に嫁いできた嫁は、赤ちゃんが生まれた時（男の子は二十一日目、女の子は三十三日目）は、この村道を利用して最初は久伊豆神社にお宮参りをし、その次は西円寺の境内の薬師堂、そして最後に花田のお地蔵様に立ち寄ってお参りをしたのである。

花田の人々は、花田のお地蔵様は昔から子供を守ってくれる仏様として、今でも花や線香をお供えしている。

花田地区は、現在ではすっかり変貌してしまってこの村道の名残がほとんどない。



※明治 13 年測量の迅速測図、「越谷市動態図鑑 1966 版」（日本広飾企画研究所）及び地元の聞き取り調査による

※花田のお地蔵様（スナッカラ地蔵）伝説

昔、元荒川が花田の方に花田を囲むように迂回して流れていたころの話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこの地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし、堤の上に上げてお祀りしたという。

この種の話については、小島初治氏が、以前、先輩から聞いた詳細な言い伝えがある。それについてはコラムで後述する。

一方、地蔵の首の骨が折れて舟が動かなくなったとか、お地蔵様がここに流れ着いたという話も一部残っている。地蔵の首が折れたからとの話は、地蔵を初めてこの地に安置する時から首が既に折れていたとは考えにくいので、本来の言い伝えではないであろう。

なお、元荒川が天岳寺前から小林村（現在の東越谷）まで直道に改修されたのは江戸時代の初めの寛永年間の頃と推定され、「花田のお地蔵様」の造立はその後の承応年間である。元荒川がまっすぐな流れに改修されてからも、元荒川の水の一部が、昔の元荒川筋の古川を通って花田を迂回して流れていたのであろう。

天岳寺の裏からマルエツ花田店の裏を通り、新方川（せんげん堀）まで排水として流れる古川を「裏古川」といい、増林一－一五－一の 新方川あたりから、東越谷小学校の校舎のあたりを通り、元荒川につながる古川筋（流れの向きは、排水路として新方川に流れ注いでいた）を「前（まえ）古川」と呼んでいた。

◎花田三－一二－三の新戸家の庭先に自然石の表面に「大六天」と刻まれた西北西の向きの高さ六十六センチの文字塔がある。裏には「大正十年三月 新戸氏」と刻まれている。この石塔のすぐ裏に神木とされた大木がかつてあり、その周辺は木が生い茂っていた。

「花田のお地蔵様」伝説

現在では、スナッカラ地蔵とも呼ばれるようになった「花田のお地蔵様」には次のような伝説がある。

地蔵の石仏を載せた大型の船が、海の幸で財をなした人の希望で秩父の札所に送り届けるために佐原から海を出て、江戸湾から元荒川を上ってここまで来た。さらに上流に行くために、地蔵を元荒川の澪（みお※）で川の水が増えるのを待っていた。増水すると一気に上流へと川を上ろうとしたが、強風にあおられて、船が乗り上げてしまった。そこでこの地蔵はここにとどまりたいのであろうと思い、見晴らしのよいこの場所に奉納した。

※以上は、古川の対岸（新方川の左岸）にある控え土手（増林への水害を防ぐために設けられた土手道）のそばに住む小島初治（はつはる）氏（増林一－一一）による先輩たちから以前聞いた話である。

※「みお」とは、ここでは川の中で深いところという意味で、遊水池のようであったという。現在の鷹匠橋の南東、花田第一樋門の西側のあたり。

※地蔵が下流から運ばれてきたことから、言い伝えが後世になるに従って変質しながら、海のほうから運ばれて来たとの内容になったのであろう。

※歴史的事実は次の通りである。

この「花田の地蔵」を奉納した施主が、現在の葛飾区の小合溜（こあいだめ、小合溜井・こあいためい）そばの聖徳寺（正徳寺）の住職であったことから、造立された地蔵は、船で中川を通って現在の吉川橋で元荒川に入り、この花田の地にあえて迂回して運ばれたのであろう。

花田村と下小合村との中川を介した江戸初期の物資の交流や下小合村の源海との交流が伺えられる。源海は花田出身者との穿った考えもできる。

※聖徳寺についての秦野秀明氏による調査によると、江戸時代に存在していた聖徳寺は今はなく、その地には昭和初期に墨田区吾妻橋三丁目より移転してきた南蔵院（「しばられ地蔵」で有名）に代わられているという。

※正徳寺は、江戸時代初期は「正徳寺」と書かれていたが、後に聖徳太子の信仰と結び付き、「聖徳寺」と書かれるようになったと推定できる。

「花田の地蔵」と同時期の
正徳寺の承応三年の
（聖徳寺）（1654）
地蔵菩薩像



（左手宝珠・右手錫杖の地蔵菩薩立像）

（正徳）
□□寺
本願
（祈願所カ）
□□□

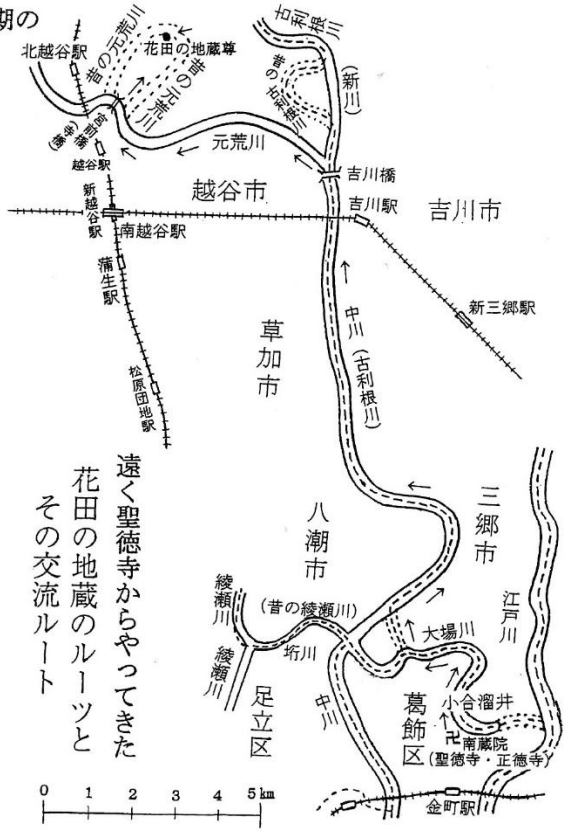
次左右衛門
□□
喜右衛門
徳右衛門
加右衛門
長右衛門

次左衛門
太郎左衛門
杢右衛門
久兵衛

得左衛門
玄番
次右衛門
茂右衛門

忠右衛門
勘四郎
作右衛門

新右衛門
九左衛門
次右衛門
茂左衛門



遠く聖徳寺からやってきた
花田の地蔵のルーツと
その交流ルート

葛飾区東水元の「南蔵院」（しばられ地蔵）墓地

18．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申六一番）
所在地　花田・佐藤家（花田四－二〇－一三）南側路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは高）
年　号　正徳五年（一七一五）
［正面］
奉剋彫青面金剛聖容庚申講人数二世安楽攸
（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）（鶏）　龔言
正徳五乙未年二月十一日　施主十三人
［裏面］
（梵字ウーン）
※もとは古川（かつての元荒川の跡）の自然堤防上の野道にスナッカラ地蔵とともにあった。
※庚申塔の鶏は、雌雄一対であらわされるのであるが、この庚申塔は一鶏のみである。

19．「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　花田・佐藤家（花田四－二〇－一三）南側路傍
石塔型式　駒型（南西向き・高さは中）
年　号　文化三年（一八〇六）
［正面］
馬頭観世音菩薩
文化三丙寅天　講
春正月吉日
中
吉右エ門
利右エ門
周右エ門
長左エ門
太左エ門
庄左エ門
庄　吉
儀右エ門
惣左エ門
乙右エ門
五右エ門

※16から19の石仏は、もとは古川（かつての元荒川の跡）の自然堤防上の古川に沿った野道に一列に南西向きに並んでいた。その並び順は、向かって右から16、17、18、19と現在と同様であった。
現在、古川や野道は区画整理事業の開発によって消滅している。

旧小林村の石仏

（1）東小林香取神社

1．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三三番）
所在地　小林・東小林香取神社
石塔型式　駒型（東向き・高さは高）
年　号　文化十一年（一八一四）
［左側面］　［台石］
文化十一年戌十一月吉日　根郷
吉川道
ふどう道　講中
［正面］
（日月）庚申（三猿）
［右側面］
越ヶ谷
岩つき道

◎そばに高さ八十センチの自然石の「敷石供養塔」がある。

奉納　敷石
東京洲崎
島根耕之助
大正十二年七月

小林村の鎮守である。
このあたりの字（あざ）は根郷（ねごう）と呼ばれ、かつては小林村の発祥地であったのであろう。

（2）東福寺

本堂の西側隣りに鎌倉時代末期の元徳三年（一三三一）や正慶元年（北朝年号、一三三二）、元弘三年（南朝年号、一三三三）などの板碑が九基安置している。関東では南朝方の年号は珍しい。
この地は下総国新方庄小林といい、元荒川が現在と違って古くは花田を迂回して北東に流れてから南西に流れて戻ってくる左岸に位置し、砂丘がよく発達していた。かつての利根川筋の河畔砂丘である。東福寺はその砂丘上にあって、市内で最も高い所（標高9．5メートル）である。東福寺はかつて境内地やその周辺には松の大木が生い茂り、「東福寺の秋月」として越谷八景の一つに数えられていた名所地であった。東福寺周辺は区画整理で開発され今は大きく変貌したが、このあたりの松の木の名残として、市役所前中央通りの東越谷三丁目交差点の北西側に今でも一本残っている。
また、周囲には松林の他に桃林も見られ、かつては「東福寺の桃」として千住市場に出荷されていたという（東福寺の佐々木純一住職）。

2．地蔵像付き三界萬霊塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（山門手前参道西側沿い）
石塔型式　丸彫り型（東向き・高さは高）
年　号　宝暦五年（一七五五）
［左側面］
［台　石］
天下泰平　国土安穏
日本回国現當
奉供養大乗妙典六十六部
二世安楽祈所
五穀成就万民豊楽
［台　石］
願主　達道
（丸彫地蔵立像）三　界　萬　霊
圓心法師　菩提也
為　蓮通信女
［台　石］
俗名
嶋根利右衛門
［裏面］
［台　石］
于時
乙
宝暦五亥歳
十一月吉祥日
武州埼玉郡
新方領小林村

3．地蔵像付き六十六部供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（山門手前参道西側墓地）
石塔型式　丸彫り型（東向き・高さは高）
年　号　正徳三年（一七一三）
［左側面］
［台　石］
為眞運清信女證大菩提也
［正面］
［台　石］
（丸彫地蔵立像）乃□□□□
［右側面］
［台　石］
為浄徹清信士填證菩提也
［裏面］
武州埼玉郡新方領小林村
天下泰平　国土安全　願主
奉納大乗妙典六十六部現當所願成就所
武運長久　万民豊楽　久眞
癸
正徳三　十月吉日
巳
※［裏面］この台石は前後が逆に設置され、正しくはこの［裏面］が［正面］となる。

4．地蔵像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（山門手前参道西側沿い）
石塔型式　舟型（東向き・高さは高）
年　号　寛文二年（一六六二）
［正面］
奉造立地蔵菩薩　念佛講人□二世安楽処願主妙蓮社尼
（梵字「カ」）（地　蔵　菩　薩　立　像）
于時寛文二天九月吉祥日　敬白

5．石灯篭供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺の西側墓地参道そば
石塔型式　笠付角型（東向き・高さは高）
年　号　元禄二年（一六八九）
［正面］
元禄二年己
巳天白
奉造立石燈籠為除暗遍明也
閏正月吉日　敬
［右側面］
造主
須賀市郎兵衛

6．地蔵像付き三界萬霊塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺参道　※万霊塔の前の左右一対の石灯篭
石塔型式　丸彫型（西向き・高さは超高）　［向かって右側の灯篭正面］
年　号　享保十二年（一七二七）　丙　辰　九月吉祥日
［左側面］　［　台　石　］　元文元年　伯蓮社称誉浄念大徳
称誉浄念大徳
［正面］　三界萬霊
（丸彫り地蔵菩薩立像）　（梵字ア）
［右側面］　［向かって左側の灯篭正面］
［裏面］　享保十二丁未年　元文元年　丙　辰　九月吉祥日
九月吉日　伯蓮社称誉浄念大徳

7．法華経・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品一八）
所在地　小林・東福寺参道
石塔型式　宝篋印塔（西向き・高さは超高）
年　号　文化十二年（一八一五）
［左側面］
法印長深　法印快隆
法印瑜範　法印如海
法印観慧　法印快定
旹文化十二乙亥載二月
発願現住　法印栄倫
助願　法子徳善
法子楽瑞
法子長心
法子楽山
法子即成
心光利現信女
智了童女
釈栄輪信士
妙寿法尼
宥金童女
芳顔清信女　橋本氏
幽念妙専信女
光善童子
香蓮童子
鈴木圭吉
黒田伝吉
会田祥寿
島根金兵衛
当村他村経筒
戒名記入□
為先祖代々一切
精霊也
先祖一切聖霊小島吉右衛門
先祖一切聖霊小島藤□
田村屋新助
江原富由
法子賢造
道蓮信士
妙蓮信女　薬屋清五郎
円浄信士　伊之助
［右側面］
若有有情能於此塔
一華一香礼拝供養
八十億劫生死重罪
一時消滅生免災殃
死生仏家若有応堕
［裏面］
阿鼻地獄若於此塔
或一礼拝或一右繞
塞地獄門開菩提路
塔及形像所在之処
一切如来神力所護
［正面］
法華経千部
供養塔
普門品萬巻
寄進　会田九右衛門
先祖　塩屋吉兵衛
池田屋太兵衛
祖代　江原新蔵
同妻　初
会田藤七
会田孫七
島根宇平次
増田平左衛門
会田才兵衛
諏訪山清次郎
江原弥三郎
一切聖霊　須賀源七
会田清兵衛
島根吉平
会田善蔵
四組念仏講中
遊間佐伝□
普門品講中
江原新内
須賀与兵衛
須賀安兵衛
会田右源次
須賀倉之助
会田源右衛門
会田金右衛門
島根与市
鈴木半右衛門
吉元弥兵衛
江原幸助
島根三良兵衛
会田弥助
井上弥五郎
山口茂助
堀江長右衛門
島根五兵衛
山口惣七
会田林蔵
須賀太左衛門
山口善左衛門
会田利左衛門
石工　大沢町　八五郎

※この宝篋印塔の右側面から裏面にかけて刻まれた文は、宝篋印陀羅尼経から引用したものである。参考までに意味は次の通り。

若し有情ありて、よく此の塔に於いて、一香一華をもって礼拝供養すれば、八十億劫生死の重罪は一時に消滅す。生まれては災殃を免れ、死しては仏家に生ず。若し応（まさ）に阿鼻地獄に堕すべきこと有るも、若し此の塔に於いて、或いは一たび礼拝し、或いは一たび右に繞（めぐ）れば、地獄の門は塞ぎ、菩提の路（みち）は開く。

そして、続けて、

塔及び形像の所在する処には、一切如来の神力が所護す。

と刻まれている。

8．十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　小林・東福寺の東側墓地（山門東側隣りの住職墓所）

石塔型式　舟型（北向き・高さは中）

年　号　享保七年（一七二二）

［正面］

施主五拾人

十九日女念仏講中

奉造立（如意輪観音像）

享保七壬

寅　十月十九日

9．観音像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　小林・東福寺の東側墓地（山門東側隣りの住職墓所）

石塔型式　舟型（北向き・高さは中）

年　号　延宝元年（一六七三）

［正面］

念仏講中

（観音菩薩像）

延宝元年丑十月吉日

［台石］

半兵へ　市右ヱ門　□左ヱ門

祢（弥）五兵へ　久兵へ　権右ヱ門　□兵へ

五郎左ヱ門　五兵へ　市兵へ　仁兵へ

新方之内

小林村

権左ヱ門　勘右ヱ門　□右ヱ門　又左ヱ門

庄三郎　清兵へ　□右ヱ門　甚五兵へ

祢五左ヱ門　吉兵へ　伝兵へ　□□

（弥カ）

10　青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　小林・東福寺の東側墓地（薬師堂の東）

石塔型式　変形駒型（東向き・高さは高）

年　号　享保五年（一七二〇）

［正面］

奉供養庚申講人数八十五人現当二世諸願成就所

（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）

享保五庚子八月吉祥日　武州新方領小林村人数敬白

※元は、地元の開発で失った観音堂（増田卓司家管理）墓地にあった庚申塔。

11．地蔵像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）

石塔型式　舟型（南向き・高さは中）

年　号　不詳

［正面］

右建立之志者為男念仏講中二安禾也

（梵字カ）　施主　都合五十一人

（地蔵菩薩立像）

施主　都合十九人

右建立之志者為地蔵講中世大願成就也

※この地蔵は両手に薬壺のような形に描いてしまった宝珠を持つ。

※「二安禾」＝「二世安穏」か。二世とは現世と来世

※「世」＝「二」の「二」が抜けたのか。

12．地蔵像付き供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　享保三年（一七一八）
［正面］
（梵字カ）
（　数珠を持つ　地　蔵　菩　薩　立　像　）
戊
享保三　戌九月廿四日施主須賀兵庫

13．地蔵像付き供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　不詳
［正面］
右建立之志者為地先祖代之性霊菩提也
施主須賀本衛門
（梵字「カ」）
（　合掌する　地　蔵　菩　薩　立　像　）
施主清水新衛門
右造立之意趣者為二親之性霊菩提也

14．地蔵像付き供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　享保三年（一七一八）
［正面］
右志者為歌心童女秋孝童子春智童女
紅玄童子菩提也
（梵字「カ」）
（　幡を持つ　地　蔵　菩　薩　立　像　）
施主嶋根八左衛門
享保三戊戌九月□四日　※□＝廿？

15．地蔵像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　享保三年（一七一八）
［正面］
右建立之意趣者為□中女人念仏講二世大願成就也
（梵字「カ」）
（　宝珠と錫杖を持つ　地　蔵　菩　薩　立　像　）
戊
享保三　戌九月廿四日　施主　村仲□□□之女人

16．地蔵像付き墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東隅・増田家墓所）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　享保三年（一七一八）
［正面］
右造立之志者為霖故鏡覚清信女菩提也
（梵字カ）
（　幡を持つ　地　蔵　菩　薩　立　像　）
山□□□
戊
享保三　戌　九月廿四日

17．大日如来像付き光明真言塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺の東側墓地（北東の角の増田家墓所）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　宝永八年（一七一一）
［正面］
光明真言一百万遍二世大願成就
奉造立供養大日如来
（梵字アーンク）（胎蔵界大日如来像）
宝永八辛
卯歳二月八日
光明真言結衆中敬白

18．大日如来像付き光明真言塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺の東側墓地（北東の角の増田家墓所）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　正徳三年（一七一三）
［正面］
奉造立供養大日如来光明真言一百万遍□□二世大願□□（成就）
（梵字アーンク）（金剛界大日如来像）
正徳三癸巳歳六月吉日　光明真言結衆中敬白

19．十九夜念仏塔ヵ（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺の東側墓地（北東の角の増田家墓所）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　天明四年（一七八四）
［正面］
念仏講中
（如意輪観音像）
天明四辰二月吉日

20．地蔵像付き供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・東福寺（東側墓地の北東隅・増田家墓所）
石塔型式　舟型（北向き・高さは中）
年　号　不詳
［正面］
右建立之志者為善秋信菴貞信女善尊信士菩提也
施主増林村鈴木次郎兵衛
（梵字「カ」）（宝珠と錫杖を持つ地蔵菩薩立像）
施主須賀太兵衛
右造立之意趣者為浄慶信士夢幻童子證菩提也
同名兵四郎

※増田家については最後の頁の「今はなき東福寺の鬼門にあった観音堂と落ち武者伝説」を参照のこと。

（3）会田家（東越谷二－二－二）路傍

21．道標付き『庚申様』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・会田家（東越谷二－二－二）西T字路の角
石塔型式　不詳（西向き・高さ中）
年　号　不詳
［左側面］
（不詳）
［正面］
［台石］
□□弥五□
□□平七
□□七
□□門
□□吉
□□門
□□門
□□
□□半□郎
山口長吉
□水清蔵　※清水ヵ
須□孫□市　※須賀ヵ
清水弥□門
□田新左ヱ門　※会田ヵ
山口藤兵衛
［右側面］
（不詳）

※会田家はこの周辺では昔から唯一の民家であった。そして会田家前の元荒川そば路傍には昔から道しるべを兼ねた石仏があった。しかし、心ない人によって破壊され、残念ながら、その石仏の表面や両側面がかなりはがれた状態となってしまった。
江戸時代は、今の中土手（なかどて）のように元荒川の瓦曽根よりの中央には松土手があり、そこから瓦曽根や小林（現、東越谷）の両岸に続く道があった。小林につながる道を進むと対岸の小林の土手道と会田家に突き当たった。その土手道にこの道しるべが刻まれた石仏があったのである。地元の人たちはこの石仏を「こうしん様」と呼んできた。多分、庚申塔のことであろう。会田禮（大正八年生まれ）氏によると、その道しるべには、江戸何里、野田何里とか刻まれていたと言う。残念ながら今となってはこれ以上のことはわからない。むろん造立年月日や石塔型式もわからない。今はこのT字路角地に移転されて、平成九年九月に会田禮氏によって新たに造立された三猿像石仏（三猿の像が刻まれている）と一緒にひっそりと祭られている。

（4）山田家（東越谷一－三－四）路傍

22・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・山田家（東越谷一－三－四）路傍
石塔型式　駒型（南東向き・高さは中）
年　号　天明四年（一七八四）
［左側面］
天下泰平国土安全
［正面］
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
［右側面］
天明四甲辰十一月吉日

須賀安兵衛
会田乙治郎
清水治郎左衛門
江原与四郎
山口惣左衛門
江原幸衛門
嶋根久兵衛

会田□七（孫七カ）
鈴木半衛門
山口長兵衛
嶋根吉平
清水佐兵衛
堀江長衛門
山口佐五兵衛
山口庄兵衛
山口治兵衛
嶋根与市
須賀善衛門
井上市衛門
浜野平八

須賀吉重郎
嶋根亦七
会田文衛門
嶋根吉左衛門
是放
須賀与兵衛
須賀源兵衛
須賀清左衛門

（5）会田家（東越谷三丁目）邸内

23・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・会田家（東越谷三丁目）邸内
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　号　嘉永二年（一八四九）
［左側面］
嘉永二酉年四月吉日
［正面］
（日月）庚申塔（三猿）
［右側面］
水神宮

※石の劣化が進み、表面の文字が剥がれ落ちている。

（6）清水家（東越谷三丁目）邸内

24・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・清水家（東越谷三丁目）邸内
石塔型式　駒型（東向き・高さは中）
年　号　寛政十一年（一七九九）
［左側面］
願主
小林村
［正面］
寛政十一年己未
馬頭観世音
二月吉日

◎清水家の邸内にはさらに、「辨財天」と刻まれた高さ五十八センチの自然石の弁財天文字塔と「木花開耶姫神」と刻まれた高さ四十四センチの駒型の木花開耶姫文字塔がある。年代はともに不祥である。
この清水家南側路傍に荒神（こうじん）文字塔がある。次の通りである。

25・「荒神」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　小林・清水家（東越谷三丁目）南側路傍
石塔型式　角型（もとは頭部山状角型カ、南向き・高さは中）
年　号　明治二十一年（一八八八）
［左側面］
明治二十一子二月十一日
［正面］
荒神
［右側面］
嶋根□□
山口長吉
鈴木□□
會田□□

嶋根長七
山口庄兵ヱ□
嶋根□□

須賀安兵ヱ
清水□□
嶋根久右ヱ門
鈴木傳三郎人
井上市太郎

※現在、「荒神塔」は西方の日枝神社の裏に移されている。

※右側面に「人」という文字が刻まれているのがわかるが、これは「セハ人」（世話人）と刻まれていた一部と思われる。

※かつては荒神講が毎年二月十一日に地元の十一軒で持ち回りで行われていた。宮元（講元）は東越谷一丁目の香取社そばの須賀家である。しかし、この荒神講は平成九年（一九九七）頃に廃止された。

※荒神文字塔の前の道は古道である。

（7）鈴木家（東越谷三丁目）邸内

26．「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　小林・鈴木家（東越谷二丁目）邸内

石塔型式　駒型（東向き・高さは中）

年　号　文化七年（一八一〇）

［左側面］

文化七午歳　施主

六月吉日　半右衛門

［正面］

（梵字サ）馬頭観世音

［右側面］

四国八十八箇所□（移カ）東福寺

□（六十八カ）番　廿七番

※「半右衛門」とは、鈴木家の先祖である。

※東福寺は、武蔵国の新四国八十八箇所の一つで、二十七番にあたる。武蔵国八十八箇所の札所巡りは、江戸時代後期（下町タイムス社の「江戸・東京札所事典」によると、文化二年）に創始され、廃れた後の明治十六年に再興され、一番の西新井大師（足立区西新井）から始まり、南足立郡、北足立郡、南埼玉軍の三郡に及び、三郡をめぐる「送り大師」として再び盛んになった。

27．越谷八景の「水神」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　小林・島根家（東越谷二―二〇―三）邸内

石塔型式　駒型（東向き・高さは低）

年　号　大正五年（一九一六）

［左側面］

大正五年二月七日佛男

［正面］

妙法水神　大正五年十二月二十七日

小水神

島根忠一

［右側面］

昭和六年九月廿日

嶋根新之助

※この石塔が祭られていた水神社は、元は瓦曽根溜井の小林村側の中洲の島にあった。越ケ谷町の漢詩人である山本梅塘（ばいとう）によって明治初期に唱えられた『越谷八景』のうちの「水神の落雁（らくがん）」の水神社を指した。その水神社のそばにあった『妙法水神』と刻まれた石塔が、現在は島根婦久（東越谷二―二〇―三）宅に祭られているのである。

水神社は昭和二二年（一九四七）のカスリーン台風にも流されず残ったと言う。しかし、昭和三八年（一九六三）頃からの瓦曽根溜井の用排水分離の大工事がきっかけで取り壊される運命となり、水神社とそばにあったこの石塔は水神社とともにこの水神社を守っていた島根家邸内に移されたのである。水神社の祠の中には水神様の神体はなかったという。石塔は、現在も島根家に祭られ、保管されている。

（8）浜野家（東越谷八-24-16）路傍

浜野家は屋号を「追分（おいわけ）」と呼ばれた。それは、東北東よりきた道が浜野家の南東隣で西に向かう道と南西に向かう道の二つに分かれて二股の道路（追分）となっていたからである。そこには寛政九年（一七九七）に造立された道標石塔（『越谷市金石資料集』道標六番）があった。この石塔には、右は岩槻や慈恩寺、左は江戸道という意味の道しるべが刻まれていた。しかし道路工事によって西に向かう道路（岩槻方面）が廃止され、そればかりか道標石塔が行方不明となってしまったのである。とても残念なことである。（下図参照）

なお『越谷市金石資料集』道標六番に記載された記録によると、年号は「寛政九・二・吉」、所在地は「東小林八六二一」、主銘及び脇銘は「右いわつき　志をんじ　左江戸道」、石塔型式は「駒型」、大きさは「六五×三〇×一五」となっている。

東福寺の鬼門にあった観音堂と落ち武者伝説

小林11から20までの石仏は、元は東福寺の鬼門(艮、北東)に観音堂墓地にあった。観音堂は増田家が管理するお堂である。現在の東越谷一丁目14、13、東越谷三丁目10、11の交差点の北隣あたりの現在の道路上にあった。開発によって観音堂は廃棄され、その本尊と墓地は東福寺に移転した。増田家については　次のような言い伝えがあった（大正十一年生まれの増田卓司氏）。

増田家の先祖は、関ヶ原の戦いで敗れてこの地にやって来た落ち武者で、東福寺の北東の鬼門にあたる所に観音堂を建て、屋敷はその南西側（現在の交差点の西隣りの道路あたり）あたりに構えたが、農業を行なうために現在地の東越谷八丁目五の四に移り、今日にまで至っている。また、その落ち武者の息子は増森の三丁野に移り、同様に農業を行なったという。

小林村の追分にあった道標石塔と古道

